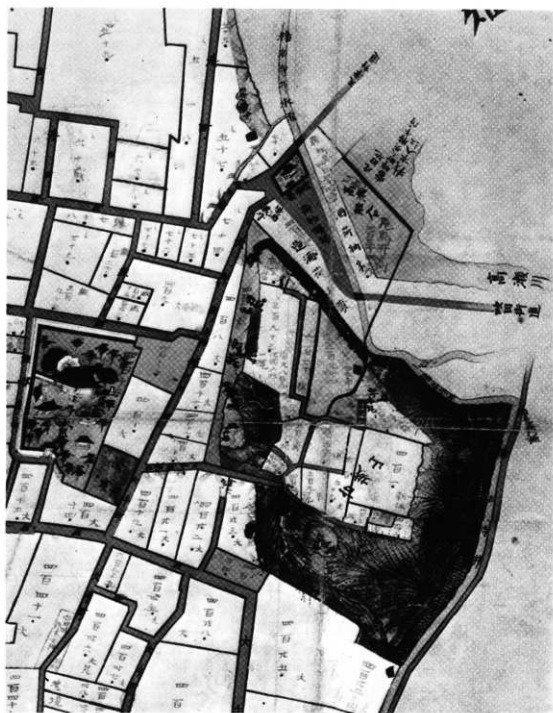


有岡城跡発掘調査報告書Ⅴ

昭和58年3月

伊丹市教育委員会



天保15年伊丹郷町間繪圖(部分)

武田八郎氏所藏

有岡城跡発掘調査報告書V

目 次

序	I
有岡城跡第10次発掘調査報告	1
有岡城跡第5次発掘調査報告	61
有岡城跡第7次発掘調査報告	89
有岡城跡第9次発掘調査報告	91

凡 例

- 本報告書は、有岡城跡第10次発掘調査に伴って作成したものであるが、伊丹市文化財保存協会の援助により、有岡城跡第5・7・9次発掘調査報告を急ぎ取りまとめ合冊にしたものである。
- 昭和54年12月28日付で有岡城跡が国史跡指定を受けたため、本報告書から名称を「伊丹城跡」から「有岡城跡」に変更し、「有岡城跡発掘調査報告書」とした。よって、「伊丹城跡発掘調査報告書」Ⅰ～Ⅳと「有岡城跡発掘調査報告書」Vは一連のものである。

序

昭和50年度以来、国鉄伊丹駅前整備事業に伴って実施してきました有岡城跡の発掘調査やボーリング調査は、大小あわせて第10次をかぞえ、今年度で8年になります。その間、伊丹城時代・有岡城時代の貴重な遺構・遺物を多数検出し、多大な成果をあげてまいりました。

昭和53年1月には、これらの成果をふまえて有岡城跡の主郭の一部・猪名野神社境内(惣跡)およびその惣構えの輪郭の国史跡指定を申請し、伊丹市発展の基礎となった城跡保存の立場を明確にいたしました。それに対し、文化庁はその重要性に鑑み、昭和54年12月28日に有岡城跡の主郭部・猪名野神社境内・惣構えの西側輪郭を史跡に指定しました。さらに、その後は惣構えの東側輪郭・堀跡の追加指定を考慮した保存対策に取組みつつあります。有岡城跡史跡公園整備については、昭和59年度までには土地買上げを完了する計画であり、また、昭和58年度から一部整備事業に着手する予定であります。

それに先だって、城跡の北西部に残存する堀跡の発掘調査を国庫補助事業で、昭和57年7月から1ヶ月余にわたって有岡城跡第10次発掘調査として実施しました。調査は、昭和50年当初から発掘調査団長であった広島大学工学部教授・鈴木 充氏の指導を得るとともに、大阪経済法科大学助教授・橋本 久氏を新団長に迎えて進められました。発掘調査は夏の炎天下にもかかわらず、調査に参加くださった方々によって多大な成果をおさめることができました。発掘調査関係者はもとより、公私ともに御協力いただいた方々に厚く感謝の意を表する次第であります。

今後とも、より一層城跡の調査・保護につとめるとともに、有岡城跡の保存整備事業を推進し、永く城跡を顕彰してまいる所存であります。

昭和58年3月31日

伊丹市教育長 佐 坂 茂 男

有岡城跡第10次発掘調査報告書

目 次

I. 発掘調査の経過	1
1. 発掘調査に至る経過	
2. 調査の組織	
3. 調査の経過	
II. 発掘調査の概要	3
1. 調査地区	
2. 調査方法	
3. ボーリング調査の結果	
4. 調査の結果	
III. 遺 物	12
IV. ま と め	15
V. 遺物観察表	18

図・図版目次

図1. 有岡城跡範囲及び国史跡指定図	1
図2. ボーリング調査による地層推定断面図	5
図3. 土塁と堀との関係図	7
図4. 発掘調査地区図	8
図5. 発掘調査平面図	9
図6. 第1・第2トレンチ断面図	10
図7. 第3トレンチ平面図及び断面図	11
図8. 第2トレンチ出土漆器碗	14
図9～17 遺物実測図	40
図版1～4 遺構写真	49
図版5～10 遺物写真	53

凡 例

○本報告書は伊丹市教育委員会が国庫および県費補助金 500万円（国 250万円、県 125万円、市125万円）を得て発掘調査を実施した昭和57年度有岡城跡発掘調査の報告書である。

○本報告書の編集は、有岡城跡調査団が担当し、執筆は浅岡俊夫が行なったが、ボーリング調査の結果は㈱ソイルコンサルタンツが担当した。図は浅岡、田中久雄が作成し、写真は遺跡・遺物とも浅岡が撮影した。

有岡城跡第10次発掘調査報告

I. 発掘調査の経過

1. 発掘調査に至る経過

有岡城跡^①の発掘調査は昭和50年度から開始され、昭和57年にはボーリング調査も含め第10回を数えるに到った。そのうち、昭和53年度までに実施された4次分の調査結果が『伊丹城跡発掘調査報告書』Ⅰ～Ⅳとして公表され、それまで知られることのなかった城郭の規模や内容の一端が明らかにされたのである。その調査成果に加えて、惣構えの形態をいまに留める有岡城に注目した文化庁は、昭和54年12月28日、主郭の一部と猪名野神社境内及び惣構えの西側輪郭を国史跡に指定した。(図1参照)

史跡指定に伴って主郭部の史跡公園計画が策定され、昭和54年度から用地買収や基本設計等が行なわれている。主郭の指定地は、主郭の北西隅に残存する土塁や堀跡を含む3,320.15㎡であるが、昭和56年度までに買収が完了したのは、荒村寺残地・金光教跡地・大手町公園用地・伴夏子氏宅地の2,130.09㎡である。このうち、大手町公園用地と伴夏子氏宅地は未発掘調査地区である。昭和57年度の調査対象地区の選定にあたっては、この両地区から選ぶことにした。

そこで、昭和57年度の発掘調査の目的を堀の規模・形態等の調査にしばり、主郭の北西隅堀内にある伴夏子氏宅地を中心に、堀跡の発掘調査を計画した。発掘調査は国庫補助金 500万円(国 250万円・県 125万円・市 125万円)を得て、昭和57年7月から実施した。

2. 調査の組織

発掘調査は、伊丹市教育委員会を調査主体とし、調査団長に橋本 久(大阪経済法科大学助教授)を委嘱し、前調査団長・鈴木 充(広島大学教授)の協力を得て、浅岡俊夫(伊丹市教育委員会)が調査員として実施した。事務は伊丹市教育委員会社会教育課(課長大沢欣也、主査田中敬彦、主任坂根憲治)が担当した。発掘調査及び整理作業にあたっては、地元の手町自治会(会長吉田昌功)、練染の川組、㈱ソイルコンサルタンツ、伊丹市立博物館、伊丹市文化財保存協会等から多大な協力・援助を受けた。記して感謝の意を表したい。

〔調査・整理作業参加者〕

小西規雄(県立西宮今津高校教諭)、中島正善(浪速高校教諭)、岸本薫英(奈良大学OB)、吉岡



図1 有岡城跡範囲及び国史跡指定図

康子（大阪教育大学OB）、伊井展比呂（駒沢大学生）、田中久雄（奈良大学生）、鍛冶 淳美（陶磁器研究者）、植村芳子（主婦）

（協力者）

宮本 博（県立神戸商科大学勤務）、田中 一（高槻市立如是中学校教諭）、武田八郎（無職）

3. 調査の経過

発掘調査は7月20日から開始し、8月27日に終了した。作業は、まず土層の状況を把握するために、トレンチ設定区域のほぼ中央部に3本の10m ボーリング調査を実施したうえ、各トレンチとも表土下約 1.2m まで機械掘削をし、以後手掘りによって発掘をすすめた。作業の進行状況は下記のとおりである。

7月20日 有岡城跡北西隅遺跡内で3ヶ所に土層確認のボーリング調査（深さ10m）を開始。

21日～22日 ボーリング調査及び発掘調査区域内の草刈り。

23日 ボーリング完了し、第1・第2トレンチを設定。

24日 発掘調査機材を現地へ運搬する。

26日 発掘調査地区全景写真撮影。第1トレンチを機械掘削し、発掘調査を開始。

27日 第1トレンチ堀内側に犬走り状の遺構を検出。第2・3トレンチの機械掘削。

28日 第1トレンチ堀中央部で、2列の杭列に横材を組み合わせた暗渠状遺構を検出。

29日 第2トレンチ発掘開始。

30日～8月9日 第2トレンチ発掘継続。

8月2日 第1トレンチ南壁断面実測。

8日 「有岡文化財愛護少年団」結団会、その後、発掘調査現地説明会。

10日 第2トレンチ写真撮影。第2トレンチ断面実測開始。第3トレンチ発掘開始。

11日 第2トレンチ断面実測完了。

12日 第3トレンチ発掘完了し、写真撮影。平板用ポイント杭を設定。

13日～14日 第3トレンチ写真撮影、および断面実測。

17日 第2・3トレンチ平板測量開始。

18～19日 第1トレンチ堀底の追求。

20日 第1トレンチ発掘完了し、写真撮影。第1・第3トレンチ平板測量。

21日～24日 平板測量及び実測作業等。

25日～26日 各トレンチ埋め戻し作業。

27日 機器材、発掘遺物を引き上げ、現地調査終了。

なお、出土した遺物は博物館へ搬入後、ただちに遺物洗浄、マーキング、遺物分類、遺物実測、写真撮影などの遺物整理を行った。

II. 発掘調査の概要

1. 調査地区

有岡城跡は伊丹段丘の自然地形を利用して構築されており、その主郭は、伊丹台地が猪名川にむかってわずかに張り出した所に立地する。しかし、主郭の大部分は国鉄福知山線伊丹駅や県道伊丹停車場線等により破壊され、西側部分が写程残存している程度である。伊丹駅前そばにそびえる高台がそれにあたる。しかも主郭の北西隅に残る土塁跡と堀跡の一部を除くと、その面影はほとんど留めえない状態にある。



位置図 (1/10,000)

その土塁と堀跡は、伊丹台地が張り出すつ根部分に位置し、堀跡は幅10m～17mの窪地になって、その痕跡を残している。堀跡の西側には幅3mの南北道路がついていて、伊丹段丘をその窪地に沿って下り、その段丘下で一般に「雲正坂」と呼ばれる東西道路と交差している。この2本の道路が交差する段丘下は「雲正ノ下」と呼ばれて、江戸時代、伊丹酒を江戸へ積み出した高瀬舟の船着場があった所として知られている。

今回、調査対象とした地区は、主郭北西隅に位置する堀跡で、地番は伊丹市伊丹1丁目583-7、577-1・2・13にあたり、「雲正の下」で交差する道路が西側と北側の境界をなす。対象面積は、伴夏子氏宅地519.⁸⁵m²、伊丹市有地78.⁹⁴m²、国鉄所有地9.⁷⁴m²の合計608.⁵³m²である。調査地区の地形は、南端部が約1mの段差をもって最も高い位置をなし、全体に南から北へ低く下がり、最高部と最低部との高低差は1.5m以上を測る。

2. 調査方法

調査地区は南から東側へまわり込む円弧状の地形を呈するため、放射線状に3本のトレンチを設定し、南から東側へ第1・第2・第3トレンチと命名した。

第1トレンチは、南側の地形が最も高くなる所を選定した。但し、南端の境界線から5m離れてトレンチを設定した。トレンチの規模は長さ12m、幅6m。

第2トレンチは、調査地区のほぼ中央部で、丁度北西隅のコーナーの所に設定した。トレンチの規模は長さ19m、幅6m。

第3トレンチは、堀が東側へまわり込んだ所で、県道伊丹停車場線に接して、長さ10m、幅2mの規模で設定した。

なお、各トレンチとも、堀の深さや基本土層等の予備知識を得るために、10mボーリング調査を発掘調査前に実施した。ボーリング箇所は各トレンチのほぼ中央部を選定し、トレンチ名と同じくNo.1～No.3までの番号を付した。

3. ボーリング調査の結果

有岡城跡北西堀ボーリング調査として、機械ボーリング3ヶ所を行なった。機械ボーリングは低速ロータリー式ハンドフィールド型ボーリング機械を使用し、掘進は無水掘とした。試料採取は土の緊密度と試料採取を併用した標準貫入試験を実施するとともに、コアボーリングにより試料採取を行なった。標準貫入試験はJIS A 1219に従い実施した。

当調査地区付近は、一般に上部洪積層と呼ばれている段丘堆積物からなる段丘層である。また、調査地の地盤構成は、地層推定断面図に示すように沖積層と段丘層に分けられる。以下これらを調査結果に基づいて説明する。

<段丘層> (T)

本層は仮BM-3.40m～5.85m以深に分布する地層で、上下部砂礫層および上下部粘土層により構成される。

粘土層は、第1粘土層(Tc1)と第2粘土層(Tc2)に分けられる。第1粘土層は調査地点No.1で2.0m、調査地点No.2で1.05mの礫混り粘土・砂質シルトおよび砂質粘土で調査地点No.3では確認されない。N値は、4～5の「中位」のコンシステンシーで、色調は暗灰色～暗青灰色である。第2粘土層は調査深度内の最下部の仮BM-8.90m～9.46m以深に分布する。本層は伊丹粘土層と思われ、全体に少量の微砂を混入する比較的均質な粘土である。色調は一部褐灰色であるが、緑青灰～青灰色を呈す。

砂礫層も粘土層と同様に第1砂礫層(Tg1)と第2砂礫層(Tg2)に分かれる。第1砂礫層は、段丘層と沖積層の境に薄く分布する。部分的に細粒分を混入し、礫径は3mm～20mmである。N値は11～36で「中位」の締り具合である。第2砂礫層は伊丹礫層と思われ、全体に粘土分を混入する。礫は風化した歪角礫および円礫で、礫径は5mm～50mmである。N値は30～50以上を示すが、バラツキがある。色調は褐色系である。

<沖積層> (Al)

本層は段丘層上に堆積した地層で、砂礫・砂(Als)および粘性土(Alc)で構成されているが、礫・砂混り粘性土が主体となっている。

砂礫および砂層のN値は4～31を示し、大半が10以下の「ゆるい」状態である。色調は褐色系である。粘性土層は沖積層中の主体となっている地層で、礫および砂を混入する。N値は1～8程度で大半が5以下の「やわらかい」状態である。色調は暗灰色～暗灰褐色である。

以上、調査の結果について述べてきたが、仮BM-3.40m～5.85mの段丘砂礫層上面が堀の底面と推察され、この堀底面は地層推定断面図に示すように調査地点No.3に向かって深くなっている。(株)ソイルコンサルタンツ)

調査実施数量

地点	掘進深度[m]	標準貫入試験[N]
No.1	10.30	14
No.2	10.00	17
No.3	10.20	20
計	30.50	51

凡例

- | | | |
|-----|--------------------|------|
| 沖積層 | [A1c] | 粘性土 |
| | [A1s] | 砂・砂礫 |
| 段丘層 | [Tc] | 粘性土 |
| | [Tg ₂] | 砂礫 |

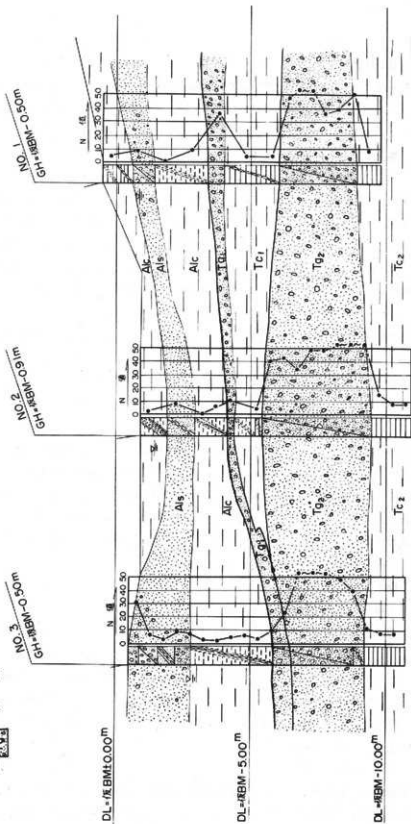


図2. ボーリング調査による地層推定断面図

4. 調査の結果

発掘調査は堀の規模・形態を中心に空堀か水堀か、石垣やその他の防壁施設の有無などに主眼点を置いた。堀の深さは予想に反して比較的浅く、第1・第2トレンチで堀底まで完掘した。また、第2トレンチで堀幅を確認するなどの成果をおさめた。

a. 第1トレンチ

○土層（図6、第1トレンチ断面図参照）

土層は、上・中Ⅰ・中Ⅱ・下層の4グループに分けられる。上層は1～10層で、調査地区の南端部に一段高く堆積する比較的新しい土層である。中Ⅰ層は中位に堆積する11～14層で、整地されたように平行堆積する。排水用の遺構も見受けられ、ある時期に生活面を形成していたようである。中Ⅱ層は礫が主体で、人口的に埋められた土砂である。15～18層がこれにあたる。下層は19～29層で、堀底に自然堆積や崩壊によって埋まった土砂である。

○遺構（図5）

堀遺構……堀内側の法面から堀底にかけて発掘した。堀の深さは南壁断面で、地表下380cmを測り、堀底は水平な面をなす。しかし、堀の内側で140cm～210cmの幅をもつ犬走り状遺構を検出した。犬走り状遺構は堀底から210cm程の高さに設けられており、北の方にむかって徐々に広がっている。犬走り状遺構面の杭（径5cm前後）列は、堀に伴うものではなく、新しい時代のものである。

暗渠状遺構……廃城後の遺構で、12層面から検出した。この遺構は、堀のほぼ中央部に、堀に沿って付設された幅70cm、深さ50cmの溝状遺構である。溝内の両側には30cm～50cmの間隔で杭が打ち込まれ、杭の外側には1本の丸材や板材を杭列に添えて渡してある。杭列の内側には礫が詰められ、その上には瓦が敷き詰められてあった。調査中も、これを伝ってかなりの水量が流れ出て、他の湧水と相俟って水中ポンプから目を離せない状態であった。このことから、この遺構は排水用の暗渠状遺構と考えられる。

b. 第2トレンチ

○土層（図6、第2トレンチ断面図参照）

土層は、堆積関係から上・中・下層の3グループに分けられる。上層は比較的新しい時期に埋められた土砂で、1～22層がこれにあたる。さらに、上層は上位層と下位層に分けられる。下位層に属する土層は17・22層で、この層より上の層は機械による発掘を行なった。中層は23～29層の中位の埋土層である。この土層中には、第1トレンチと同様の排水用遺構があり、ある時期に生活面として利用されていたことが伺える。下層は堀の最深部に、レンズ状に堆積する土層で、30～34層がこれにあたる。

○遺構（図5）

堀遺構……北西隅部分における堀の形態や堀幅等を確認できた。堀の両側の法面については、内側が約55度の勾配でもって土塁へ立ち上がるのに対し、外側は25～30度の緩い勾配で、高さ

1.4m程の立ち上がりしかない。丁度そこは、「雲正坂」が伊丹段丘を下りた所に当たり、もともと段丘下に位置していたために法面の立ち上がりが低いのか、後に削平を受けたために低いのかは不明である。その高さでの堀幅は16.6mを測り、法下幅は13.5mを測る。堀底は、中央部から内側の浅い部分と中央部から外側の深い部分の二段に成形されている。浅い部分は幅6.7mで、中央にむかって緩やかな傾斜をもつフラットな面を呈し、第1トレンチで検出した犬走り状遺構がこれにつながるものと思われる。深い部分は堀の中央から外側に幅6.8mで、深さは地表下3.2mを測り、内側を緩い勾配に、外側を40度程の急な勾配に成形してある。

木わく方形遺構……堀の深い部分が埋まった段階で、堀の外側に沿って大小の杭と横板とを組み合わせた方形の遺構がつくられていた。中には多量の瓦や陶磁器が埋まり、黒色泥土がつまっていた。その周囲にも瓦や陶磁器等が多量に散乱しており、ゴミ捨て用の遺構と思われる。

暗渠状遺構……24層面の堀中央部で検出。第1トレンチ同様、幅60cm、深さ50cmの溝状を呈し、杭の外側に丸材や板材を横に添えて組み合わせ、砂礫をつめたものである。

その他……堀の中央部に木わくの井戸があるが、用地買収に伴って取り壊した伴夏子氏宅のものである。また、堀の内側で土留め用の杭列や排水溝用の石垣と副木を検出したが、いずれも近現代のものである。

c. 第3トレンチ

○土層 (図7、第3トレンチ断面図参照)

大きく上・中・下層の3グループに分けた。上層は1～4層で、近現代の盛土層である。中層は11～13層の人為的に整地された土層で、11層を整地層3、12層を整地層2、13層を整地層1とした。下層は整地層以下の土層で、14～18層の埋土である。

○遺構 (図5・7)

堀遺構……堀底の検出はできなかったが、傾斜角約45度の二段にえぐれた堀内側の法面を検出した。その法面は地表下2.1mのところで約20度の傾斜に変換して堀底へ下がっていく。

石垣と礎石……トレンチの西端から4mの所で、表面を堀内側の法面に向けて積まれてある石垣を検出した。石垣は径15cm程の副木の上に、3段に組まれていた。高さは60cm強であるが、石垣の上面に沿って土管が埋設されており、それ以上積まれていたか否かは不明である。

礎石はトレンチの西端から8mのトレンチ中央で検出した。

40×50cm大の平面をもつ石を二段に組み合わせて、しっかりと揃えつけられていた。

この石垣と礎石は、整地層1の面に合わせて設定されており、一体のものと考えられる。

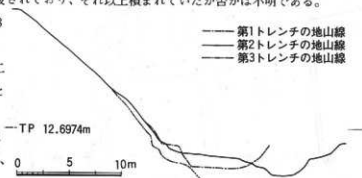


図3. 土壘と堀との関係図

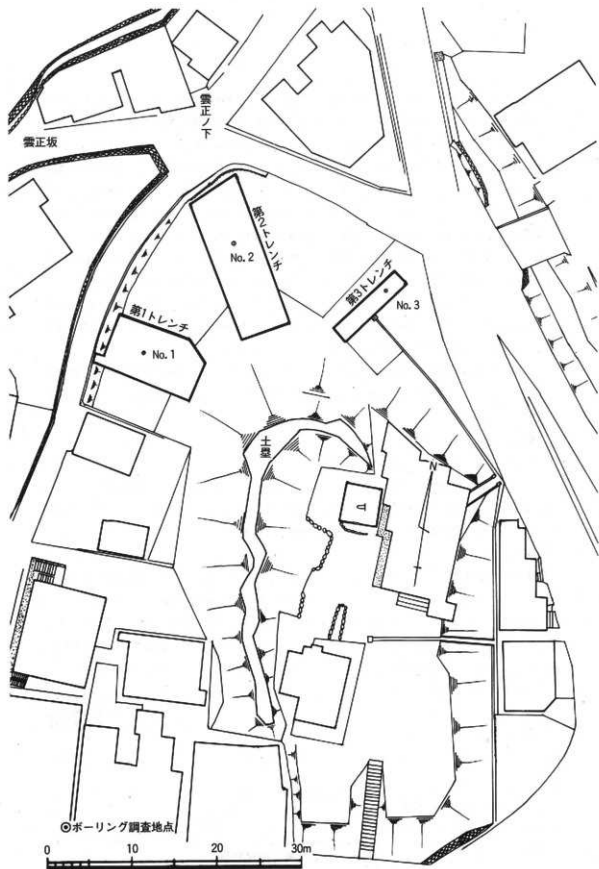


図4. 発掘調査地区図

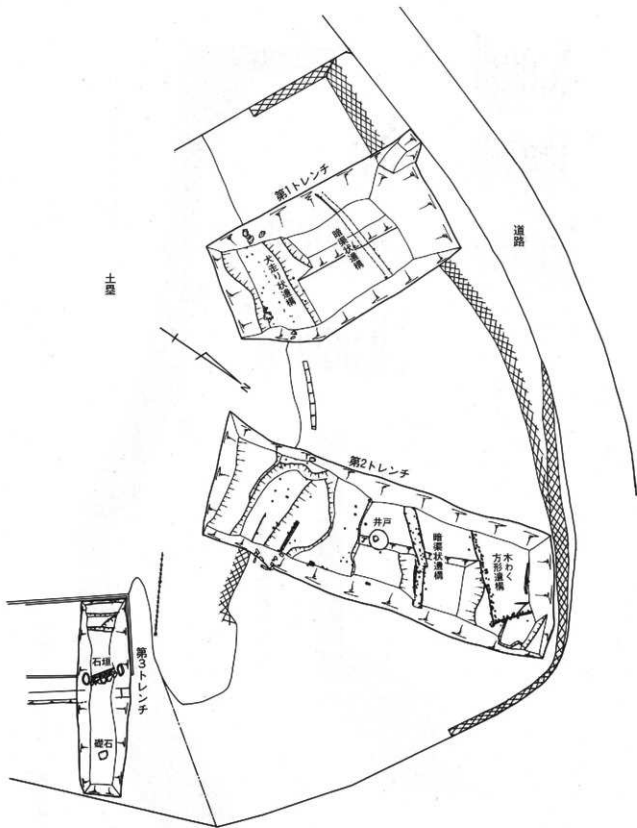


図5. 発掘調査平面図

0 5 10 m

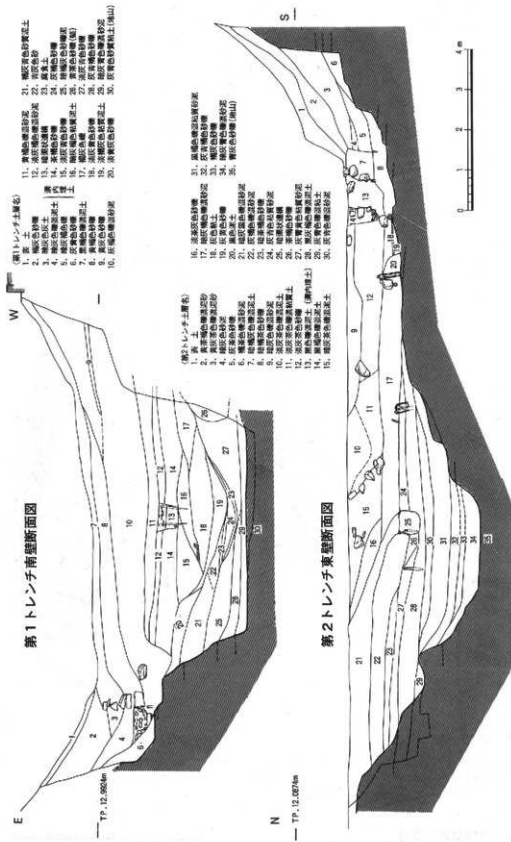


図 6. 第1・第2トレンチ断面図

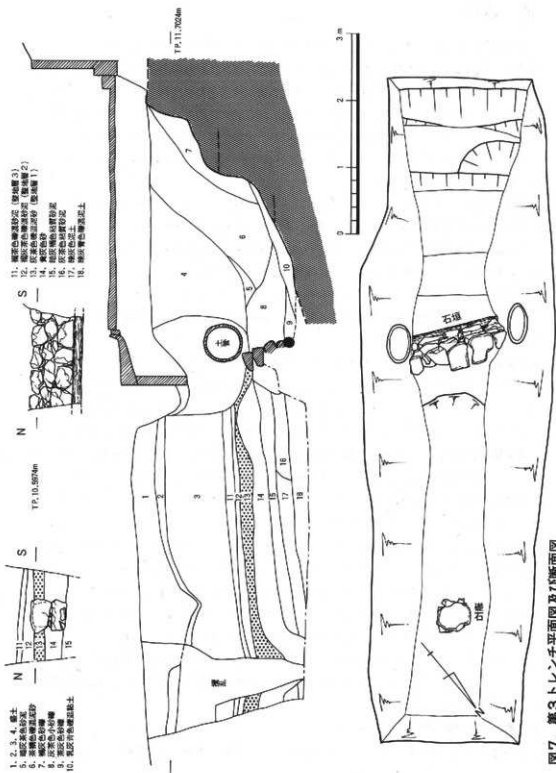


図7. 第3トレンチ平面図及び断面図

Ⅲ. 遺物

出土遺物の主なものとしては、伊万里焼・唐津焼・備前焼・丹波焼・瀬戸焼系などの陶磁器、漆器碗・曲物などの木器類があげられる。そのほとんどは江戸時代のもので、伊丹城・有岡城時代のものは少なく、中国製青磁・染付、備前焼甕・鉢など数える程である。また、江戸時代の遺物は、大部分が伊万里焼・唐津焼の碗・皿・鉢、備前焼の播鉢などの日常生活必需品で占められており、それらは江戸時代の庶民生活の様子を伺い知る資料となるであろう。

図示した遺物には通し番号(1~180)を、写真のみの遺物には200番台の番号を付した。

a. 第1トレンチ(図9・10)

遺物は10層から16層までに集中し、それ以下では18層から検出した備前焼甕腹数点、25層から検出した備前焼甕口縁(11)と平瓦片数点、堀底から検出した瓦数点であった。

伊丹城・有岡城時代の遺物には、18層・25層で検出した備前焼甕(11)、14層検出の備前焼鉢(10)、10層検出の染付碗(16)がある。備前焼はいずれもV期^⑤のものである。また、10層で検出した鉢(13)は室町後期の常滑焼と考えられるが、さらに検討を要する。

江戸時代以降の遺物は土師質土器、瓦質土器、備前焼、瀬戸焼系、唐津焼、伊万里焼などがあり、その主なものを図示した。

土師質土器には皿類(1~3)、焙烙(4)、塩壺(5)、火舎(6)などがみられるが、焙烙と塩壺は1点のみである。皿(1)は糸切り痕をもち、内面に圈線を巡らし、黄赤色釉を塗付してある。手づくねの皿(2・3)は小皿と大皿に分類でき、大皿(3)は灯明皿に利用されていた。

瓦質土器は(7)の茶釜1点のみである。肩部に星と蕨状の型取り浮文を施してある。

備前焼は播鉢(12)のみ出土し、瀬戸焼系は鉄軸をたらし書きた碗(14)と鉄軸であやめ文をあしらった碗(15)が出土した。この碗は抹茶々碗として使用されたものであろうと考えられる。唐津焼には鉢(17)と碗(18・19)があり、(17・19)は刷毛目唐津と呼ばれるものである。(17・18)は江戸前半に、(19)は江戸後半のものに考えている。

伊万里焼は、江戸中期から後期にかけてのものが多く、江戸初期のものは(20・21)の碗、(22)の油壺の3点である。中期のものには皿(23・24)、半筒形碗(25)、碗(26)があり、後期のものには碗(27~30)、皿(31)、鉢(33・34)、蛸唐草文の仏花器(32)、山水画を施した台台(35)、松竹梅の蕎麦猪口(36)などのバラエティに富んだ器種がみられる。また、後期の碗には、清から渡来した文様をまねた新渡写し文様のもの(27)や飯茶碗(29)などもみられる。

その他には、薄手に成形された土鍋(8・9)や内裏雛人形と思われる土製品(203)などが目につく。人形は東帯をまとい、笏をもち、台上に正座した形をしているが、上半分は欠損している。現存高4.3cm、幅4.5cmをはかる。

b. 第2トレンチ(図8・11~16)

この地区はゴミ捨て場になっていたこともあって、遺物は木わく方形遺構とその周囲の17・

22層～29層に集中していた。30・31層からも伊万里焼、唐津焼などを検出したが、数量は少なく、堀底からは天目碗(201)と平瓦片を数点検出したのみである。陶磁器や瓦以外には、漆器・曲物等の木製品、石製の硯(160)、土製の人形・念持仏、貝殻や獣骨などがある。

伊丹城・有岡城時代の遺物は、30・31層出土の備前焼鉢(37)、木わく方形遺構出土の染付碗(51)、堀底出土の天目碗(201)、中層で検出した丹波焼甕(63)・青磁瓶(85)の5点である。いずれも室町後期に比定されるが、(85)の青磁はもう少し古くなるかもしれない。

有岡城後の遺物については、木わく方形遺構、暗渠状遺構及び土層から出土したものに分けられる。

木わく方形遺構……大半は伊万里焼、唐津焼である。伊万里焼には江戸中期の碗(52～55)・染付皿(56)、白磁皿(57)、青磁の香炉(58)などがあるが、後期に入るものも出土している。碗(52・53)は上手物で、碗(54)・皿(56)はくらわんか手である。唐津焼は、江戸前半の鉄釉と灰釉とを半々に塗り分けた段皿(60)、江戸後半の刷毛目唐津の鉢(59)がみられる。(61)は灰釉の無頸壺であるが、時期や焼成地等は不明である。(62)の瓦当は、数少ない軒丸・軒平瓦の中で最も残存状態がよく、左回りの巴に13個の連珠を型取りしたものである。

暗渠状遺構……完掘していないため、出土遺物は土師質土器の火舎(49)と伊万里焼碗(50)の2点のみである。碗(50)は江戸中期のものである。

土層出土の遺物……30・31層出土の遺物(37～48)と、それより上層の遺物(63～162)に分類したが、ここでは一括して扱う。なお、30・31層の遺物は、備前焼の鉢(37)以外は江戸前期～中期のもので占められている。

土師質土器で図示したのは、(79～82)の皿類4点である。(79・80)は小皿で、(81・82)は中皿である。中皿の2点はいずれも灯明皿に使用されていた。

備前焼(76～78)はすべて播鉢で、大振りのものと小振りのもの、高台のつくものとつかないものと分けられる。すべて江戸前期のものである。

丹波焼には甕(64～67)と香炉(68)がある。甕は短い頸部をもつもの(64)と無頸で胴が球形に張るもの(65)の二種類があり、底部に脚をもつ甕も出土している。さらに、体部から口縁部にかけて筒状を呈する甕(69)が1点認められるが、信楽焼と考えられる。

瀬戸焼系は、見込みに鉄釉と染付で花文をあしらった碗(38)をはじめ、壺瓶類(70～72)、水指し(73)、鉢(74、75)などがあり、主に小物類にかたよっている。

伊万里焼は最も多い出土量を誇り、碗(44～48、88・89・94～105、120～124、131・132)、皿(56・57・92・106・107・109・110・125～127・130)、鉢類(93・108・111～114)の日常食器類が大半を占めている。時期的には江戸初期のもの(44・87～93)が少なく、江戸中期以降飛躍的に増加する傾向にある。初期のものには碗・皿・鉢類の他に、猪口(87)、油壺(90・91)があり、藍九谷手と呼ばれる文様の皿(92)や鉄釉の鉢(93)などめづらしいものもみられる。中期のものは(94～119)に、後期のものは(120～132)に図示したが、碗・皿類以外に赤絵の油壺(118)、半

筒形碗(115・116)、小形猪口(117)、仏飯器(119)、青磁の壺蓋(128)、碗蓋(129)などがあり、全体的に中期以降、器種が豊富になる。碗・皿類の中でも、(47・87・94・95)は上手物になり、(54・56・100・113・114)はくらわんか手と呼ばれるものである。

唐津焼は、(133)の徳利や(134)の碗のように桃山期～江戸初期に比定されるものをはじめとして江戸前半のものが圧倒的多数を占め、後半のものは(68・151～153)など数点を数えるのみである。器種には、碗(42・134・137・138・140～142・151・152)、半筒碗(40・147)、皿(139)、段皿(43・135・136・154)、鉢類(39・143～146・148～150)、壺(41)、徳利(133)、蓋(153)、甕(155～158)があり、施釉のちがいや文様によって刷毛目唐津(39・142～146・151～153)、三島唐津(154～158)、二彩唐津(41)

に、染付を施し木原山窯の焼成になる木原唐津(40・147～150)に分けられる。二彩唐津の壺(41)は1点しかなく、弓野山窯の製品と考えられる。他には、緑釉や鉄釉をたらししたもの(43・135・137・139)もあるが、緑釉の碗(141)は1点しか見あたらない。

その他の陶磁器としては、1点ずつではあるが、明代末～清代初期と思われる呉須の鉢(86)、三田焼の染付猪口(83)、繊細な絵画を施した京焼系の鉢(84)、薩摩焼火計り手の碗(159)が出土している。また、特殊なものとしては土製の人形(202)と念持仏(204)がある。人形は頭部と脚部を欠損しているが、小袖着流姿で帯を沈線で表現し、帯の結び目を粘土粒で表現したもので、現存高6.7cm、幅2.5cm、厚さ2.6cmである。念持仏は上半分を欠損しているが、衲衣をまとい、腹前に両手を置き、左右の手を重ねて第1指の先をつける手印をしており、如来座像と思われる。現存高は4.7cm、幅4.3cm、厚さ1.3cmで、台座は蓮弁・反花・框台に区分してある。

(161・162)の瓦当と軒平瓦は、数少ないうちの1つである。瓦当は細長い尾の巴に12個の連珠をめぐらしてあり、軒平瓦には唐草文の一部が認められる。

漆器碗は数点検出したが、完形品は2点である(図8、Ⅱ-1・2)。(Ⅱ-1)は高い高台をもち、口縁部がややすぼまる輪形を呈す。色調は、内面が赤褐色、外面が黒色を呈し、体部外面に朱色で鶴と亀を描いてある。高台つけ根には削りによる抉り痕が、腰部には2条の削り痕がめぐらる。(Ⅱ-2)は(Ⅱ-1)よりも大形で、口縁部を薄く、全体を朱色に仕上げ、高台外面から腰部には削りによるロクロ目が残っている。2点とも底部の厚さは厚い。

c. 第3トレンチ (図17)

I. 石垣と土塁の間の埋土から出土したもの(163～168)、Ⅱ. 整地層3より下層から出土したもの(169～173)、Ⅲ. 整地層から出土したもの(174～176)、Ⅳ. 整地層より下層から出土したもの(177～180)に分類した。

I については、瓦質土器(163)、丹波焼(165)、伊万里焼(166～168)等を検出した。(163)は口

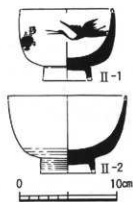


図8. 第2トレンチ出土漆器碗

径16.3cmで、肥厚して外反する口縁部をもつ壺の類と考えられる。伊万里焼には江戸初期の油壺(166)、中期の碗(167)、幕末頃の飯茶碗(168)が混在していた。(164)の無頸壺の詳細は不明である。

Ⅱについては、筒状を呈した土師質の火舎(169)や伊万里焼を検出したが、数量は少ない。伊万里焼は江戸中期の碗(170-171)、後期の筒形碗(172)・仏飯器(173)で、(170)はくらわんか手である。

Ⅲについては、備前焼播鉢(175)、丹波焼甕(176)、伊万里焼皿(174)等を数点検出した。伊万里焼(174)は新渡写し花文を施した江戸後期のものである。

Ⅳについては、備前焼播鉢(177)と伊万里焼(178~180)を図示した。(178)は江戸初期の銚子の口縁部で、(179)は内面に一文字の染付を施した江戸中期の皿で、(180)は江戸後期の碗である。

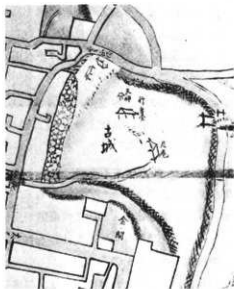
Ⅳ. まとめ

いくつかの調査成果及び問題点をまとめてみると次のとおりである。

- ①. 堀の深さは、第1トレンチで地表下3.8m、第2トレンチで地表下3.2mであったが、第3トレンチは検出不可能であったため、ボーリング調査結果から割り出してみるに、地表下5.3mを測った(図2参照)。それぞれの深さを仮B.M.をレベルとして図化してみると、土塁と堀との関係は図3のようになり、第1トレンチがB.M.-3.3m、第2トレンチがB.M.-4.15m、第3トレンチがB.M.-5.8mとなり、堀の深さが第1トレンチから第3トレンチへむかって深くなっていくことがわかる。堀底から土塁の現存最高部までの高さは、第1トレンチでは15.2m、第2トレンチでは16.05mである。
- ②. 堀幅については、第2トレンチでは16.6mを測ったが、第1トレンチでは堀の西側を巡る道路の東端において堀の外側の法肩を検出できず、道路の下にもぐり込んで拡がっていることが分った。その範囲は、推定の域を脱し得ないが、道路の西辺と民有地との境界が石垣をもって画されており、この境界に考えることができよう。
- ③. 堀の防禦面については、堀底からヘドロ等の堆積土が検出できず、水を張っていたという積極的な結果は得られなかった。但し、第1トレンチで確認した薄い腐蝕土層2枚(23層)は、堀が埋まる途中で堆積したもので、直接水堀に関連した土層ではない。また、石垣についてもその痕跡や石材を検出できなかった。石垣が全て崩壊したり、取り除かれたとしても、まったく失われてしまうことは考えられないことから、堀は素掘りの空堀であったと思われる。しかし、堀の内側において防禦施設と思われる犬走り状遺構を検出した。この遺構が当初から設けられていたのか、その用途・機能は何か、ただ単に二段掘りされただけのものなのか、今回の調査では確かめられなかった。今後の調査課題となるであろう。
- ④. 堀底からはまったくといってもよい程、遺物は出土しなかった。これについては、前述した防禦面とも関連するが、堀内が戦闘の合い間をぬって定期的に清掃・整備されて、防禦を堅固にしていたことを物語っているのではなかろうか。つまり、廃城後にさっぱりと清掃され、

跡片付けされたとは考え難く、城内及び防禦施設の清掃・整備は、中世武士の日常必要な絶対業務であったと考えられる。

- ⑤. 出土遺物は、日常生活にかかせない碗・皿類が圧倒的多数を占め、中でも伊万里焼の占める比率が高い。伊万里焼の編年による限りでは、江戸初期のものは少なく、江戸中期(寛文年間)以降のものが爆発的に増加している。唐津焼の細かい編年がいま一つ不明な点が多いので、唐津焼も同様のことがいえるか否かはわからないが、ほぼ同様の傾向にあるとみて差し支えないだろう。
- ⑥. このことから、堀は江戸中期頃からゴミ捨て場に利用されたりしながら、全面的な埋め立てが行なわれたと推定できる。この事實は、城の外郭で形成していた町家が、江戸中期には主郭周辺にまで拡大し、進出してきたことを示すものである。そして、ある程度埋め立てが進行した段階で、第1・第2トレンチの暗渠状遺構、第3トレンチの礎石と石垣遺構にみられるように、跡地利用が行なわれるようになった。^⑥
- ⑦. 最後に、第3トレンチの礎石と石垣遺構について若干の考察をしてみたい。この遺構は、出土遺物から江戸時代後期以降のもの(但し、近世には下らない)であることが分かったが、その規模や性格については、二段に補強された礎石からして、かなり大きな建造物を想定できる以外、詳かでない。それについて、幕末の天保年間に作成された絵図から有効な手がかりを得ることができるように思われる。その絵図は、伊丹市立博物館所蔵の「文化改正伊丹之図(天保7年写)」(1836)と、武田八郎氏所蔵の「天保15年伊丹郷町分間絵図」(1844、巻頭写真)の2点である。



文化改正伊丹之図(天保7年写)部分
伊丹市立博物館所蔵

「文化改正伊丹之図」には、発掘調査区域内に2棟の建物が、1棟は南北方向に、もう1棟はその横に東西方向に描かれてある。しかし、建物の規模や性格は分からない。

「天保15年伊丹郷町分間絵図」には、建物は描かれていないが、城跡の北側に「高瀬船入口」が描かれ、その正面に「荷物揚場」「船番所」が記され、発掘調査区域にあたる場所に「造酒蔵守」「造酒荷ノ蔵」が隣接して記されてある。この「造酒荷ノ蔵」は江戸へ運上した酒樽を保管した倉庫に、「造酒蔵守」はその倉庫の管理役人と考えられる。

ところでここは、江戸時代、現在の駄六川を利用して、伊丹酒を江戸へ運び出した高瀬舟の船着場があった所で、この度の発掘調査地区内にあった伴夏子氏宅は、200年程前に建てられた運上酒

の管理役人宅であったと伝えられており、『天保15年伊丹郷町分間絵図』に記載されてある内容と符合している。しからば、伴夏子氏宅の東側に隣接して酒樽を保管した倉庫があったはずで、同氏宅の東隣にあたる場所(第3トレンチ)で検出した礎石と石垣遺構は、礎石の規模等から推定して、その倉庫に関連した遺構の一部に想定することができる。そして、『文化改正伊丹之図』にある2棟の建物は、運上酒の管理役人宅と倉庫と考えられ、南北に描かれた建物を「造酒蔵守」、東西の建物を「造酒荷ノ蔵」の建物にそれぞれあてることができよう。

現在では、その名残りとして「雲正坂」^{クモシロ}「雲正ノ下」の地名が残っているが、これは江戸時代、運上用の酒樽を運び降ろした「運上」の坂道がなまって、「雲正」となったのであって、『天保15年伊丹郷町分間絵図』には「運正坂」と記され、「運正」の字があてられている。

用地買収と共に取り壊された伴夏子氏宅には、このような歴史的意義があったにもかかわらず、保存対策はもとより、家屋調査等の保護策さえもなされなかったことは残念でならないが、いつの日にか、この「造酒荷ノ蔵」の発掘調査が行なわれることを期待したい。

[注]

- ①. 有岡城は別に「伊丹城」とも呼ばれていて、昭和50年度から始まった発掘調査では、調査団名・報告書名ともに「伊丹城跡」の呼称を用いていた。しかし、昭和54年12月28日に「有岡城跡」として国史跡指定を受けるにおよんで、それ以後の調査から「有岡城跡調査団」に名称変更しており、報告書も『有岡城跡発掘調査報告書』とすることにした。

有岡城跡を指す場合、惣構え全体を城郭としてとらえるため、それを主郭(城本体)、内郭(侍屋敷)、外郭(町家)に3区分する方法をとりたい。

浅岡俊夫『伊丹城』日本城郭大系12 (新人物往来社)

- ②. ここでは、伊丹台地の侵蝕崖部を指して伊丹段丘とし、伊丹台地と区別して使用した。
- ③. 備前焼の編年については、間壁忠彦・間壁菫子『備前焼研究ノート』1～3、倉敷考古館研究集報第1・2・5号などの労作があり、間壁編年に従った。
- ④. 唐津焼については、編年基準があいまいなため、江戸前半・後半に大別した。早急に編年がなされることを望みたい。

瀬戸系・丹波焼については、江戸前・中・後期に区分した。

- ⑤. 伊万里焼については、山下明郎『初期の伊万里』1971、『盛期の伊万里』1974(徳間書店)を参考にし、江戸初期(慶長～寛文頃)、江戸中期(寛文頃～文化頃)、江戸後期(文化頃～幕末)の編年に従った。

なお、陶磁器の整理にあたっては、鍛治淳美氏から適切な御指導・御教示を得た。末筆ながら感謝の意を記します。

- ⑥. これについては、『伊丹市史』第2巻第5節(P.130～131)に考察されている近世における伊丹郷町の発展過程とほぼ一致しているが、詳細は将来にゆだねたい。
- ⑦. この絵図を使うにあたって、写真撮影を御快諾くださった武田八郎氏に感謝いたします。

V. 遺物観察表

土師質土器

トレンチ 遺構	器形	番号	形態の特徴	成形・調整法	備考
第1トレンチ	小皿	1	●平底底部。 ●内面に黒釉が残り、段を有す。	●水挽き成形。 ●底部糸切り痕あり。 ●内面に黄褐色釉を塗付。	
		2	●平底底部。 ●体部は内毒気味に立ち上がる。	●手づくね。 ●体部外面、指頭圧痕及び布目痕あり。 ●内面、化粧土塗付。	
	大皿	3	●平底底部。 ●体部は外弯しながら立ち上がる。	●体部上半から内面ナデ。 ●底部から体部下半、指頭圧痕及び布目痕あり。	●丁寧な成形。 ●灯明皿に利用され、口縁部全体にススが付着する。
		4	●底部欠損。 ●口縁部は断面三角形を呈し、口縁端部は丸くおさめる。	●口縁部横ナデ。 ●底部外面はザラ目状を呈す。	●底部外面にスス付着。
	甕	5	●外傾気味に立ち上がる体部。 ●口縁内側端部に重受けの低い立ち上がりあり。	●厚手に成形。 ●内面中央部に段あり。 ●内面、雑な仕上げ調整。 ●外面、ていねいなナデ。	●石英・長石砂・金雲母多く含み、生地粗い。 ●黄赤色を呈す。 ●全体に雑な成形。
	火舎	6	●底部欠損。 ●わずかに内傾する体部。 ●口縁部は内側に拡張する。 ●口縁上端は水平面をなし、両側を面取りする。	●横ナデ。 ●口縁上端部は磨き調整。 ●口縁部、体部外面に赤黄色化粧土を塗付。	●内面及び口縁上端面にスス付着。
第2トレンチ	火舎	49	●底部欠損。 ●体部は垂直に立ち上がり、口縁部は直上に外反する。 ●口縁端部はつまみ上げたように、わずかに上方に盛り上がる。	●横ナデ。 ●口縁端部、ヘラ磨き調整。 ●体部内面に指頭圧痕あり。	●胎土は石英・長石・チャート砂を含み良好。 ●焼成は堅く良好。
第2トレンチ	小皿	79	●体部は内毒気味に低く立ち上がる。 ●平底底部。	●内面、丁寧なナデ仕上げ。 ●外面、指頭圧痕及び布目痕あり。	●胎土は細かい石英砂を含み、緻密。
		80	●体部は内毒気味に低く立ち上がる。 ●平底底部。 ●器壁は全体的に厚手。	●内面は丁寧なナデ仕上げ。 ●外面、指頭圧痕及び布目痕あり。	●胎土は細かい砂を含み、緻密。
	中皿	81	●平底底部。 ●体部は外弯しながら立ち上がる。 ●口縁端部を丸くおさめる。	●口縁部、きつく横ナデ。 ●内面ナデ。 ●外面、一部布目痕あり。	●全体に丁寧な仕上げ。 ●胎土は緻密にして緻密。 ●灯明皿に使用され、口縁部3ヶ所にスス付着。
		82	●底部欠損。 ●体部は外反しながら立ち上がる。 ●口縁部は、わずかに内弯し、口縁端部を丸くおさめる。	●口縁部横ナデ。 ●内面ナデ。 ●外面、指頭圧痕あり。	●胎土は砂を多く含む。 ●灯明皿に使用され、口縁部にスス付着。

トレンチ 及 構	器形 番号	形態の特徴	成形・調整法	備考
第3トレンチ (下層)	火舎 169	<ul style="list-style-type: none"> ● 体部は垂直に立ち上がる。 ● 口縁部は内側に拡張し、口縁上端は面をなす。 ● 口縁上端面両側を面取りする。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 口縁上端面及び体部外面丁寧に磨き調整。 ● 内面横ナデ。 ● 口縁部から体部にかけて赤茶色化粧土を塗付。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 胎土は細かい石英・長石・きれ土を含む。

瓦質土器

トレンチ 及 構	器形 番号	形態の特徴	成形・調整法	備考
第1トレンチ	茶釜 7	<ul style="list-style-type: none"> ● 体部・底部欠損。 ● 頸部から垂直に立ち上がる口縁。 ● 口縁端部は水平な面をなす。 ● 肩部に2条の突帯と型による浮文を施す。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 頸部で体部と口縁部を接合。 ● 内面及び口縁部横ナデ。 ● 口縁上端面及び口縁部内側端部付近、ヘラ磨き。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 外面は平光沢をもつ暗灰色を呈し、焼成堅緻良好。 ● 胎土は砂粒子細かく緻密。
第3トレンチ (石垣表埋土)	壺 163	<ul style="list-style-type: none"> ● 口縁部は肥厚し、大きく外反する。 ● 変換部に1条の突帯状の段をもつ。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 横ナデ。 ● 磨耗激しく、詳細不明。 	

備前焼

トレンチ 及 構	器形 番号	形態の特徴	成形・調整法	備考
第1トレンチ	鉢 10	<ul style="list-style-type: none"> ● 体部は外傾し、口縁部で内弯気味に立ち上がる。 ● 口縁端部は面をなす。 ● 体部につまみと思われる粘土粒あり。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 粘土紐巻きあげ成形。 ● 横ナデ。 	<ul style="list-style-type: none"> ● V期。 ● 口縁部から体部外面霜ふり。 ● 胎土はセピア色を呈し、微細にして緻密。
	壺 11	<ul style="list-style-type: none"> ● 口縁部の折り返し下方に発達。 ● 口縁部外面に2条の縦凹線が廻る。 ● 口縁部は内弯気味に外反する。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 粘土紐巻き上げ成形。 ● 横ナデ。 ● 頸部内面、左廻りのヘラ削り。 	<ul style="list-style-type: none"> ● V期。 ● 胎土は細かい砂を多く含む。 ● 赤褐色を呈し、焼成堅緻。
	横鉢 12	<ul style="list-style-type: none"> ● 低平な胎り付け高台をもつ。 ● 口縁部は肥厚し、上方に拡張し、端部は丸味をもつ。 ● 口縁部外面に2条、内面上部に1条の凹線を廻らす。 ● 目の粗い7条単位のクシ目条線を施す。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 粘土紐巻き上げ成形。 ● 体部外面、ヘラ削りののちナデ。 ● 底部・口縁部横ナデ。 ● 体部と口縁部の境界に強いナデを施す。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 江戸前期。 ● 内面下半、使用による磨減激しい。 ● 胎土は赤褐色を呈し、石英・長石砂を多く含む。
第2トレンチ (下層)	鉢 37	<ul style="list-style-type: none"> ● 底部欠損。 ● 体部は内弯しながら立ち上がる。 ● 口縁端部は左右におずかかに肥厚し、内傾する面をもつ。 ● 口縁上端面に細く、浅い沈線が廻る。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 粘土紐巻き上げ成形。 ● 横ナデ。 	<ul style="list-style-type: none"> ● V期。 ● 暗赤褐色を呈す。 ● 霜ふりあり。 ● 胎土は砂粒子細かく、微細にして緻密。 ● タール状のふき出し点あり。
第2トレンチ (上層)	横鉢 76	<ul style="list-style-type: none"> ● 口縁部は上方に拡張し、内傾する面をもつ。 ● 口縁外面には2条の凹線、上 	<ul style="list-style-type: none"> ● 粘土紐巻き上げ成形。 ● 横ナデ。 ● 体部上半に指頭圧痕。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 江戸前期。 ● 胎土は赤褐色を呈し、石英・長石砂を含む。

トレンチ 遺構	器形	番号	形態の特徴	成形・調整法	備考
第2トレンチ(上層)	楕鉢		<ul style="list-style-type: none"> 口縁には1条の凹線を廻らす。 ●底部平底。 ●10条単位のクシ目条線を施す。 		
		77	<ul style="list-style-type: none"> ●口縁部は肥厚し、上下に拡張し、口縁端部は丸味をもつ。 ●口縁外面に2条の凹線、内面に1条の凹線を廻らす。 ●8条単位のクシ目条線を施す。 	<ul style="list-style-type: none"> ●粘土紐巻き上げ成形。 ●体部外面、ヘラ削り(ロクロ回転左廻り)。 ●横ナデ。 	<ul style="list-style-type: none"> ●江戸前期。 ●胎土は砂粒子細かく、きめ密。 ●片口楕鉢。
		78	<ul style="list-style-type: none"> ●低平な貼り付け高台。 ●口縁部は肥厚し、上方に拡張し、口縁端部は内傾する面をもつ。 ●口縁部外面に2条の深い、しっかりとした凹線、上端部に細い凹線を廻らす。 ●片口を有す。 ●13条単位のクシ目条線を施す。 	<ul style="list-style-type: none"> ●粘土紐巻き上げ成形。 ●体部外面、ヘラ削り(ロクロ回転左廻り)。 ●横ナデ。 ●高台のつけ根内面に特に強い横ナデ。 ●底部内面に条線を2～3文差して施す。 	<ul style="list-style-type: none"> ●江戸前期。 ●胎土は砂粒少なく、きめ密。
第3トレンチ(整地層)	楕鉢	175	<ul style="list-style-type: none"> ●口縁部は肥厚し、上方へ拡張する。 ●口縁上端部は面をなす。 ●口縁部外面には2条の丸味をもった凹線、内面上部に段状凹線を廻らす。 ●10条単位のクシ目条線を施す。 	<ul style="list-style-type: none"> ●体部は薄手に成形。 ●体部外面、横ナデ後ヘラ削り(ロクロ回転左廻り)。 ●横ナデ。 ●体部と口縁部との境界に強い横ナデを施す。 	<ul style="list-style-type: none"> ●江戸前期。 ●胎土は細かい石英・長石砂を含むが、5mm程度の小石も含む。 ●赤褐色を呈す。
		177	<ul style="list-style-type: none"> ●口縁部は肥厚し、上方へ拡張する。 ●口縁上端部は面をなす。 ●口縁部外面には1条の凹線、内面上部に段状の凹線を廻らす。 ●8条単位のクシ目条線を施す。 	<ul style="list-style-type: none"> ●体部外面ヘラ削り。 ●横ナデ。 ●体部と口縁部との境界に強い横ナデを施す。 	<ul style="list-style-type: none"> ●江戸前期。 ●胎土は砂粒子細かく緻密。 ●暗紫褐色を呈し、焼成堅緻。
第3トレンチ(上層)					

丹波焼

トレンチ 遺構	器形	番号	形態の特徴	成形・調整法	備考
第2トレンチ(上層)	甕	63	<ul style="list-style-type: none"> ●頸部は内傾しながら立ち上がり、口縁部でくの字に外反し、端部は直立気味に立ち上がる。 ●口縁上端部は面をなす。 	<ul style="list-style-type: none"> ●粘土紐巻き上げ成形。 ●横ナデ調整。 ●内面に指頭圧痕あり。 ●口縁部から外面は灰釉を施す。 	<ul style="list-style-type: none"> ●室町末期。 ●頸部に×蓋印あり。 ●胎土は砂少なく密であるが、大きな気泡がある。 ●タール状のよき出しあり。
		64	<ul style="list-style-type: none"> ●口縁部は内傾する頸部から、肥厚しながら立ち上がり、玉縁状を呈す。 ●頸部に、凹線が廻る。 	<ul style="list-style-type: none"> ●横ナデ。 ●内外面、茶褐色の土部(釉)を施す。 	<ul style="list-style-type: none"> ●江戸前期。 ●外面は半光沢を帯び、霜ふりあり。 ●胎土は石英・長石砂を多く含む。 ●焼成堅緻。
		65	<ul style="list-style-type: none"> ●体部から口縁部にかけて内弯する。 ●口縁端部は外側へ拡張し、上端は広い面をなす。 	<ul style="list-style-type: none"> ●粘土紐巻き上げ成形。 ●横ナデ調整。 ●体部上半分にはV字状の凹線を残量にもめぐらす。 	<ul style="list-style-type: none"> ●江戸前期。 ●土部は茶褐色。 ●胎土は石英・長石砂等を多く含む、きめは粗。

トレンチ 及 溝	器 形	番 号	形 態 の 特 徴	成 形 ・ 調 整 法	備 考
第2トレンチ(上層)	甕		● 体部上半に粘土紐の耳環を貼り付ける。	● 外面には上部を塗付。 ● 内面に土部の垂れ下がりがみられる。	● 体部下半に裏塗付着痕あり。 ● 内面下半に自然釉。
		66	● 口頸部欠損。 ● 踵手の平底底部。 ● 体部は直線的に外側へ開きながら立ち上がる。	● 水挽き成形か。 ● 内面に灰釉を塗付。 ● 外面に赤褐色釉を塗付し、黒褐色釉をたらし書き。 ● 底部に暗茶褐色の土部を施す。	● 江戸前期。 ● 胎土に長石・石英等の小粒子砂を多く含む。 ● 底部に焼台の砂が環状に付着。
		67	● 口頸部欠損。 ● 底部は平底。 ● 体部は外傾しながら立ち上がる。	● 粘土紐巻き上げ成形。 ● 横ナデ。 ● 内面に灰釉を塗付。 ● 体部外面に鉄釉を薄く塗付。	● 江戸前期。 ● 胎土は石英・長石砂等多く含む、きめは粗。 ● ロクロの回転方向は左廻り。
	甕	68	● 口縁部欠損。 ● 体部は底部から外湾しながら短く立ち上がり、ふくらみをもって内湾する。 ● 底部は平底で薄い。	● 水挽き成形。 ● 底部と体部は貼り合わせ。 ● 体部外面に灰釉。	● 江戸前期。 ● 灰釉は暗緑灰色。 ● 胎土は細い砂を多く含む。
第3トレンチ(石垣表埋土)	筒状陶器	165	● 口縁部は内傾しながら立ち上がる。 ● 口縁端部はわずかに肥厚し、上端は面をなす。	● 水挽き成形。 ● 外面に赤褐色土部を塗付。	● 江戸中期。 ● 胎土は砂粒子細く、焼成堅緻。
第3トレンチ(整地層)	甕	176	● 体部は垂直に立ち上がり、頸部はわずかに内傾し、浅い凹線が数条廻る。 ● 口縁部は左右に拡張し、上端は面をなす。 ● 口縁端部は丸くおさめる。	● 粘土紐積み上げ成形。 ● 口縁部外面直下に握凹線状のものを3条めぐらす。 ● 内外面に灰釉を施し、口縁上端面から体部外面にかけて黒褐色釉をたらし書き。	● 江戸後期。 ● 胎土は石英・長石砂を含み、きめは密。

瀬戸・常滑焼系

トレンチ 及 溝	器 形	番 号	形 態 の 特 徴	成 形 ・ 調 整 法	備 考
第1トレンチ	鉢	13	● 底部欠損。 ● 口縁部は肥厚し、上方へ拡張する。 ● 口縁上端は面をなし、断面は台形状を呈す。	● 体部、左廻りのヘラ削り。 ● 口縁部と体部の境界に強い横ナデを施す。 ● 横ナデ。	● 常滑焼。 ● 室町後期か。 ● 胎土は細かい石英・長石砂を多く含む、ザラ目の感じ。 ● 胎土の色は赤紫色を帯び、表面は茶褐色を呈す。
		14	● 底部欠損。 ● 体部は内湾気味に外傾する腰部から、ほぼ垂直に立ち上がる。 ● 体部変換部に丸味をもった凹線が廻る。 ● 口縁と頸部の境には段をもつ。 ● 口縁端部は丸くおさめる。	● 水挽き成形。 ● 頸部、右廻りのヘラ削り。 ● 施釉は腰部より上に行なう。 ● 口縁部から体部にかけて1ヶ所、鉄釉をたらし塗り。	● 瀬戸焼。 ● 江戸後期。
	15	● 体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	● 水挽き成形。 ● 鉄釉による文様を施す。	● 瀬戸系鉄釉。 ● 江戸後期。 ● 外面は上下に二分し、上部に唐草文、下部にあやめ文。	

トレンチ 遺構	器形	番号	形態の特徴	成形・調整法	備考
第1トレンチ	碗				<ul style="list-style-type: none"> ●内面は口縁部に約8mm大の列点を施文。 ●貫入あり。 ●二点出土しているが、同一個体と思われる。
第2トレンチ (下層)	碗	38	<ul style="list-style-type: none"> ●口縁部欠損。 ●体部は内湾気味に立ち上がる。 ●削り出し高台。 	<ul style="list-style-type: none"> ●水挽き成形。 ●腰部に左廻りのヘウ削り。 ●施釉は腰部より上に行なう。 	<ul style="list-style-type: none"> ●瀬戸系鉄釉染付。 ●江戸前期。 ●見込みに鉄釉と染付で花文を描く。 ●貫入あり。
第2トレンチ(上層)	瓶	70	<ul style="list-style-type: none"> ●口縁部及び体部欠損。 ●体部は肩部で大きく内湾し、最大径を肩部にもつ。 	<ul style="list-style-type: none"> ●水挽き成形か。 ●体部外面、ヘウ削り。 ●施釉は体部外面に行なう。 	<ul style="list-style-type: none"> ●瀬戸系(洪瀬戸か)。 ●釉薬は黄土色。
	壺	71	<ul style="list-style-type: none"> ●体部は内湾し、頸部は短く内傾する。 ●口縁は玉縁状を呈す。 	<ul style="list-style-type: none"> ●水挽きで薄手に成形。 ●施釉は口縁内面から外面にかけて行なう。 	<ul style="list-style-type: none"> ●瀬戸系鉄釉。 ●江戸末期。 ●胎土は砂粒を含むが緻密。 ●釉薬は黄褐色。
		72	<ul style="list-style-type: none"> ●体部・口縁部欠損。 ●平底底部。 ●体部は内湾気味に立ち上がる。 	<ul style="list-style-type: none"> ●水挽き成形のロクロ口強い。 ●内面全体と底部付近を除く外面に、灰釉を均一に塗付。 ●底は右廻りのヘウ削り。 ●体部の最下部に一条の強い横ナデを施す。 	<ul style="list-style-type: none"> ●瀬戸系灰釉。 ●胎土は砂粒を含むが緻密。 ●底部内面に焼成時の不純物付着。
		73	<ul style="list-style-type: none"> ●底部欠損。 ●体部は外傾気味に立ち上がる。 ●口縁部は外側に肥厚し、上端部は丸味をもった面をなす。 	<ul style="list-style-type: none"> ●水挽き成形。 ●施釉は内外面に行なう。 	<ul style="list-style-type: none"> ●瀬戸系鉄釉。 ●江戸末期。 ●胎土は砂粒を含むが緻密。 ●貫入あり。
	鉢	74	<ul style="list-style-type: none"> ●底部欠損。 ●体部は腰部より内湾気味に立ち上がる。 ●口縁端部は丸くおさめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ●水挽き成形。 ●施釉は腰部より上に行なう。 	<ul style="list-style-type: none"> ●瀬戸系灰釉。 ●江戸末期。 ●胎土は砂粒を含むが緻密。 ●貫入あり。
		75	<ul style="list-style-type: none"> ●体部、口縁部欠損。 ●削り出し高台。 	<ul style="list-style-type: none"> ●水挽き成形。 ●腰部は左廻りのヘウ削り。 ●施釉は腰部より上に行なう。 	<ul style="list-style-type: none"> ●瀬戸焼灰釉。 ●江戸前期。 ●底に文字不明の黒書あり。 ●胎土は砂粒を含むが緻密。 ●貫入あり。

信楽焼、薩摩焼

トレンチ 遺構	器形	番号	形態の特徴	成形・調整法	備考
第2トレンチ(下層)	甕	69	<ul style="list-style-type: none"> ●底部欠損。 ●体部から口縁部まで垂直に立ち上がる。 ●口縁部は左右に拡張し、口縁上端部に3条の凹線を施す。 ●体部上半分に体部と頸部を面する様な低平な凸帯が廻る。 	<ul style="list-style-type: none"> ●粘土凝積上げ成形。 ●内面から口縁部にかけて横ナデ。 ●体部上半分にハケ状のものによる粗い目調整を施す。 ●外面に灰釉を施す。 ●口縁部から内面にかけて黄茶色の土部を施す。 	<ul style="list-style-type: none"> ●信楽焼。 ●胎土に石英・長石砂を多く含む。 ●体部上半面に粘土製のつぎ目痕あり。 ●ロクロ回転方向、右廻り。

トレンチ 遺構	器形 番号	形態の特徴	成形・調整法	備考
第2トレンチ(上層)	碗 159	<ul style="list-style-type: none"> ●口縁部欠損。 ●体部は内弯気味に外反する。 ●高台は削り出し高台で内傾する。 	<ul style="list-style-type: none"> ●水挽きで厚手に成形。 ●高台端部、面取り。 ●畳付き部は施釉後、削り取りか。 	<ul style="list-style-type: none"> ●陶厚焼、火計り手。 ●江戸初期～中期。 ●二重貫入。 ●碗底に放射状のひび割れあり。 ●畳付き内側に重ね焼きの砂付着。 ●胎土は緻密にして緻密。

唐津焼

トレンチ 遺構	器形 番号	形態の特徴	成形・調整法	備考
第1トレンチ	鉢 17	<ul style="list-style-type: none"> ●底部欠損。 ●体部は外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに肥厚し、短く外反する。 ●口縁端部はコ状を呈し、内傾する面をもつ。 	<ul style="list-style-type: none"> ●水挽き成形。 ●鉄釉を塗付したのち、白釉を刷毛目状に施す。 	<ul style="list-style-type: none"> ●刷毛目唐津。 ●江戸前半。 ●体部外面に放射状刷毛目白釉を施す。 ●胎土は砂粒子細かく緻密。
	碗 18	<ul style="list-style-type: none"> ●底部欠損。 ●体部は内弯気味に立ち上がる。 ●口縁端部は丸くおさめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ●水挽き成形。 ●腰部へつ削り。 ●見込みは蛇の目に削り取る。 ●施釉は見込みの蛇の目を除いて行なう。 	<ul style="list-style-type: none"> ●白釉唐津。 ●江戸前半。 ●釉厚の厚い部分は完全に溶けず白濁色を呈す。
		19	<ul style="list-style-type: none"> ●口縁部欠損。 ●体部は内弯して立ち上がる。 ●削り出し高台。 	<ul style="list-style-type: none"> ●水挽き成形。 ●高台端部にへつ削りによる面取りあり。 ●畳付き部は施釉せず。 ●内外面とも湯巻状に白釉を施す。
	鉢 39	<ul style="list-style-type: none"> ●口縁部欠損。 ●体部は内弯気味に立ち上がる。 ●高台は右廻りの深い削り出し。 	<ul style="list-style-type: none"> ●水挽き成形。 ●腰部へつ削り。 ●高台端部は狭なへつ削り。 ●高台つけ根から上に施釉。 ●見込みは施釉後、釉を蛇の目にふき取る。 ●内面、湯巻き状に白釉を施す。 	<ul style="list-style-type: none"> ●刷毛目唐津。 ●江戸前半。 ●外面は淡茶褐色、内面は黄灰色。 ●貫入あり。 ●胎土は砂少なく緻密。
第2トレンチ(下層)	碗 40	<ul style="list-style-type: none"> ●口縁部欠損。 ●体部は腰部で境をなし、垂直に立ち上がる。 ●削り出し蛇の目高台。 	<ul style="list-style-type: none"> ●水挽き成形。 ●内面はナゲ調整。 ●腰部へつ削り。 ●腰部破線より上に施釉し、内面には施釉せず。 	<ul style="list-style-type: none"> ●(木原山)唐津染付。 ●江戸前半。 ●唐草文。 ●貫入あり。 ●香炉か火入れの可能性あり。 ●胎土は緻密。 ●見込みに重ね焼きの砂付着。
	盃 41	<ul style="list-style-type: none"> ●口縁部、底部欠損。 ●体部は腰部で接線もち、内弯しながら立ち上がる。 	<ul style="list-style-type: none"> ●水挽き成形。 ●腰部へつ削り。 ●体部の上半に緑釉を、下半に白色釉を施す。 	<ul style="list-style-type: none"> ●(弓野窯)二彩唐津。 ●江戸前半。 ●釉薬は白色釉を塗付したのち、緑釉を施す。 ●胎土は砂粒子細かく緻密。 ●貫入あり。
	碗 42	<ul style="list-style-type: none"> ●体部から口縁部欠損。 ●体部は内弯気味に立ち上がる。 	<ul style="list-style-type: none"> ●水挽き成形。 ●腰部へつ削り。 	<ul style="list-style-type: none"> ●白釉唐津。 ●江戸前半。

トレンチ 遺構	器形 番号	形態の特徴	成形・調整法	備考
第2トレンチ	碗	● 削り出し三日月高台。	● 施釉後、見込みの釉を蛇の目に削り取る。 ● 釉薬は高台のつけ根から上に塗付。	● 釉厚の厚い部分は完全に溶けきらず、白濁色を呈す。 ● 見込みを重ね焼きの日跡あり。 ● 貫入あり。
	段皿	43	● 水挽き成形。 ● 腰部に1条のへう削り。 ● 施釉後、見込みの釉を蛇の目に削り取る。	● 緑釉唐津。 ● 江戸前半。 ● 内面に緑釉の斑点あり。 ● 見込み及び養付き部に重ね焼の日跡あり。
第2トレンチ木わく方形遺構	鉢	59	● 水挽き成形。 ● 養付き部は施釉せず。 ● 内面にゆるい波状の、外面に縦方向の白釉を施す。 ● 高台端部はへう削り調整で、面取りをもつ。	● 刷毛目唐津。 ● 江戸後半。 ● 釉薬は暗緑色を呈し、細かい気泡を多く含む。 ● 胎土緻密。 ● 貫入あり。 ● 養付きに重ね焼きの砂付着。
	段皿	60	● 水挽き成形。 ● 腰部に1条のへう削り。 ● 施釉後、見込みの釉を蛇の目に削り取る。 ● 釉薬は腰部より上に塗付。 ● 内面は鉄釉と灰釉とを平々に塗り分け、緑釉を対峙する形で施す。	● 鉄釉・緑釉唐津。 ● 江戸前半。 ● 釉薬は縮状にたれ下がり、粘溜りとなって白濁色を呈す。 ● 見込みと高台に重ね焼きの細砂付着。 ● 胎土は砂粒子微細で緻密。
第2トレンチ(上層)	徳利	133	● 水挽き成形。 ● 内面に右廻りのロクロ目が顯著に残る。 ● 体部外面に暗灰緑色釉を塗付。	● 唐津焼。 ● 桃山～江戸初期。 ● 内面と底部無施釉。 ● 底部外面に重ね焼きの砂が2ヶ所に付着。 ● 胎土に石英・長石砂等含む。 ● 体部外面にターム状のふき出しあり。
	碗	134	● 水挽き成形。 ● 腰部に1条のへう削り。 ● 施釉後、見込みの釉を蛇の目に削り取る。 ● 釉薬は腰部より上に厚く塗付。	● 白釉唐津。 ● 江戸前半。 ● 見込み中心の釉は灰色味を帯びる。 ● 内面釉は完全に溶けず白濁色を呈す。 ● 見込みと高台に重ね焼きの砂付着。
	段皿	135	● 水挽きで薄手に成形。 ● 灰釉を塗付後、緑釉をたらす。 ● 釉薬は腰部より上に塗付。	● 緑釉唐津。 ● 江戸前半。 ● 胎土は微細にして緻密。
		136	● 水挽き成形。 ● 腰部に1条のへう削り。 ● 腰部より上に施釉。 ● 施釉後、見込みの釉を蛇の目に削り取る。 ● 強い削り出し工具による痕跡	● 白釉唐津。 ● 江戸前半。 ● 釉のたれ溜りがあり、白濁色を呈し、釉の厚き不均等。 ● 貫入あり。 ● 胎土は微細にして緻密。

トレンチ 及 産 種	品 番 号	形 態 の 特 徴	成 形 ・ 調 整 法	備 考	
第2トレンチ(上層)			が高台削り出しの際、つけ根につく。		
	硯	137	<ul style="list-style-type: none"> ● 体部から口縁部にかけて欠損。 ● 腰部は内弯気味に外傾する。 ● 削り出し蛇の高台。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 水挽き成形。 ● 腰部に1条のへう削り。 ● 見込みは施軸後、蛇の目に軸を削り取る。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 緑釉唐津。 ● 江戸前半。 ● 見込みに3ヶ所及び疊付きに重ね焼きの目跡あり。 ● 胎土は微細にして緻密。
		138	<ul style="list-style-type: none"> ● 体部から口縁部にかけて欠損。 ● 高台は右廻りへう削り三日月高台で、外形は竹の節状を呈す。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 水挽き成形。 ● 腰部に1条のへう削り。 ● 腰部より上に施軸。 ● 施軸後、見込みの軸を蛇の目に削り取る。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 灰釉唐津。 ● 江戸前半。 ● 釉薬は淡灰緑色を呈す。 ● 胎土は微細にして緻密。
	皿	139	<ul style="list-style-type: none"> ● 体部から口縁部にかけて欠損。 ● 削り出し三日月高台。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 水挽き成形。 ● 腰部に1条のへう削り。 ● 腰部より上に施軸したのち、内面に緑釉をたらす。 ● 施軸後、見込みの軸を蛇の目に削り取る。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 緑釉唐津。 ● 江戸前半。 ● 見込みに3ヶ所、疊付き部に4ヶ所の重ね焼きの目跡あり。 ● 胎土は微細にして緻密。 ● 貫入あり。
	硯	140	<ul style="list-style-type: none"> ● 口縁部欠損。 ● 体部はゆるやかに内弯しながら立ち上がる。 ● 削り出し三日月高台で、外形はわずかに竹の節状を呈す。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 水挽き成形。 ● 腰部に1条のへう削り。 ● 施軸は腰部より上に行なう。 ● 施軸後、見込みの軸を蛇の目に削り取る。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 白釉唐津。 ● 江戸前半。 ● 胎土は微細にして緻密。
		141	<ul style="list-style-type: none"> ● 口縁部欠損。 ● 体部は内弯気味に立ち上がる。 ● 削り出し高台。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 水挽き成形。 ● 高台つけ根に高台削り出しの際についた工具の痕跡が強くつく。 ● 施軸は腰部より上に行なう。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 緑釉唐津。 ● 江戸前半。 ● 体部外面は緑釉。 ● 内面に緑釉斑点あり。 ● 胎土は乳白色を呈し、微細にして緻密。 ● 細かい貫入あり。
		142	<ul style="list-style-type: none"> ● 体部は内弯気味に外傾して立ち上がる。 ● 削り出し高台。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 水挽き成形。 ● 高台端部に面取りあり。 ● 施軸は疊付き部を除いて行なう。 ● 見込みは施軸後、蛇の目に軸をふき取る。 ● 内外面とも異状に白釉を施す。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 刷毛目唐津。 ● 江戸前半。 ● 胎土は暗赤褐色を呈し、微細にして緻密。 ● 貫入あり。
	鉢	143	<ul style="list-style-type: none"> ● 口縁部欠損。 ● 体部は内弯気味に立ち上がる。 ● 高台は深い削り出し。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 水挽き成形。 ● 高台端部に面取りあり。 ● 疊付き部は施軸せず。 ● 腰部へう削り。 ● 体部外面は波状、内面は縦方向の白釉を刷毛で施す。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 刷毛目唐津。 ● 江戸前半。 ● 高台に重ね焼きの砂付着。 ● 内面は灰緑色、外面は紫灰色を呈す。 ● 胎土は微細にして緻密。
	輪花鉢	144	<ul style="list-style-type: none"> ● 体部はゆるやかに内弯しながら立ち上がる。 ● 口縁部は短く外反する。 ● 高台は深い削り出しで、底部は薄い。 ● 口縁は指押えによる波状を呈す。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 水挽き成形。 ● 体部下へう削り。 ● 高台つけ根に、高台削り出しの際についた工具の痕跡あり。 ● 施軸は腰部より上に塗付。 ● 施軸後、見込みの軸を蛇の目にふき取る。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 刷毛目唐津。 ● 江戸前半。 ● 釉薬は黄土色を呈し、内面に波状の白色釉を刷毛で施す。 ● 胎土は細かい石灰・長石砂を含む。

トレンチ 及 機	器 形	番 号	形 態 の 特 徴	成 形 ・ 調 整 法	備 考
第2トレンチ(上層)	片口鉢	145	<ul style="list-style-type: none"> ● 体縁以下欠損。 ● 口縁は外側に折り返し、玉縁状を呈す。 ● 粘土帯貼り付けの片口を持つ。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 水挽き成形。 ● 口縁部内側より2.5×1.5cmのハート形の穴をあけ、外面に粘土板で水差し部分を指押えにより貼りつける。 ● 施釉は口縁端部を除いて行なう。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 刷毛目唐津。 ● 江戸前半。 ● 灰釉を施したのち、外面に白釉を刷毛で塗付。 ● 胎土は砂粒子細かく緻密。
		146	<ul style="list-style-type: none"> ● 口縁部欠損。 ● 体部はゆるやかに内湾気味に外傾して立ち上がる。 ● 削り出し高台。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 水挽き成形。 ● 腰部へう削り。 ● 高台端部を面取り。 ● 施釉は底部・高台内側を除いて行なう。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 刷毛目唐津。 ● 江戸前半。 ● 内面は渦状に白釉を刷毛で施す。 ● 外面は高台から腰部にかけて鉄釉を施し、体部上半は白釉を刷毛で渦状に施す。 ● 胎土は暗セピア色を呈し、微細にして緻密。
	半圓形碗	147	<ul style="list-style-type: none"> ● 口縁部欠損。 ● 体部は腰部で緩をなし、垂直に立ち上がる。 ● 背の低い削り出し蛇の目高台。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 水挽き成形。 ● 施釉は、高台側面から体部に行なう。 	<ul style="list-style-type: none"> ● (木原山)唐津染付。 ● 江戸前半。 ● 唐草文。 ● 釉薬は淡灰青色を呈す。 ● 胎土は砂粒子細かく、緻密。 ● 貫入あり。
		148	<ul style="list-style-type: none"> ● 底部欠損。 ● 体部は内湾気味に外傾する平形碗。 ● 口縁端部は丸くおさめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 水挽き成形。 ● 全面に施釉。 	<ul style="list-style-type: none"> ● (木原山)唐津染付。 ● 江戸前半。 ● 釉薬は淡灰青色を呈す。 ● 胎土は砂粒子細かく、緻密。 ● 貫入あり。
	鉢	149	<ul style="list-style-type: none"> ● 口縁部欠損。 ● 体部は内湾気味に立ち上がる。 ● 背の高い削り出し高台。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 水挽き成形。 ● 高台端部を面取り。 ● 畳付き部は施釉せず。 ● 施釉後、見込みの釉を蛇の目にふき取る。 	<ul style="list-style-type: none"> ● (木原山)唐津染付。 ● 江戸前半。 ● 釉薬は淡灰青色を呈し、外面の施釉は不均等。 ● 胎土は砂粒子細かく、緻密。 ● 貫入、虫喰いあり。
		150	<ul style="list-style-type: none"> ● 体部は内湾気味に立ち上がる。 ● 削り出し高台。 ● 口縁端部、高台端部は丸くおさめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 水挽き成形。 ● 畳付き部は施釉せず。 	<ul style="list-style-type: none"> ● (木原山)唐津染付。 ● 江戸前半。 ● 内面、唐草文。 ● 釉薬は淡灰青色を呈す。 ● 貫入、虫喰いあり。
		151	<ul style="list-style-type: none"> ● 体部は内湾しながら立ち上がる。 ● 口縁端部は丸くおさめる。 ● 深い削り出し高台。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 水挽き成形。 ● 畳付き部は施釉せず、赤土部を塗付か。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 刷毛目唐津。 ● 江戸後半。 ● 内面に縦方向の白釉を刷毛で塗付。 ● 外面体部下半に直径1.7cmの白釉円文を数ヶ所施す。 ● 胎土はチョコレート色を呈し、微細にして緻密。
	碗	152	<ul style="list-style-type: none"> ● 口縁部欠損。 ● 体部は内湾しながら立ち上がる。 ● 高台は高めの削り出し。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 水挽き成形。 ● 腰部に2条のへう削り。 ● 高台端部はへう削り。 ● 畳付き部は施釉せず。 ● 施釉後、見込みの釉を蛇の目にふき取る。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 刷毛目唐津。 ● 江戸後半。 ● 釉薬は褐灰色。 ● 胎土は微細にして緻密。 ● 高台に重ね挽きの砂付着。

トレンテ 遺 構	器形 番号	形態の特徴	成形・調整法	備 考	
第2ア(トレンテ)(下層)			<ul style="list-style-type: none"> にふき取る。 ●内外面とも白釉を湯状に刷毛で施す。 	<ul style="list-style-type: none"> ●貫入あり。 	
	蓋 153	<ul style="list-style-type: none"> ●環状の削り出しつまみと、かえりを持つ。 	<ul style="list-style-type: none"> ●水挽き成形。 ●体部外面上半、ヘラ削り。 ●体部外面から頂部及び天井部に施釉。 ●かえりの部分は無施釉。 	<ul style="list-style-type: none"> ●刷毛目唐津。 ●江戸後半。 ●釉薬は暗茶褐色を呈し、外面に白釉を刷毛で湯状に施す。 ●口縁周辺及びかえり部にかけて重ね塗りの細砂付着。 ●胎土は微細にして緻密。 	
	大皿(段皿)	154	<ul style="list-style-type: none"> ●口縁部及び底部欠損。 ●体部は内寄気味に低平に外傾する。 ●口縁部は外反する。 	<ul style="list-style-type: none"> ●水挽き成形。 ●内面に文様を象眼す。 ●体部外面、ヘラ削り。 ●体部外面下半に土部を、体部上半に灰釉を施す。 	<ul style="list-style-type: none"> ●三島唐津。 ●江戸前半。 ●内面に唐草、菊、三鳥文様の象眼。 ●胎土は微細にして緻密。
	甕	155	<ul style="list-style-type: none"> ●体部は垂直に立ち上がる。 ●口縁部は左右に拡張し、上端面は平面をなす。 	<ul style="list-style-type: none"> ●口縁部直下外面に2条の浅い凹線を廻らす。 ●体部及び口縁上端面に文様を象眼す。 ●全面に施釉。 	<ul style="list-style-type: none"> ●三島唐津。 ●江戸前半。 ●口縁上端面に花文、体部外面に唐草文を象眼。 ●釉薬は灰褐色。 ●胎土は微細にして緻密。
		156	<ul style="list-style-type: none"> ●体部は垂直に立ち上がる。 ●口縁部は左右に拡張し、上端面は平面をなす。 	<ul style="list-style-type: none"> ●口縁部直下外面に2条の浅い凹線を廻らす。 ●体部は薄手に成形。 ●体部及び口縁上端面に文様を象眼す。 ●体部内面上半、口縁部、体部外面に施釉。 	<ul style="list-style-type: none"> ●三島唐津。 ●江戸前半。 ●口縁上端面に唐草文、体部外面に三鳥文様を象眼。 ●釉薬は褐灰色。 ●胎土は微細にして緻密。
	157	<ul style="list-style-type: none"> ●口縁部、底部欠損。 ●体部は内寄気味に立ち上がる。 	<ul style="list-style-type: none"> ●粘土紐巻き上げか。 ●体部外面に文様を象眼す。 ●内外面施釉。 	<ul style="list-style-type: none"> ●三島唐津。 ●江戸前半。 ●体部に花文と㏀文を象眼。 ●釉薬は褐灰色。 ●胎土は微細にして緻密。 ●体部内面に白釉を刷毛で施す。 	
	158	<ul style="list-style-type: none"> ●口縁部、底部欠損。 ●体部は内寄気味に立ち上がる。 	<ul style="list-style-type: none"> ●粘土紐巻き上げか。 ●体部外面に文様を象眼す。 ●内外面施釉。 ●内面下半に鉄釉を施す。 	<ul style="list-style-type: none"> ●三島唐津。 ●江戸前半。 ●体部に唐草、菊花文、三鳥文様を象眼。 ●釉薬は外面黒灰色、内面黄緑灰色。 ●胎土は微細にして緻密。 	

伊万里焼

トレンテ 遺 構	器形 番号	形態の特徴	成形・調整法	備 考
第1トレンテ	碗 20	<ul style="list-style-type: none"> ●口縁部欠損。 ●不正円の削り出し高台。 	<ul style="list-style-type: none"> ●水挽き成形。 ●受けき部は施釉後、削り取り。 ●釉厚は不均等。 	<ul style="list-style-type: none"> ●染付。 ●江戸初期。 ●外面、割目文。 ●内外面、白釉(青みがかる)。 ●貫入及び虫喰いあり。

トレンチ 及 遺	器 形	番 号	形 態 の 特 徴	成 形 ・ 調 整 法	備 考
第1トレンチ	碗	21	<ul style="list-style-type: none"> ●口縁部欠損。 ●不正円の削り出し高台。 	<ul style="list-style-type: none"> ●水挽き成形。 ●髷付き部の軸は削り取りか。 ●高台側面に軸葉のかからない所があり、施軸にむらがある。 	<ul style="list-style-type: none"> ●染付。 ●江戸初期。 ●内外面、施軸。 ●貫入あり。 ●軸葉は透明な青味を帯び気泡を多く含む。 ●体部の染付発色淡い。
		22	<ul style="list-style-type: none"> ●口縁部、底部欠損。 ●最大径を体部下半に持つ玉壺巻形。 	<ul style="list-style-type: none"> ●水挽き成形。 ●体部下半部削り。 	<ul style="list-style-type: none"> ●染付。 ●江戸初期。 ●外面、花蝶文。 ●内面は無施軸。 ●軸葉は灰白色を呈し、染付は黒味を帯びる。
	皿	23	<ul style="list-style-type: none"> ●底部欠損。 ●口縁部は内寄気味に立ち上がる。 	●水挽き成形。	<ul style="list-style-type: none"> ●染付。 ●江戸中期。 ●内面、網目文。 ●内外面、施軸。 ●染付は淡い灰青色。
		24	<ul style="list-style-type: none"> ●底部欠損。 ●口縁部は内寄気味に立ち上がる。 	●水挽き成形。	<ul style="list-style-type: none"> ●染付。 ●江戸中期。 ●内面、網目文。 ●内外面、施軸。 ●染付は淡い黄土色を帯びた灰青色。
	半圓形碗	25	<ul style="list-style-type: none"> ●底部欠損。 ●体部は腰部で稜をなし直線的に立ち上がる。 ●口縁端部は内傾する面をもつ。 	●水挽き成形。	<ul style="list-style-type: none"> ●染付。 ●江戸中期。 ●外面、山水文。
	碗	26	<ul style="list-style-type: none"> ●体部は腰部よりやや内寄気味に立ち上がる。 ●削り出し高台。 	<ul style="list-style-type: none"> ●水挽き成形。 ●髷付き部は施軸せず。 ●軸厚は全体に厚い。 	<ul style="list-style-type: none"> ●青磁染付。 ●江戸中期。 ●碗底に「角福」のバリエーション。 ●見込みに花文。 ●内外面、施軸。 ●外面、淡青緑色。
		27	<ul style="list-style-type: none"> ●体部は内寄気味に立ち上がる。 ●口縁端部は外反し、外側にわずかな段をもつ。 ●龍川形茶碗。 ●削り出し高台。 	<ul style="list-style-type: none"> ●水挽きで薄手に成形。 ●施軸後、髷付き部の施軸をふき取る。 ●碗底に施軸むらあり。 	<ul style="list-style-type: none"> ●染付。 ●江戸後期。 ●新渡文様。 ●碗底に「角福」のバリエーション。 ●軸葉は青味を帯び、染付はコバルト色に発色する。
	小型碗	28	<ul style="list-style-type: none"> ●体部は内寄気味に立ち上がる。 ●口縁端部は内傾気味に面をもつ。 ●削り出し高台。 	<ul style="list-style-type: none"> ●水挽きで薄手に成形。 ●髷付き部は施軸せず。 	<ul style="list-style-type: none"> ●染付。 ●江戸後期。 ●外面、草木文。 ●内外面、施軸。 ●貫入あり。
	碗	29	<ul style="list-style-type: none"> ●口縁部欠損。 ●体部は高台側面より直線的に外傾して立ち上がる。 	<ul style="list-style-type: none"> ●水挽き成形。 ●髷付き部は施軸せず。 ●軸厚はむらがあり、不均等。 	<ul style="list-style-type: none"> ●染付 ●江戸後期。 ●飯茶碗。

トレンチ 及 橋	形 番 号	形 態 の 特 徴	成 形 ・ 調 整 法	備 考		
第1トレンチ	碗	●高台は外見上、高く見える。		●見込み部に「寿」のバリエーション。 ●外面、竹文。 ●内外面、施釉。		
		●底部欠損。 ●体部は胴部より直線的に立ち上がる。 ●口縁端部は面をなすが、釉薬が盛り上って丸味をもつ。	●水挽き成形。	●染付。 ●江戸後期。 ●外面、輪・寿丸文。 ●内外面、施釉。 ●染付は細線手法。		
	皿	31	●体部は外傾して立ち上がり、口縁部は外反する。 ●削り出し高台。	●水挽き成形。 ●畳付き部は施釉後、ふき取り。	●染付、上手。 ●江戸後期。 ●外面体部、山水文。 ●碗底「寿」のバリエーションか。	
	仏花器	32	●口縁部欠損。 ●体部は下半で一度すぼまり、外反しながら広がっていき胴部で内寄する。 ●削り出し高台。	●水挽き成形。 ●内面、胴部より上方に横ナゲ。 ●畳付き部は施釉後、ふき取り。	●染付。 ●江戸後期。 ●外面、たこ唐草文。 ●外面に施釉。 ●畳付き部に重ね焼きの砂が付着。 ●底部に虫喰いあり。	
	鉢	33	●口縁部欠損。 ●体部は内寄しながら外傾する。 ●削り出し高台。	●水挽き成形。 ●畳付き部は施釉後、ふき取り。	●染付。 ●江戸後期。 ●内面6角に区分する芙蓉手草花文。 ●釉薬は白色。	
		34	●体部から口縁部にかけて欠損。 ●器壁厚く、背の高い削り出し高台。 ●高台端部は丸くおさめる。	●水挽き成形。 ●畳付き部は施釉後、ふき取り。 ●釉厚は厚く、均等。	●染付。 ●江戸後期。 ●花文を中心に施す。 ●鉢底に、2重角で囲んだ渦巻。 ●釉薬は青味をおびる。 ●外面に貫入あり。	
	杯台	35	●円盤状の台部に内湾気味に開く杯部をもつ。 ●杯部中央は空洞。 ●底部は削り出して上げ底状にする。	●水挽き成形。 ●台部と杯部は別作りで粘り合わせる。 ●畳付き部は施釉後、ふき取り。	●染付、上手。 ●江戸後期。 ●杯部内面・台部外面、山水文。 ●内外面、施釉。	
	蕎麦搦口	36	●口縁部は輪花状に仕上げる。 ●体部は底部から直立して立ち上がる。 ●底部は蕎麦底蛇の目に仕上げる。	●水挽き成形。 ●底部は施釉後、蛇の目にふき取り。	●染付、上手。 ●江戸後期。 ●体部外面に松竹梅を区画して施す。 ●見込みに折り枝、松竹梅文を輪状に施す。	
	第2トレンチ(下層)	油壺	44	●口縁部欠損。 ●体部は丸味を帯びる。 ●不正円形の削り出し高台。	●水挽き成形(ククロ回転は右廻り)。 ●体部内面にへう状のもので渦巻状にかき取ったロクロ目あり。 ●胴部はへう削り。 ●畳付き部は施釉後、ふき取り。	●染付。 ●江戸初期。 ●外面の釉薬は縹状にたれ下り、釉厚不均等。 ●釉薬は灰白色を呈し、発色淡い。

トレンチ 及 溝	器 形	番 号	形 態 の 特 徴	成 形 ・ 調 整 法	備 考
第2トレンチ (下層)	碗	45	●体部は腰部より内弯気味に立ち上がる。 ●口縁端部は丸くおさめる。 ●削り出し高台。	●水挽き成形。 ●疊付き部は施釉後、ふき取り。	●染付。 ●江戸中期。 ●外面、草文。 ●染付は濃グミ・薄グミ手法。 ●碗底にも染付文様あり。 ●疊付き内部に重ね焼きの砂付着。
		46	●口縁部欠損。 ●体部は腰部より内弯気味に立ち上がる。 ●削り出し高台。	●水挽き成形。 ●疊付き部は施釉せず。 ●釉厚は不均等で高台及び碗底に施釉ムラあり。	●染付。 ●江戸中期。 ●外面、草文。 ●内外面、施釉。 ●染付は濃グミ・薄グミ手法。
		47	●口縁部欠損。 ●体部は内弯気味に立ち上がる。 ●削り出し高台。	●水挽き成形。 ●疊付き部は施釉せず。	●染付、上手。 ●江戸中期。 ●外面、石垣文。 ●内外面、施釉。
		48	●体部は腰部で接線を持ち、外弯気味に立ち上がる。 ●削り出し高台。	●水挽き成形。 ●疊付き部は施釉せず、はみ出し部ふき取り。	●染付、上手。 ●江戸中期。 ●外面、草花文。 ●内外面、施釉。 ●染付は濃グミ・薄グミ手法。
第2トレンチ 暗尖状遺構	碗	50	●口縁部欠損。 ●体部は内弯気味に立ち上がる。 ●削り出し高台。	●水挽き成形。 ●疊付き部は施釉後、ふき取り。	●染付。 ●江戸中期。 ●内外面、施釉。 ●染付は濃グミ・薄グミ手法。 ●貫入あり。
第2トレンチ 木わく方形遺構	碗	52	●底部欠損。 ●体部は内弯気味に立ち上がる。 ●口縁端部は丸くおさめる。	●水挽き成形。	●染付、上手。 ●江戸中期。 ●外面、亀甲文。 ●内外面、施釉。 ●染付は細線手法。
		53	●底部欠損。 ●体部は腰部より内弯し、口縁部まで直線的に立ち上がる。	●水挽きで、薄手に成形。	●染付、上手。 ●江戸中期。 ●外面、区画入り草花文。 ●口縁内面に帯状に薄く鼻須を盛り込め、列点を施す。
		54	●底部欠損。 ●体部は内弯し、口縁部は外弯気味に立ち上がる。	●水挽きで厚手に成形。 ●口縁部内面はわずかに外反気味に成形。	●染付。 ●江戸中期。 ●くらわんか茶碗。 ●体部外面にも版の菊花文。 ●釉薬は青味を帯びた灰白色を呈す。
		55	●口縁部欠損。 ●体部は腰部より内弯気味に立ち上がる。	●水挽き成形。 ●疊付き部は施釉せず。	●染付。 ●江戸中期。 ●外面、二重網目文。 ●内外面に施釉し、青味を帯びた灰白色を呈する。
皿	56	●体部は腰部より内弯気味に短く立ち上がる。	●水挽き成形。 ●疊付き部は施釉せず。	●染付。 ●江戸中期。	

トレンチ及 造	器形 番号	形 態 の 特 徴	成 形 ・ 調 整 法	備 考
第2トレンチ水わく方形遺構	皿	<ul style="list-style-type: none"> ●口縁端部は丸くおさめる。 ●削り出し高台。 	<ul style="list-style-type: none"> ●腰部に2条のヘラ削り。 	<ul style="list-style-type: none"> ●内面は菊唐草文。 ●外面は唐草文。 ●内外面、施輪。 ●輪郭は灰白色を呈し、染付は黒味を帯びる。
		<ul style="list-style-type: none"> ●体部は外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。 ●削り出し高台。 	<ul style="list-style-type: none"> ●水挽き成形。 ●腰部に3条のヘラ削り。 ●施輪後、見込みの雫を蛇の目により取る。 ●畳付き部は施輪後、削り取り。 	<ul style="list-style-type: none"> ●白磁。 ●江戸中期。 ●輪郭は淡い青味がかり、輪厚は不均等。 ●畳付き部に重ね焼きの細砂付着。
	音戸	58 <ul style="list-style-type: none"> ●底部欠損。 ●底部より直立する体部。 ●口縁端部は内側に肥厚させ丸くおさめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ●水挽き成形。 ●輪郭は口縁部内面より外面にかけて施す。 ●内面、横ナデ。 	<ul style="list-style-type: none"> ●青磁。 ●江戸中期～後期。 ●大きな貫入あり。
第2トレンチ(上層)	猪口(杯)	87 <ul style="list-style-type: none"> ●底部欠損。 ●口縁部は外反して端部は尖り気味におさめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ●水挽きで薄手に成形。 	<ul style="list-style-type: none"> ●染付、上手。 ●江戸初期。 ●外面、草文。 ●内外面、施輪。 ●輪郭は薄く均一。
	碗	88 <ul style="list-style-type: none"> ●口縁部欠損。 ●削り出し高台。 	<ul style="list-style-type: none"> ●水挽き成形。 ●腰部、ヘラ削り。 ●見込みは施輪後、蛇の目に雫をふき取る。 ●畳付き部は施輪せず。 	<ul style="list-style-type: none"> ●染付。 ●江戸初期。 ●内外面、施輪。 ●見込み及び畳付き内側に重ね焼きの砂が付着。 ●碗底中心に放射状のひび割れあり。
		89 <ul style="list-style-type: none"> ●口縁部欠損。 ●体部は腰部より内湾気味に立ち上がる。 ●削り出し高台。 	<ul style="list-style-type: none"> ●水挽き成形。 ●畳付き部外面を面取り。 ●畳付き部は施輪後、削り取りか。 	<ul style="list-style-type: none"> ●染付。 ●江戸初期か。 ●内外面、施輪。 ●畳付き内側に重ね焼きの砂が付着。 ●内外面に貫入あり。
	油壺	90 <ul style="list-style-type: none"> ●口縁部欠損。 ●体部は腰部より内湾気味に立ち上がる。 ●削り出し高台。 	<ul style="list-style-type: none"> ●水挽き成形。 ●畳付き部の削り調整は雑。 ●畳付き部は施輪せず。 	<ul style="list-style-type: none"> ●染付。 ●江戸初期。 ●内面は無施輪。 ●底部に虫くいあり。 ●輪郭は透明な青味を帯び、細かい気泡を含む。 ●染付は発色よく、明るい藍色。
91 <ul style="list-style-type: none"> ●口縁部欠損。 ●体部はやや縦長気味の球形。 ●削り出し三日高台。 		<ul style="list-style-type: none"> ●水挽き成形。 ●体部内面にヘラ状のもので、螺旋状にかき取ったロクロ目あり。 ●畳付き部の削り調整は雑。 ●腰部ヘラ削り。 	<ul style="list-style-type: none"> ●染付。 ●江戸初期。 ●内面無施輪。 ●染付は濃グミ・薄グミ手法。 ●輪郭は灰白色を呈す。 ●貫入・虫喰いあり。 ●畳付き内側に重ね焼きの砂付着。 	
皿	92 <ul style="list-style-type: none"> ●口縁部欠損。 ●削り出し高台。 	<ul style="list-style-type: none"> ●水挽きで、薄手に成形。 ●畳付き部は施輪せず。 	<ul style="list-style-type: none"> ●染付(藍九谷手)。 ●江戸初期末。 	

トレンチ 造 構	器 形	番 号	形 態 の 特 徴	成 形 ・ 調 整 法	備 考
第2トレンチ(上層)	皿				<ul style="list-style-type: none"> ●見込みに原文を施す。 ●皿底に一重の屈線を通らす。 ●二次火を受け、白濁色化している。
	鉢	93	<ul style="list-style-type: none"> ●口縁部欠損。 ●体部は大きく外傾しながら立ち上がる。 ●削り出し三日月高台。 ●高台の高さ低い。 	<ul style="list-style-type: none"> ●水挽き成形。 ●腰部、1条の右廻りへう削り。 ●高台側面、竹の節状に削り出し。 ●見込みは施釉後、釉を蛇の目にふき取る。 ●外面は腰部より上に施釉。 	<ul style="list-style-type: none"> ●鉄釉。 ●江戸初期。 ●内面に鉄釉で文様を施す。 ●成形・調整は唐津焼と同様の技法を用いている。 ●釉薬、紐状のたれ下がりあり。
	碗	94	<ul style="list-style-type: none"> ●口縁部欠損。 ●体部は腰部より内弯気味に立ち上がる。 ●削り出し高台。 	<ul style="list-style-type: none"> ●水挽きで薄手に成形。 ●畳付き部は施釉せず。 	<ul style="list-style-type: none"> ●染付、上手。 ●江戸中期。 ●外面碗底「大明年製」銘。 ●内外面、施釉。 ●釉薬は白色を呈し、染付はコバルト発色。
		95	<ul style="list-style-type: none"> ●口縁部欠損。 ●体部は腰部より内弯気味に立ち上がる。 ●背の低い薄手の削り出し高台。 	<ul style="list-style-type: none"> ●水挽きで薄手に成形。 ●釉厚は薄く、均等。 ●畳付きは施釉せず、はみ出し釉をふき取り。 	<ul style="list-style-type: none"> ●染付、上手。 ●江戸中期。 ●内外面、施釉。 ●釉薬は白色を呈し、染付はコバルト発色。
		96	<ul style="list-style-type: none"> ●体部は内弯しながら立ち上がる。 ●口縁端部は丸くおさめる。 ●削り出し高台。 	<ul style="list-style-type: none"> ●水挽き成形。 ●腰部へう削り。 ●畳付きは施釉後、ふき取りか。 	<ul style="list-style-type: none"> ●染付。 ●江戸中期。 ●印版による笹の葉文。 ●畳付き部内面に重ね焼きの砂付着。 ●釉薬は灰白色を呈す。
		97	<ul style="list-style-type: none"> ●口縁部欠損。 ●体部は内弯して立ち上がる。 ●削り出し高台。 	<ul style="list-style-type: none"> ●水挽き成形。 ●畳付き部は施釉せず。 	<ul style="list-style-type: none"> ●染付。 ●江戸中期。 ●竹篋文(いも版)。 ●碗底に「大明年製」銘。 ●畳付き部内面に重ね焼きの砂付着。 ●釉薬は淡青色を呈し、細かい気泡を含む。 ●染付は黒味を帯びる。
		98	<ul style="list-style-type: none"> ●体部は腰部より内弯気味に立ち上がる。 ●口縁端部は丸くおさめる。 ●削り出し高台。 	<ul style="list-style-type: none"> ●水挽き成形。 ●施釉後、見込み部の釉を蛇の目にふき取る。 ●畳付き部は施釉後、ふき取り。 ●腰部より体部にかけて胎土をしばった様な放射状のしわがある。 	<ul style="list-style-type: none"> ●染付。 ●江戸中期。 ●釉は溶けきらず、白濁色を呈し、釉厚不均等。 ●染付は黒色を呈す。 ●貫入あり。
		99	<ul style="list-style-type: none"> ●体部は内弯しながら立ち上がる。 ●口縁端部は丸くおさめる。 ●削り出し高台。 	<ul style="list-style-type: none"> ●水挽き成形。 ●腰部へう削り。 ●見込みは蛇の目に施釉せず、はみ出し釉をふき取る。 ●畳付き部は施釉せず。 	<ul style="list-style-type: none"> ●染付。 ●江戸中期。 ●梅文。 ●釉薬は灰白色を呈し、釉厚不均等。 ●見込みと畳付き部内面に重ね焼きの砂付着。

トレンチ 及 溝	器 形	番 号	形 態 の 特 徴	成 形 ・ 調 整 法	備 考
第2トレンチ (上層)	碗	100	●体部は腰部より直線的に外傾して立ちあがる。 ●削り出し高台。	●水挽き成形。 ●畳付き部は施釉せず。	●染付。 ●江戸中期。 ●くらわんか手。 ●梅文。 ●碗底に「J」文を施す。 ●釉薬は青味を帯びた灰白色。 ●畳付き部に重ね焼きの砂付着。
		101	●体部は腰部より内弯気味に立ち上がる。 ●削り出し高台。	●水挽き成形。 ●施釉後、見込みの軸を蛇の目 にふき取る。 ●畳付き部は施釉せず。	●染付。 ●江戸中期。 ●外面、ききょう文。 ●見込みと畳付き部内側に重ね 焼きの細砂付着。 ●釉薬は灰白色を呈する。
		102	●体部は腰部より内弯して立ち 上がる。 ●口縁端部は丸くおさめる。 ●畳付き部は丸くおさめる。	●水挽き成形。 ●畳付き部は施釉せず。 ●口縁部内面に等間隔、口縁部 外面及び体部上半にピンホー ル(釘目跡)あり。	●染付。 ●江戸中期。 ●二重眼目文。 ●畳付き内側に重ね焼きの砂付 着。
		103	●体部は内弯気味に立ち上がる。 ●削り出し高台。	●水挽き成形。 ●畳付き部は施釉後、ふき取り。	●青磁染付。 ●江戸中期。 ●見込み部に花文。 ●外面軸は淡青緑色を呈する。
		104	●口縁部欠損。 ●体部は内弯気味に立ち上がる。 ●削り出し高台。	●水挽き成形。 ●施釉後、見込みの軸を蛇の目 にふき取る。 ●畳付き部は施釉せず。	●染付。 ●江戸中期。 ●焼成甘く、釉薬は透明にとけ きらず、白濁色を呈す。 ●染付は黒色を呈す。 ●釉厚不均等。 ●貫入あり。
		105	●体部は内弯気味に立ちあがり 口縁部は短く外反する。 ●削り出し高台。	●水挽き成形。 ●腰部へら削り。 ●施釉後、見込みの軸を蛇の目 にふき取る。 ●畳付き部は施釉後、ふき取り か。 ●見込みの中心に鉄釉の斑点あ り。	●白磁。 ●江戸中期。 ●体部下半に軸のたれ下がりが見られる。
皿		106	●体部は腰部より内弯して短く 立ち上がる。 ●不正円の削り出し高台。	●水挽き成形。 ●高台の成形・調整難。 ●畳付き部は施釉せず。	●青磁染付。 ●江戸中期。 ●見込み花文。 ●碗底「角福」のバリエーション。 ●釉厚は外面の青磁釉厚い。
		107	●体部は内弯気味に短く立ち上 がる。 ●口縁端部は尖り気味に丸くお さめる。 ●高台は断面三角形を呈す。	●水挽き成形。 ●畳付き部は施釉後、ふき取り。	●染付。 ●江戸中期。 ●内面、捺り文。 ●外面、唐草文。 ●釉薬は不透明な白色を呈す。 ●虫喰い多し。
鉢		108	●口縁部欠損。	●水挽き成形。	●染付。

トレンチ 造	器形 番号	形態の特徴	成形・調整法	備考	
第2トレンチ(上層)		<ul style="list-style-type: none"> ●底部から体部へかけて緩かに内寄せながら立ち上がる。 ●削り出し高台。 ●高台の直径は口縁の直径の約1/2。 	<ul style="list-style-type: none"> ●腰部はへり削りか。 ●施軸後、見込み部分の軸を蛇の目にふき取る。 ●畳付き部は施軸せず。 	<ul style="list-style-type: none"> ●江戸中期。 ●内面、網目文。 ●軸筋は白色を呈し、縹状のたれ下がりがあり、軸厚不均等。 ●畳付き内側に一部、重ね焼きの砂付着。 	
	Ⅲ 109	<ul style="list-style-type: none"> ●体部は大きく外傾し、口縁部で内傾気味に立ち上がる。 ●削り出し三日月高台。 ●高台の直径は口縁の直径の約1/2。 	<ul style="list-style-type: none"> ●水挽き成形。 ●腰部は1本の右廻りへり削り。 ●施軸は腰部より上に行なう。 ●施軸後、見込みの軸を蛇の目に削り取る。 	<ul style="list-style-type: none"> ●伊万里系、白磁。 ●江戸中期。 ●軸筋はわずかに青味を帯び、軸厚不均等。 ●見込みに重ね焼きの細砂付着。 	
	110	<ul style="list-style-type: none"> ●体部は大きく外傾しながら内寄せして立ち上がる。 ●削り出し三日月高台。 ●高台の直径は口縁の直径の約1/2。 	<ul style="list-style-type: none"> ●水挽き成形。 ●腰部へり削り。 ●施軸は腰部より上に行なう。 ●施軸後、見込みの軸を蛇の目にふき取る。 	<ul style="list-style-type: none"> ●伊万里系、白磁。 ●江戸中期。 ●軸筋はわずかに青味を帯び、軸厚不均等。 ●見込みに重ね焼きの細砂付着。 	
	鉢	111	<ul style="list-style-type: none"> ●口縁部欠損。 ●体部は内寄せ気味に立ち上がる。 ●削り出し高台。 	<ul style="list-style-type: none"> ●水挽き成形。 ●畳付き部は施軸せず。 	<ul style="list-style-type: none"> ●青磁染付。 ●江戸中期。 ●見込みに円形松竹梅文のバリエーションを描く。 ●碗底に「角福」のバリエーション。 ●青磁軸は明るい青緑色を呈し、軸厚は厚い。 ●体部下半にピンホール(釘目跡) 2点あり。 ●大きな貫入あり。
		112	<ul style="list-style-type: none"> ●口縁部欠損。 ●体部は内寄せ気味に立ち上がる。 ●削り出し高台。 	<ul style="list-style-type: none"> ●水挽き成形。 ●畳付き部は施軸せず。 	<ul style="list-style-type: none"> ●青磁染付。 ●江戸中期。 ●見込みに円形松竹梅文のバリエーションを描く。 ●碗底に「角福」のバリエーション。 ●青磁軸は緑灰色を呈し、軸厚は厚目。
	浅鉢	113	<ul style="list-style-type: none"> ●体部は内寄せながら立ち上がる。 ●口縁端部は丸くおさめる。 ●削り出し高台。 	<ul style="list-style-type: none"> ●水挽き成形。 ●畳付き部は施軸せず。 	<ul style="list-style-type: none"> ●染付。 ●江戸中期。 ●内面、草花文。 ●外面、唐草文。
	鉢	114	<ul style="list-style-type: none"> ●底部欠損。 ●体部は腰部より、やや外傾しながら立ち上がる。 ●口縁端部は丸くおさめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ●水挽き成形。 ●見込みは施軸後、蛇の目にふき取る。 	<ul style="list-style-type: none"> ●染付。 ●江戸中期。 ●くらわんか手。 ●外面、つる草文。 ●体部にピンホール(釘目跡) 数点あり。
		平筒形碗	115	<ul style="list-style-type: none"> ●体部は腰部で緩をなし、垂直に立ち上がる。 ●口縁端部は水平な面をもつ。 ●削り出し高台。 	<ul style="list-style-type: none"> ●水挽き成形。 ●畳付き部は施軸せず。
	116		<ul style="list-style-type: none"> ●腰部は高台より水平に開き、 	<ul style="list-style-type: none"> ●水挽き成形。 	<ul style="list-style-type: none"> ●染付。

トレンデ 流 及 構	器 形	番 号	形 態 の 特 徴	成 形 ・ 調 整 法	備 考
第2アトレンデ(上層)			<ul style="list-style-type: none"> ● 体部は腰部で線をなし垂直に立ち上がる。 ● 口縁端部は水平な面をもつ。 ● 高台は不正円。 ● 貼り付け高台か。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 疊付きは施釉せず。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 江戸中期。 ● 外面、ぶどう唐草文。 ● 見込み梅文。 ● 染付の発色は黒味を帯びる。
	小形猪口	117	<ul style="list-style-type: none"> ● 体部は外傾気味に立ち上がり、口縁部でわずかに外反する。 ● 口縁端部は尖り気味に丸くおさめる。 ● 高台端部はシャープである。 ● 削り出し高台。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 水挽き成形。 ● 高台端部、ヘラ削り。 ● 疊付き部は施釉せず。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 染付。 ● 江戸中期。 ● 松竹文。
	油壺	118	<ul style="list-style-type: none"> ● 口縁・頸部欠損。 ● 削り出し高台。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 水挽き成形。 ● 体部下半、ヘラ削り。 ● 高台端部、2条のヘラ削り。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 赤絵。 ● 江戸中期。(元禄期) ● 高台側面に1条の赤線を廻らす。 ● 内面、無施釉。
	仏飯器	119	<ul style="list-style-type: none"> ● 杯部は半球状を呈し、口縁端部は尖り気味。 ● 幅広がり背の低い脚をもち、脚端は垂直に立ち上がり、段を有す。 ● 脚底は楕円状に浅く削り取り、蛇の目を呈す。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 水挽き成形。 ● 体部下半、ヘラ削り。 ● 脚と杯は貼り付け。 ● 脚の段より上に施釉。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 染付。 ● 江戸中期。 ● アヤメ文。
	碗	120	<ul style="list-style-type: none"> ● 口縁部欠損。 ● 体部は内弯気味に立ち上がる。 ● 削り出し高台。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 水挽きで薄手に整形。 ● 高台端部ヘラ削り。 ● 疊付き部は施釉せず。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 染付、上手。 ● 江戸後期。 ● 網目文とイモ散文様。 ● 碗底に「大明年製」銘。 ● 外面の釉薬は黄青色味を帯び、細かい気泡を多く含む。
	121	<ul style="list-style-type: none"> ● 口縁部欠損。 ● 体部は腰部で内弯し、外傾しながら立ち上がる。 ● 削り出し高台。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 水挽き成形。 ● 高台端部、ヘラ削り。 ● 疊付き部は施釉せず。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 染付。 ● 江戸後期。 ● 松文。 ● 碗底「大明年製」銘。 	
	122	<ul style="list-style-type: none"> ● 体部は腰部より直線的に外傾しながら立ち上がる。 ● 口縁端部は面をなす。 ● 底部器壁は薄い。 ● 高台端部は両面、面取りされ、断面三角形を呈す。 ● 削り出し高台。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 水挽き成形。 ● 口縁端部に薄く鉄釉を塗付か。 ● 疊付き部は施釉せず。 ● 非常にていねいな仕上げ。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 青磁染付。 ● 江戸後期。 ● 碗底に角文様。 ● 青磁釉は明るく発色し、釉厚は厚い。 	
	123	<ul style="list-style-type: none"> ● 口縁部欠損。 ● 体部は内弯気味に立ち上がる。 ● 削り出し高台。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 水挽き成形。 ● 疊付き部は施釉せず。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 青磁染付。 ● 江戸後期。 ● 見込み梅文。 ● 碗底に淡「緞」銘。 ● 青磁釉は発色淡く釉厚は厚い。 	
	124	<ul style="list-style-type: none"> ● 口縁部欠損。 ● 体部は内弯して立ち上がる。 ● 削り出し高台。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 水挽き成形。 ● 疊付き部、施釉後、ふき取りか。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 染付、上手。 ● 江戸後期。 ● 見込みと外面に菊唐草文。 ● 碗底に銘文か文様あり。 ● 染付の発色はコバルト色を呈 	

トレンチ 遺 構	器 形	番 号	形 態 の 特 徴	成 形 ・ 調 整 法	備 考
第2トレンチ(上層)					す。
	皿	125	<ul style="list-style-type: none"> ●口縁部欠損。 ●体部はゆるやかに内湾気味に外傾しながら立ち上がる。 ●高台は断面三角形で、端部は丸くおさめる。 ●削り出し高台。 	<ul style="list-style-type: none"> ●水挽き成形。 ●畳付き部分は施釉せず。 	<ul style="list-style-type: none"> ●染付。 ●江戸後期。 ●内面、芙蓉手鳥花文。
		126	<ul style="list-style-type: none"> ●体部は内湾気味に短く立ち上がる。 ●口縁端部は丸くおさめる。 ●削り出し高台。 	<ul style="list-style-type: none"> ●水挽き成形。 ●高台端部、ヘラ削り。 ●畳付きは施釉後、削り取りか。 	<ul style="list-style-type: none"> ●染付。 ●江戸後期。 ●内面に雲輪文と花文をあしらい、その間に薄く兵衛を塗り込める。 ●外面、唐草文。
		127	<ul style="list-style-type: none"> ●体部は内湾気味に短く立ち上がる。 ●口縁端部は丸くおさめる。 ●削り出し高台。 	<ul style="list-style-type: none"> ●水挽き成形。 ●高台端部、ヘラ削り。 ●畳付き部は施釉せず。 ●墨はじき(ろう抜き)技法。 	<ul style="list-style-type: none"> ●染付。 ●江戸後期。 ●内面、草花文。 ●外面、唐草文。 ●染付は濃ダミ・薄ダミ手法。
	蓋	128	<ul style="list-style-type: none"> ●蓋の上面は丸味をもち、ひさし状の段を有する。 ●かえりをもつ。 ●つまみを持つが欠損。 	<ul style="list-style-type: none"> ●水挽き成形。 ●かえり部は貼り付け。 ●蓋の上面にのみ、釉薬を塗付。 	<ul style="list-style-type: none"> ●青磁。 ●江戸後期。 ●釉薬は澄んだ淡青色を呈す。
		129	<ul style="list-style-type: none"> ●頂部に環状の削り出しつまみを持つ。 ●体部は内湾気味に引き出す。 	<ul style="list-style-type: none"> ●水挽き成形。 ●畳付き部は施釉せず。 	<ul style="list-style-type: none"> ●染付。 ●江戸末期～明治。 ●天井に「寿」のバリエーション。 ●蓋上面に牡丹文。
	皿	130	<ul style="list-style-type: none"> ●体部は内湾気味に外傾し、口縁部はわずかに外反する。 ●高台はわずかに開き気味。 	<ul style="list-style-type: none"> ●水挽き成形。 ●畳付き部は施釉せず。 	<ul style="list-style-type: none"> ●染付。 ●江戸末期～明治。 ●草花文。 ●碗底に角文字。 ●染付はコバルト色に発色。
	碗	131	<ul style="list-style-type: none"> ●底部欠損。 ●体部は腰部より内湾気味に立ち上がる。 ●口縁端部は丸くおさめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ●水挽きで薄手に成形。 ●墨はじき(ろう抜き)技法。 	<ul style="list-style-type: none"> ●染付。 ●江戸末期～明治。 ●雲電文。
		132	<ul style="list-style-type: none"> ●底部欠損。 ●体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は外反気味に拡張する。 	<ul style="list-style-type: none"> ●水挽き成形。 	<ul style="list-style-type: none"> ●絵付。 ●近代か。 ●山は赤、雲は黒の山水画。 ●貫入あり。
	第3トレンチ(石垣表埋土)	土壺	166	<ul style="list-style-type: none"> ●体部は内湾気味に立ち上がる。 ●削り出し高台。 	<ul style="list-style-type: none"> ●水挽き成形。 ●畳付き部は施釉せず。
碗		167	<ul style="list-style-type: none"> ●口縁部欠損。 ●体部は内湾気味に大きく広が 	<ul style="list-style-type: none"> ●水挽き成形。 ●畳付き部は施釉せず。 	<ul style="list-style-type: none"> ●染付、上手。 ●江戸中期。

トレンチ 及 機	番号	形態の特徴	成形・調整法	備考
第3アトレンチ (七宝地唐草文)	碗	● 腰部をもつ。 ● 薄手の削り出し高台で外へ広がる。	● 高台端部は丸くおさめる。	● 見込み部に葉実文。 ● 釉薬は透き通った青味をもつ。
	168	● 口縁部欠損。 ● 体部は高台脇より直線的に外傾しながら立ち上がる。 ● 高台端部欠損。	● 水挽き成形。	● 染付。 ● 江戸末期。 ● 飯茶碗。 ● 内外面、唐草文。 ● 釉薬は青味を帯びる。
第3トレンチ(下層)	170	● 底部欠損。 ● 体部は内弯気味に外傾して立ち上がる。 ● 口縁端部は丸くおさめる。	● 水挽きで厚手に成形。 ● 腰部へ削りか。	● 染付。 ● 江戸中期。 ● くらわんか手。 ● 体部外面に水玉丸文。
	171	● 口縁部欠損。 ● 体部は内弯気味に立ち上がる。 ● 削り出し高台。	● 水挽き成形。 ● 髷付き部、施釉後ふき取りか。	● 青磁染付。 ● 江戸中期。 ● 見込み・碗底に文様あり。 ● 青磁釉は厚く塗付。
	172	● 底部欠損。 ● 体部は垂直に立ち上がる。 ● 口縁端部は面をなす。	● 水挽き成形。	● 染付。 ● 江戸後期。 ● 貫入あり。
	173	● 口縁部欠損。 ● 裾広がり背の低い脚をもち、脚際と脚底に立ち上がり、段を有する。 ● 脚底は外傾する腰部より内弯気味に直線的に立ち上がる。 ● 脚底は階梯状に浅く削り取り、蛇の目を呈す。	● 水挽き成形。 ● 腰部へ削り。 ● 脚際と脚底に細い沈線を施す。 ● 脚際の段より上に施釉。	● 染付。 ● 江戸後期。
第3トレンチ(露地唐草)	皿 174	● 口縁部欠損。 ● 体部は内弯気味に立ち上がる。 ● 低い高台を持ち、蛇の目底を呈する。	● 水挽き成形。 ● 高台端部は丸くおさめる。 ● 施釉後、皿底を蛇の目にふきとり。	● 染付。 ● 江戸後期。 ● 新渡写し花文。 ● 染付は黒味を帯びる。
第3トレンチ(上層)	徳利 178	● 頸部以下欠損。 ● 口縁部は外反し、丸くおさめる。	● 水挽き成形。	● 染付。 ● 江戸初期。 ● 釉薬は灰白色。
	皿 179	● 体部は内弯気味に大きく外傾して開く。 ● 口縁端部は尖り気味に丸くおさめる。 ● 削り出し竹の節高台。	● 水挽き成形。 ● 腰部に1条のへろ削り。 ● 高台接合部に1条の細い沈線がめぐる。 ● 施釉は腰部より上に乱雑に行なう。 ● 見込みは施釉後、釉を蛇の目に削り取る。	● 染付。 ● 江戸中期。 ● 内面一文字。 ● 釉薬は白灰色を帯び、釉厚不均等。
	碗 180	● 口縁部欠損。 ● 体部は腰部で内弯し、外傾気味に直線的に立ち上がる。 ● 高台は薄手で深い削り出し。	● 水挽き成形。 ● 髷付き部は施釉後、ふき取り。	● 染付。 ● 江戸後期。 ● 口縁部内面、雷文。 ● 見込み及び外面、草花文。 ● 染付は薄いコバルト色に発色。

三田焼、京焼系

トレンチ 及 構	器 形	番 号	形 態 の 特 徴	成 形 ・ 調 整 法	備 考
第2トレンチ(上層)	深口(杯)	83	<ul style="list-style-type: none"> ●体部は内弯気味に外傾して立ち上がる。 ●口縁端部は丸くおさめる。 ●削り出し高台。 	<ul style="list-style-type: none"> ●水挽き成形。 ●高台端部、面取り。 ●疊付き部に糸切り痕あり。 ●施軸は体部内外面に白色土部を施したのちに行なう。 	<ul style="list-style-type: none"> ●三田焼、染付。 ●江戸後期。 ●兵須の印刷を手写し。 ●「古」「中」「長」の文字をあしらす。 ●釉薬は溶けきらず、白濁色を呈す。 ●貫入・虫喰いあり。
	鉢	84	<ul style="list-style-type: none"> ●口縁部欠損。 ●削り出し高台。 	<ul style="list-style-type: none"> ●水挽き成形。 ●高台端部、面取り。 ●疊付き部は施釉せず。 	<ul style="list-style-type: none"> ●京焼系、染付、上手。 ●江戸後期。 ●染付は鮮かな藍灰色。 ●色調は白色。 ●内面、山本文(絵書きのものか)。 ●胎土は緻密にして緻密。

中国製磁器

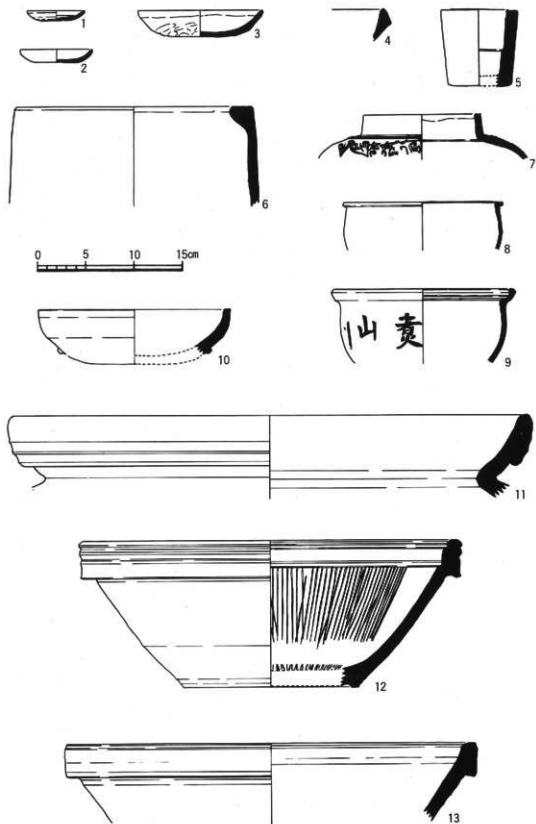
トレンチ 及 構	器 形	番 号	形 態 の 特 徴	成 形 ・ 調 整 法	備 考
第1トレンチ	鉢	16	<ul style="list-style-type: none"> ●体部は内弯気味に立ち上がり、口縁部で短く外反する。 ●高台は薄手で高い。 	<ul style="list-style-type: none"> ●水挽き成形。 ●疊付き部は施釉せず。 	<ul style="list-style-type: none"> ●染付。 ●明代後期。 ●細線手牡丹唐草文。 ●碗底に角文様あり。 ●釉薬は薄い青味を帯び、染付は濃い藍色に発色。 ●窯つぎの補修あり。
水わく方形遺構 第2トレンチ	碗	51	<ul style="list-style-type: none"> ●底部欠損。 ●体部は内弯気味に外傾して立ち上がる。 ●口縁端部は丸くおさめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ●水挽きで薄手に成形。 	<ul style="list-style-type: none"> ●染付。 ●明代。 ●雲竜文。 ●貫入あり。
第2トレンチ(上層)	瓶	85	<ul style="list-style-type: none"> ●頸部は外弯する。 ●口縁部はつまみ出した様に短く直立する。 ●頸部把手あり。 	<ul style="list-style-type: none"> ●水挽き成形。 ●施軸は頸部内面上半より上に行なう。 	<ul style="list-style-type: none"> ●青磁。 ●色調は淡い緑灰色を呈す。
	鉢	86	<ul style="list-style-type: none"> ●体部から口縁部にかけて欠損。 ●削り出し高台。 	<ul style="list-style-type: none"> ●水挽き成形。 ●疊付き部は面をなす。 ●疊付き部及び碗底は施釉せず。 	<ul style="list-style-type: none"> ●染付(兵須)。 ●明末期～清初期。 ●高台付近、軸厚く、端に施軸。 ●内面、産津文。 ●虫喰いあり。

その他

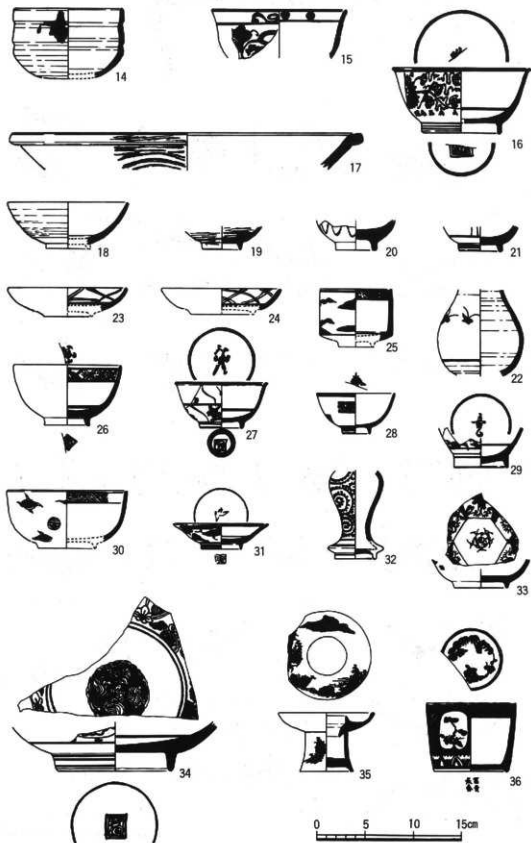
トレンチ 及 構	器 形	番 号	形 態 の 特 徴	成 形 ・ 調 整 法	備 考
第1トレンチ	土塙	8	<ul style="list-style-type: none"> ●体部は内弯気味に直立する。 ●口縁部は外側へ拡張し、口縁端部はつまみ上げた様に直立し、蓋受けを形成する。 	<ul style="list-style-type: none"> ●水挽きで薄手に成形。 ●口縁部は削り出し。 ●施軸は蓋受け部を除いて内外面に行なう。 	<ul style="list-style-type: none"> ●釉薬は淡灰青色。 ●貫入あり。 ●胎土は磁胎風で微細にして緻密。

トレンチ 及 溝	器 形	番 号	形 題 の 特 徴	成 形 ・ 調 整 法	備 考
第1トレンチ	土埴	9	<ul style="list-style-type: none"> ● 体部は内弯気味に直立する。 ● 口縁部は外側に張り出し、外傾気味に立ち上がり、蓋受けを形成する。 ● 口縁端部はやや丸味をもって肥厚する。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 水挽きで薄手に成形。 ● 施釉は蓋付け部を除いて内外面に行なう。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 釉薬は灰白色。 ● 体部に「黄山口」の黒色文字あり。 ● 貫入あり。 ● 胎土は微細にして緻密。
第2トレンチ 形連構 ナ木わく方	無蓋 壺	61	<ul style="list-style-type: none"> ● 体部は内弯気味に内傾する。 ● 口縁部は内傾気味に、わずかに立ち上がる。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 水挽き成形。 ● 施釉は内外面全体に行なう。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 釉薬は灰釉で灰青褐色を呈す。 ● 胎土は細かい石英・長石を含む。
第3トレンチ （石垣斎埴土）	無蓋 壺	164	<ul style="list-style-type: none"> ● 体部上半は内弯し、なで肩状を呈す。 ● 口縁部は短く立ち上がり、玉縁状の丸味をもつ。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 水挽き成形。 ● 口縁部内側から外面にかけて施釉。 ● 体部内面に茶褐色の土部を拵状に薄く施す。 ● 体部内面、横ナデ。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 施釉は黄緑色釉を全体に施したのち、体部に水色釉を掛け流す。 ● 貫入あり。 ● 胎土は微細であるが、細かい気泡を含み、海綿状を呈す。

図9 第1トレンチ出土遺物



1～3土師質土器、7瓦質土器、8・9その他（土埴）、10～12備前焼、13常滑焼

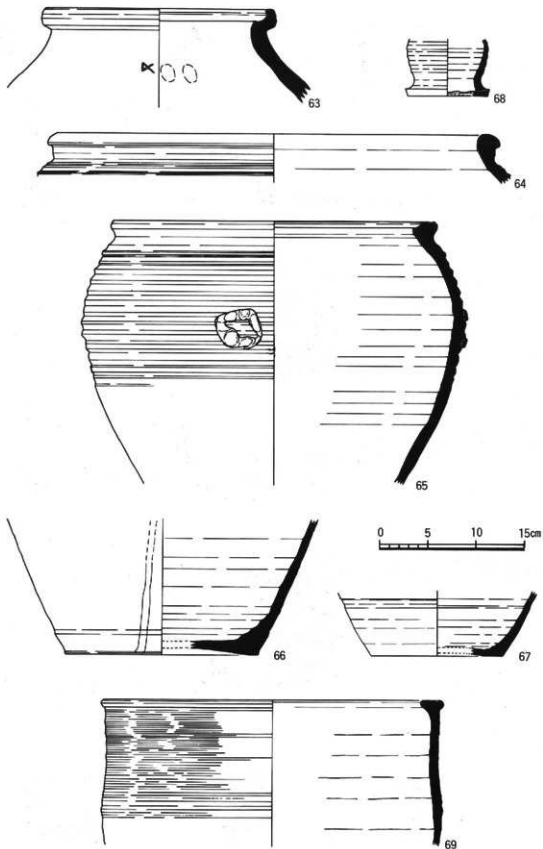


14・15瀬戸焼系、16中国製染付、17～19唐津焼、20～36伊万里焼



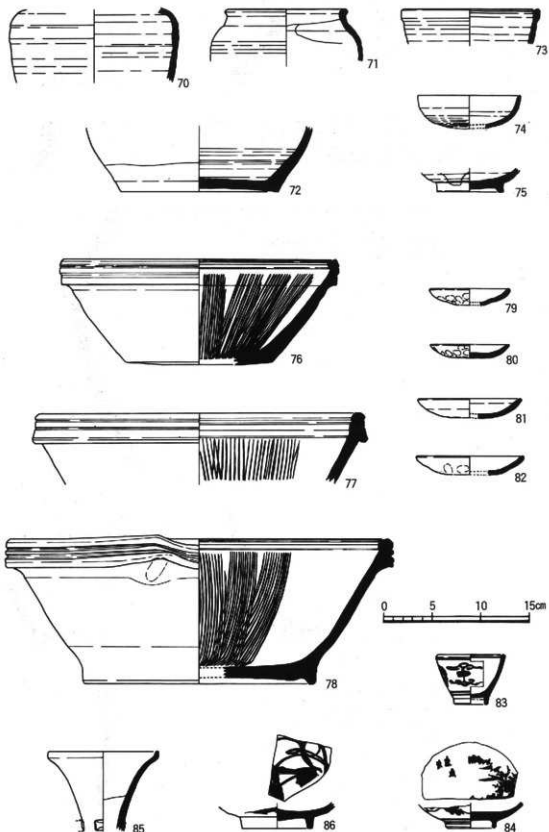
37備前焼、38瀬戸焼、39～43唐津焼、44～48伊万里焼(以上、下層出土)、49土師質土器、50伊万里焼(以上、暗渠状遺構出土)、51中国製染付、52～58伊万里焼、59・60唐津焼、61その他(灰釉陶器)、62瓦当(以上、木わく方形遺構出土) - 42 -

図12 第2トレンチ(上層)出土遺物



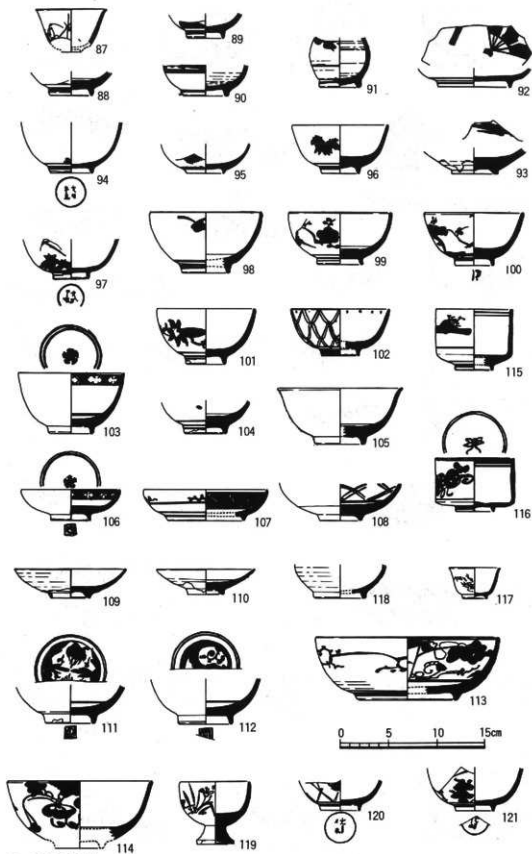
63~68丹波焼、69信楽焼

図13 第2トレンチ(上層)出土遺物



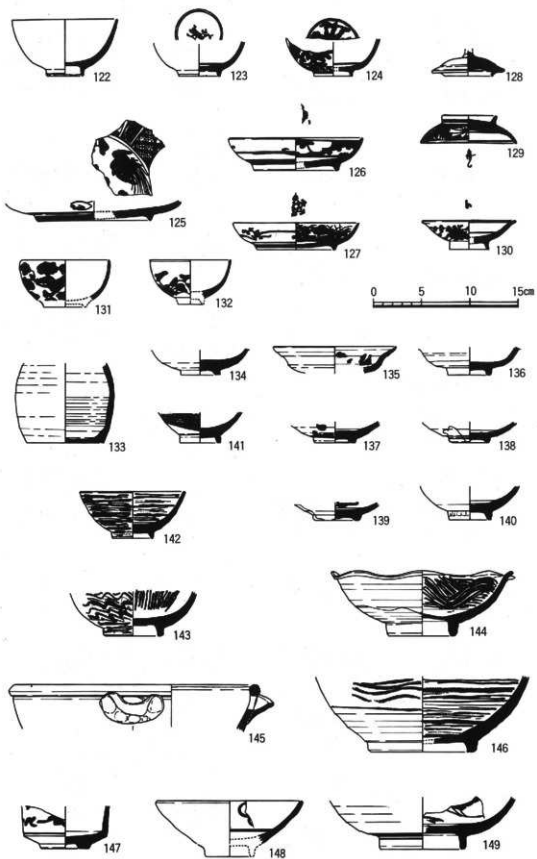
70～75瀬戸焼系、76～78備前焼、79～82土師質土器、83三田焼、84京焼系、85中国製青磁、86中国製呉須染付

図14 第2トレンチ(上層)出土遺物

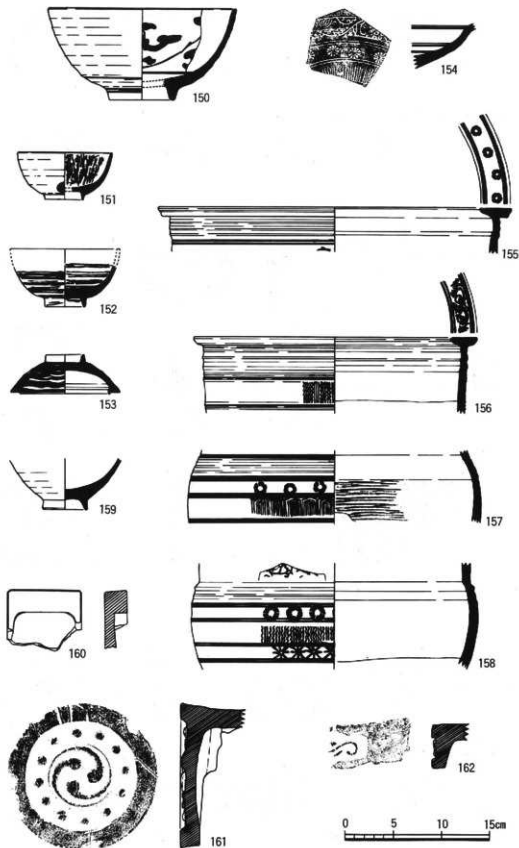


87~121伊万里焼

図15 第2トレンチ(上層)出土遺物

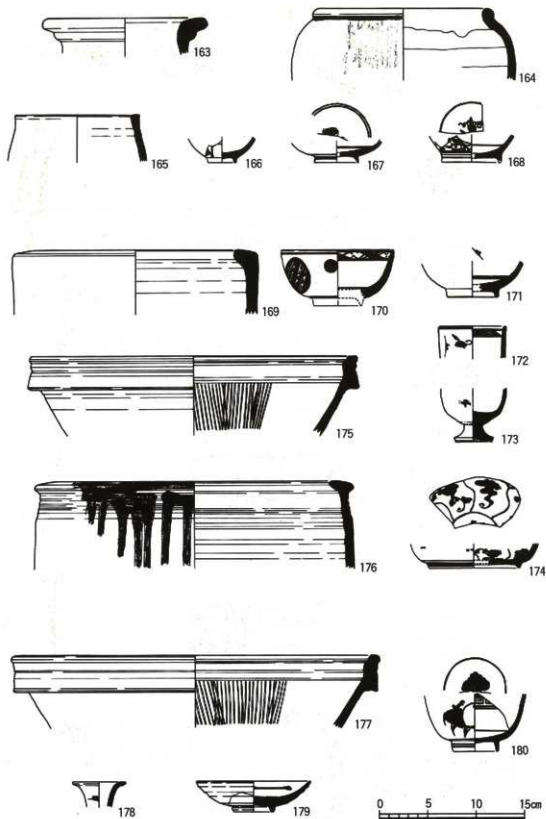


122~132伊万里焼、133~149唐津焼



150~158唐津焼、159薩摩焼、160硯(石製)、161~162軒丸・軒平瓦

図17 第3トレンチ出土遺物



163瓦質土器、164その他（施釉陶器）、165丹波焼、166～168伊万里焼（以上、石垣表の埋土出土）、169土師質土器、170～173伊万里焼（以上、下層出土）、174伊万里焼、175備前焼、176丹波焼（以上、整地層出土）、177備前焼、178～180伊万里焼（以上、上層出土）



発掘調査前の調査地



ボーリング調査の状況



第1トレンチ全景



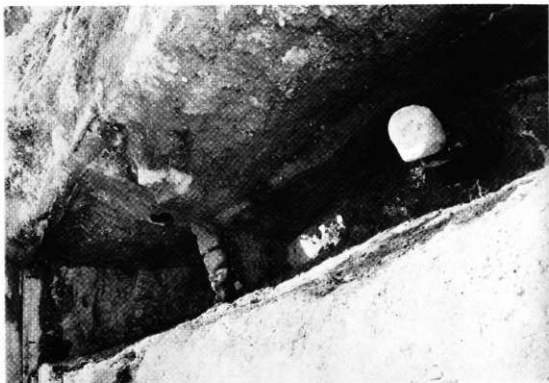
第1トレンチ南壁断面



第2トレンチ全景



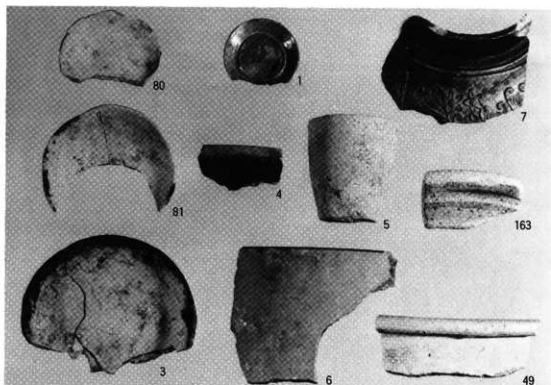
第2トレンチ東(北)壁断面



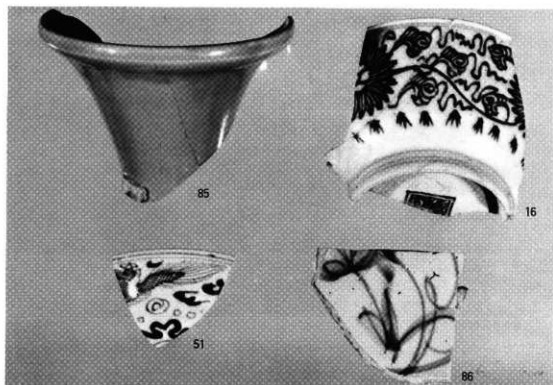
第3トレンチ全景



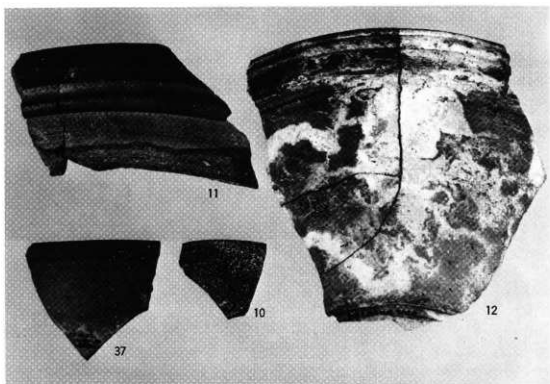
第3トレンチ石垣検出状況



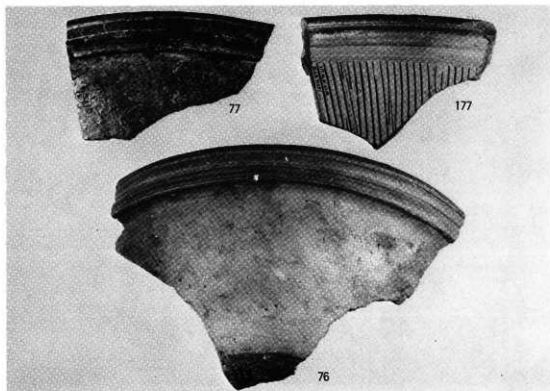
土師質・瓦質土器



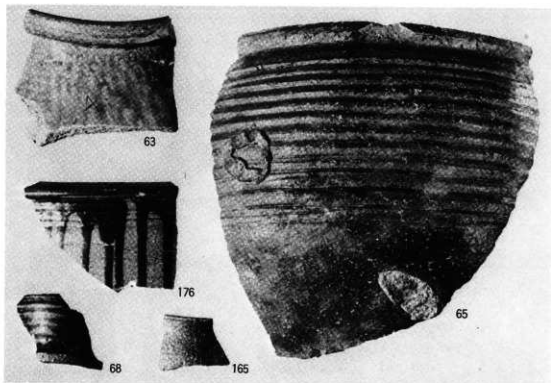
中国製磁器



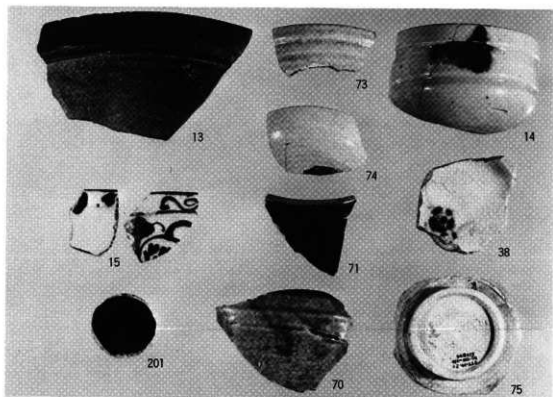
備前焼



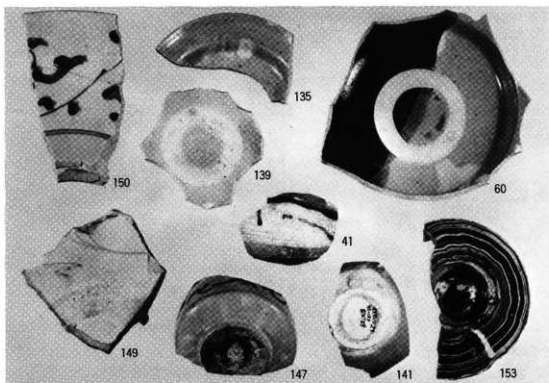
備前焼



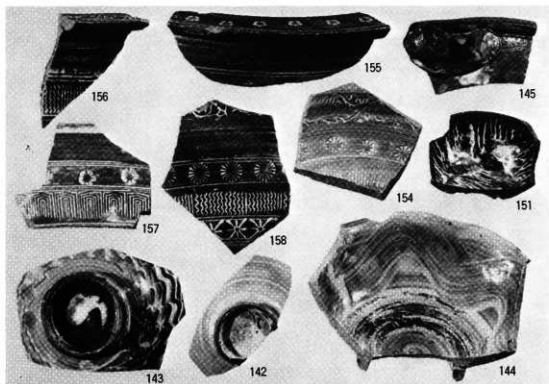
丹波焼



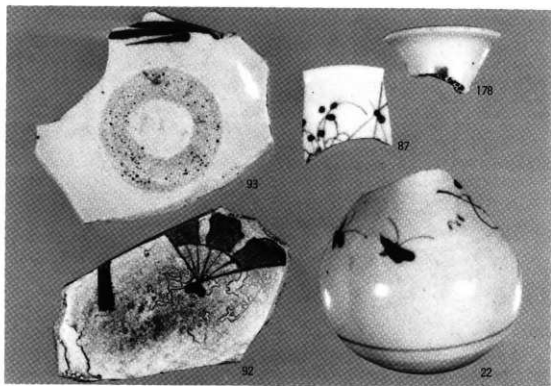
瀬戸・常滑焼系



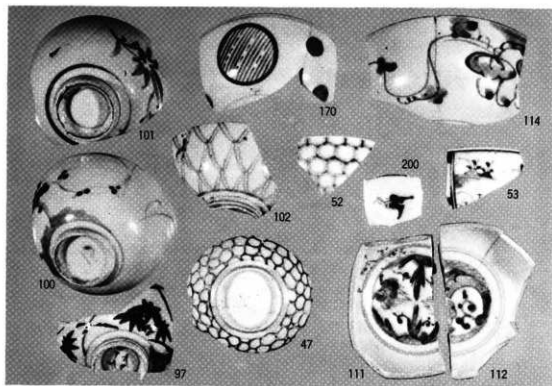
唐津烧



唐津烧



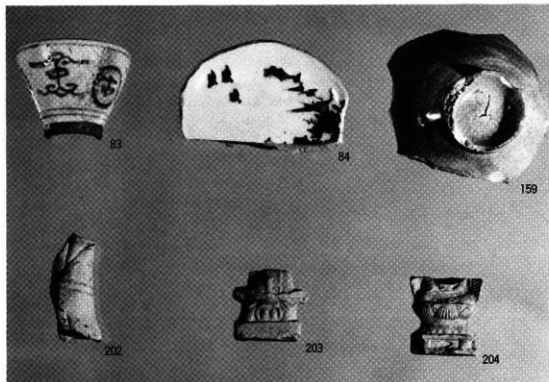
伊万里烧 (江戸初期)



伊万里烧 (江戸中期)



伊万里焼 (江戸後期)



三田焼・京焼系・薩摩焼、人形・念持仏土製品

有岡城跡第5次・第7次・第9次 発掘調査報告書

凡 例

- 第5次調査報告は、昭和54年度に伊丹市教育委員会が、市単費500万円で伊丹城跡調査団に委託して実施した調査報告書である。
- 第7次調査報告は、昭和55年度に猪名野神社宮司官舎建て替えに伴って、有岡城跡調査団が、猪名野神社総代会から委託されて実施した調査報告書である。
- 第9次調査報告は、昭和56年度に、ガスバーナハウス建設及び猪名井用水ポンプ室改築に伴って、有岡城跡調査団が大阪ガスから委託されて実施した調査報告書である。
- これらの報告書の編集は有岡城跡調査団が担当し、執筆は浅岡俊夫が行なった。図は浅岡、田中久雄（奈良大学生）が作成し、写真は浅岡が撮影した。
- これらの報告書の内容には必要な注釈をしなかったが、第10次調査報告書の注釈に準じているので参照されたい。
- 第6・7次調査は、周辺部のボーリング調査のため、割愛した。

有岡城跡第5次・第7次・第9次 発掘調査報告書目次

有岡城跡第5次調査報告	61
I. 調査の経過	61
1. 調査の組織	
2. 調査地区及び調査の経過	
II. 調査の概要	63
1. トレンチの設定	
2. 調査の概要	
III. まとめ	67
IV. 遺物観察表	71
有岡城跡第7次調査報告	89
有岡城跡第9次調査報告	91

図・図版目次

図1. 第1トレンチ出土遺物	63
図2. 第2トレンチ出土瓦	64
図3. 第4トレンチ出土遺物	66
図4. 第5次発掘調査・立会調査地区図	68
図5. 第1・2・3トレンチ平面図及び断面図	69
図6. 第4トレンチ平面図及び石垣実測図	70
図7.8. 第2トレンチ出土遺物	80
図9. 第3トレンチ出土遺物	82
図10. 第7次調査平面図及び断面図	89
図11. 第9次調査平面図及び断面図	91
図版1～3. 第5次調査遺構写真	83
図版4～6. 第5次調査遺物写真	86
図版7. 第7次調査写真	90
図版8. 第9次調査写真	92

有岡城跡第5次調査報告

I. 調査の経過

1. 調査の組織

有岡城跡第5次発掘調査は、昭和54年度に市単独事業として、調査費500万円で伊丹市教育委員会が行った。調査組織は、調査団長に鈴木 充(広島大学教授)、調査委員に村川行弘(大阪経済法科大学教授)・橋本 久(大阪経済法科大学助教授)、調査員に浅岡俊夫(伊丹市教育委員会)をあて、調査補助員を竜谷大学・奈良大学・大阪経済法科大学・大阪学院大学の下記学生で構成した。また、事務は伊丹市教育委員会社会教育課(課長末宗 昇、係長木原 務、主任坂根憲治)が担当した。調査は、発掘調査の他に上・下水道管理設工事、電話線配管工事、ガス中圧埋管工事、道路改良工事に伴う立会を行なったが、これらの調査にあたって伊丹市建設部都市整備課、伊丹市文化財保存協会、地元の大手町自治会(会長吉田昌功)、鶴染ノ川組、鶴ソイルコンサルタンツ、鶴大阪ガスなどからさまざまな協力を得た。さらに、整理・報告書作成作業にあたっては、調査参加者ほもとより、小西規雄(県立西宮今津高校教諭)、宮本博(県立神戸商科大学勤務)、田中久雄(奈良大学生)、伊丹市立博物館、伊丹市文化財保存協会の協力・援助を受けた。公私共に御協力くださった方々、機関に対し、感謝いたします。

(調査参加者)

田中 一(竜谷大学生)、岸本兼英・大塚康宏(奈良大学生)、黒飛誠己・森口訓男・前田和徳(大阪経済法科大学学生)、大木本貞人(大阪学院大学生)。

2. 調査地区及び調査の経過

第5次調査は、国鉄伊丹駅前整備事業の県道伊丹停車場線(都市計画道路伊丹駅桜ヶ丘線)の道路改良・拡張工事及び下水道・電話線・ガス等の埋設工事に伴って実施した発掘・立会調査である。調査の対象地は伊丹1丁目・2丁目の県道伊丹停車場線と伊丹保有所跡付近(第1次調査隣接地)で、県道の範囲は国鉄伊丹駅舎南端付近から阪急伊丹駅方面へ延長約140mの区間である。この辺りは城の「金の間」に推定される所にあっている。

発掘調査は1979年10月2日から11月25日まで、約2ヶ月近い月日を費して行ったが、堀状遺構で底まで発掘不可能な遺構はボーリング調査を併用して、その深さを測った。道路敷の発掘においては、トレンチ設定後、アスファルトを切断・除去したのち手掘りによる調査を行った。作業の進行状況は、おおむね次のとおりである。



位置図 (1/10,000)

- 10月 2日 調査開始。発掘調査地区トレンチ設定。第3トレンチより発掘開始。
- 3日 第3トレンチ、地山面清掃し、遺構検出。
- 4日 第3トレンチ、遺構掘り下げ。
- 5日 第3トレンチ、写真撮影の準備、清掃。
- 6日 第3トレンチ、写真撮影、実測準備。
- 8日～9日 第3トレンチ、プラン実測、断面実測。
- 11日 第3トレンチ、堀-2ボーリング調査。
- 13日 第1トレンチ、発掘開始。アスファルトを切断・除去する。
- 14日 第1トレンチ、遺構検出。
- 15日 第1トレンチ、溝-2の掘り下げ。写真撮影、実測準備。
- 16日 第1トレンチ、地山面検出。清掃、写真撮影、実測完了。
- 17日 第1トレンチ、埋め戻し。
- 20日 第2トレンチ、調査開始。近、現代の建物礎石 建-1を検出。
- 21日 建-1の写真撮影。
- 22日 第2トレンチは現状遺構堀-1の中に位置することが判明。発掘続行。
- 23日 第2トレンチ、清掃、東壁、北壁写真撮影、断面実測。
- 24日～30日 上水道および下水道工事立会。
- 25日 第2トレンチ、堀-1ボーリング調査。出土遺物洗浄。
- 27日 第2トレンチ、埋め戻し。
- 31日～11月1日 ガス中圧工事立会。
- 11月 1日 第4トレンチ、表土掘削開始。堀跡外側の石垣を検出。
- 2日 第4トレンチ、機械掘削完了。石垣の追求。
- 3日～4日 第4トレンチ、堀の肩の追求完了。全面にわたって遺構検出。
- 6日 第4トレンチ、写真撮影。
- 7日 第4トレンチ、実測開始。
- 8日～14日 第4トレンチ、実測。
- 15日 電々ケーブル埋設立会。
- 16日 第4トレンチの石垣の深さをパワーシャベルで追求。第4トレンチ埋め戻し。
- 21日～23日 第4トレンチ、堀内ボーリング調査。
- 24日 遺物、器材引き上げ。遺物等整理開始。
- 25日 第5次調査の図面関係整理。
- なお、上水・下水道・電々及びガス管理設工事、道路改良工事の進行に伴って、発掘調査期間中の10月16日から翌年の1月末日までの間、随時立会を行ない、堀跡の範囲や規模などについて多大な成果をおさめることができた。

II. 調査の概要

1. トレンチの設定

発掘調査に先だって、発掘調査を実施する地区の選定を行ない、トレンチを4本設定した。第1・第2トレンチは、県道伊丹停車場線が阪急伊丹駅から国鉄伊丹駅へ東西方向にはしる北片側に4m×3mの規模で設定し、西から第1・第2と番号を付した。第3トレンチは、伊丹保育所跡で、第1次調査B2トレンチの南側に接して東西7m、南北6.5mの台形状に設定した。第4トレンチは、第1次調査Cトレンチの北側でその西及び東側に接して、大手町公園前の市道に沿ってL字形に、長さ東西17m・南北13m、幅5.5mの規模で設定したが、第1次調査のCトレンチの北端の一部を取り込んでいる。(図4参照)

2. 調査概要

a. 第1トレンチ (図5)

遺構……地山上から溝状遺構や不定形の落込みを検出した。溝状遺構はトレンチの南端部と北側で検出し、南端部検出の溝を溝-1とした。溝-1は、ほぼ東西方向にはしっており、その北法面を検出したものの、溝幅は不明である。深さは約80cmである。北側検出の溝は、幅60~100cm、深さ約10cmで東西方向にのびている。不定形の落込みは、トレンチの南西半分に検出し、2本の溝状遺構と切り合っており、南西方向に深くなっている。また、トレンチ東北隅において、土城-1を検出した。土城-1は近世のゴミ溜め土城で、瓦を主体につめ込まれていた。それぞれの遺構は、その切り合い関係から、北側検出の溝状遺構→不定形の落込み→溝-1→土城-1の順になるが、城跡に関連する遺構としては、16世紀後半の溝-1があげられる。遺物は、溝-1と土城-1で検出した以外は、ほとんど皆無に近い。

遺物……溝-1から出土した皿類を4点図示した(図1、I-1~4)。皿類は口径及び形態により、小皿(I-1)、中皿(I-2・3)、大皿(I-4)に分類した。小皿は、口径7.5cmを測り、底部が高く盛り上がったヘソ皿で、体部外面には指頭圧痕がきつく残り、ひずみは大きい。中皿は、口径11~12cm前後で平底を呈し、内面底部と体部の境に圈線をもち、口縁部をつまみ上げ加減に丸くおさえてある。大皿は、口径13.5cmを測り、平底で外弯する体部と口縁部の境に段をもつ。これらは、16世紀後半に比定される。(I-5)の土師質の焙烙は、土城-1から出土したもので、口縁断面が丸味をもった三角形におさめられている。

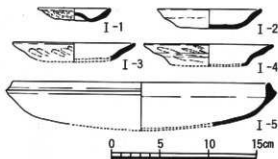


図1. 第1トレンチ出土遺物 (I-1~4 土師質土器皿類, I-5 土師質土器焙烙)

b. 第2トレンチ (図5)

遺構……建-1は、アスファルト・盛土を除去した段階の第1層上面で検出した礎石群である。礎石は半間間隔で、50~70cm大の自然石・切石を配列した現代の建物跡である。

堀-1と命名した遺構は、第1次調査の南郭A・B1トレンチで東屑を検出した溝状遺構につながるものであり、トレンチの東北隅にて、南北方向から東へ折れ曲るコーナーの肩口を、地表下95cmで検出した。深さは、地表下250mまで掘り下げたが、堀底を検出できず、ボーリング調査を併用して測定した。その結果、コーナーの肩口から390cmの深さを測った。底には、約10cmの厚さに青灰色礫混泥砂が堆積していた。堀幅は確認できなかった。

遺物……堀-1は廃城後、ゴミ捨て場同然に埋め立てられたらしく、多量の瓦片(図2)や陶磁器類(図7・8)に混じって念持仏(200、如来立像、顔部欠損、残存高6.3cm)が出土した。しかし、伊丹城・有岡城時代の遺物は少なく、土師質の羽釜(6)、備前焼甕(31)、中国製青磁(34)・白磁(35)の他、盛土(表土)層出土の備前焼甕(33)、立会調査で検出した備前焼甕(32)を数えるのみである。羽釜(6)は口縁部に鉄釜同様の段をもつタイプであるが、全体に磨減が激しい。備前焼甕は、(31・32)がIVb期、(33)がV期に比定される。青磁(34)は坏台の一部分で、緑青色の釉薬が厚く塗付されている。(35)の白磁は薄手に成形された皿である。

江戸期の土器・陶磁器には、土師質土器(1~14)、丹波焼(15~24)、唐津焼(25~29)、備前焼(30)、伊万里焼(36~42)などがある。(43)は不明。土師質土器には皿(1~4)、香炉形土器(5)、焙烙(7~13)、壺形の火舎(14)がみられる。丹波焼には、お歯黒壺(15)、香炉(16~18)、播鉢(19~23)、甕(24)がある。香炉には全て口縁部に敲打痕がみられ、火入れに使用されたことが伺える。播鉢には、口縁断面が三角形を呈するもの(19・20)と口縁部がV期の備前焼のように上方へ拡張するもの(21・23)の二型式がある。唐津焼には、刷毛目唐津片口鉢(25)・鉢(26)、染付段鉢(27)、刷毛目唐津碗(28・29)などがある。備前焼(30)は薄手に成形された弧形徳利で、表面に暗灰褐色の土部を塗付したためずらしいものである。伊万里焼の大半は江戸中期の碗(36~40)で、江戸初期の徳利(41)・白磁皿(42)などが少量混じっている。

瓦は左回りの巴に連珠を巡らした瓦当(II-1)と、二種類の軒丸瓦を検出した。その二種類は、中央の山形文から左右対称に蕨手の唐草がのびた(II-2)と、中央の請花から蕨手と直線状の唐草をもつ(II-3・4)である。

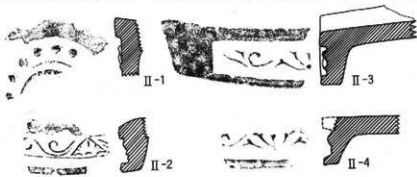


図2. 第2トレンチ出土瓦 (縮尺 1/4)

c. 第3トレンチ (図5)

遺構……堀-2は、第1次調査のB1・B2トレンチで検出した幅約3mの南北方向にはしる小堀状の遺構である。深さは、ボーリング調査の結果275cmを測った。底には暗茶褐色有機質泥砂が堆積し、水がある程度溜まっていた様子が伺える。この遺構はかなり早い時期に、一気に埋められたらしく、上層約1mから16世紀後半の遺物を多く検出した。

溝状遺構としては、ほぼ南北方向にのびる幅20~30cm、長さ130~140cmの溝-2・3と、溝-2に切られて東西方向にはしる溝-4を検出した。溝-2・3は一連のものと思われるが連結しない。溝-4は、第1次調査のB3トレンチで一部発掘されたつづきの溝で、幅約60cm、深さは30~50cmを測るが、遺物は検出しなかった。

土城状遺構としては、円形・四角形の大きささまざまな不整形な土城と、曲物等を埋設した土城4基(土城-2~5)を検出した。土城の大部分は近世の擾乱土城で、城跡に関連したものはない。土城-2~5は、2が板わくで作られていた以外は曲物を利用しており、それぞれに底板があり、内面にしっくいを塗り込めていた。曲物は一段しか残っていなかったが、それらは最近まで使用されていた肥壺と考えられる。また、トレンチの南西部に瓦樽わくを用いた井戸があったが、土城-2~5と関連する建物に付随するものと思われる。

遺物(図9)……堀-2検出の遺物(44~63)には土師質土器、瓦質土器、天目碗、備前焼、瓦がある。土師質土器には皿と土塀があり、皿は小皿と中皿に分けられる。小皿は、底部がわずかに上げ底になるヘソ皿のタイプ(44~46)、厚手で平底のタイプ(47)、薄手で口縁部が外反するタイプ(48)に分けられる。中皿は、上げ底で口縁内面に段をもつタイプ(49)、平底で口縁部が外反するタイプ(50)、体部が直線的に外傾してヘソ皿になるタイプ(51)がある。中皿の内面底部外周には圈線がめぐる。(47・49・50)は灯明皿に使用されたため、ススが付着している。(52・53)は土鍋の小破片で、体部にはススが付着している。瓦質土器としては、(54)の播鉢形土器が1点出土している。内面には12条単位の条線が施されてある。天目碗は3点(55~57)出土し、(55)は茶褐色を、(56・57)は黒褐色を呈す。備前焼は、壺(59~60)、播鉢(61)、筒状陶器(58)がある。壺はいずれも灰色系を呈し、(59)は口縁部がわずかに外反して開き、(60)は垂直に立上がる。(58)の筒状陶器は用途不明であるが、底部近くにススが付着している。備前焼は全てV期に比定される。丹波焼は、室町末~安土桃山期に比定される緒樋(62)が1点みられる。瓦は、薄手に成形された軒丸瓦(63)で、左回りの巴の尾は細く半周し、周囲に15個の連珠がめぐる。

溝-2からは土師質土器皿(64)1点、溝-3からは同じく皿(65・66)2点を検出した。(64・65)は小皿で、灯明皿に使用されたススが付着する。江戸時代に考えられる。

なお、表土からは、江戸中期の伊万里焼(67)、備前焼播鉢(68)、備前焼壺(69)などがみられ、備前焼2点はいずれもV期に比定される。

以上、伊丹城・有岡城時代の遺物としては、堀-1出土の遺物と表土出土の備前焼播鉢・壺があるが、それらは16世紀後半から末にかけてのものである。

d. 第4トレンチ (図6)

遺構……堀、溝状遺構、土壇、ピット遺構などを検出した。

堀については、南側の肩口を延長16.5mにわたって検出した。堀は、東へ行くに従って南へ振っており、トレンチの西半分には石垣を検出した以外は素掘りであった。堀の深さはボーリング調査の結果、堀の肩口から7.8mを測り、堀底にて厚さ35cmの灰青色微砂泥の堆積を認めた。石垣は、第2次調査の報告書に報告されている石垣の東延長にあたり、その延長はトレンチの西辺から約6mの所で終わっていた。石材には花崗岩がめだち、切石も多く使用され、石垣の東端には雨落ちの凹みが設けられていたが、裏込め石は認めなかった。石垣の高さについては、ユンボで深掘りして追究した結果、堀の肩口から2.8m程下がった所で石垣の底を確認し、石垣の高さが2.3~2.4mであることが判明した。つまり、石垣は堀が5m程埋まった段階で積まれたものであって、城跡には関係ないものである。石垣が積まれた後も埋め立ては進行し、国鉄福知山線の廃棄物であるコークスが利用され、その厚さは1.3mにもおよんでいた。

溝状遺構としては、東西方向に並行する溝-5と溝-6がある。溝-5は、幅130~170cm、深さ約15cmで、第1次調査のCトレンチへのびているが、第1次調査の報告書には報告されていない。埋土は茶褐色系の有機質砂泥である。溝-6は、溝-5の北側約3mの所にあり、土壇-8の西側50cmの所から始まって、西方へのびている溝である。幅は100~120cm、深さは約20cmで、埋土は暗褐色有機質泥土であった。溝-5・6ともに遺物を検出できなかったが、それらと切り合う土壇から古墳時代の須恵器片が出土しており、古墳時代後期の溝状遺構と考えている。他に検出した溝状遺構は全て現代のものである。

土壇・ピット遺構は、円形や四角形・不定形のを多数検出したが、全てが近代から現代のものであった。大部分の土壇はゴミ捨て土壇であったが、土壇-6・7から伊丹城・有岡城時代の遺物を数点検出した。土壇-8は、第1次調査の際、Cトレンチの北端で検出された土壇で、再度発掘を試みたが、内部がえぐられていて深いため、2.9m程の深さで断念した。土壇-8は堀の肩部に接してつくられており、城に関連したものとは考えられず、出土遺物から近世の井戸状の遺構と思われる。

遺物(図3)……古墳時代の須恵器については別の機会に譲り、ここでは土壇6・7・8の主な遺物を掲げた。土壇-6からは瓦質の碗(N-1)、V期の備前焼播鉢(N-2)を、土壇-7からは瓦質の皿(N-3)を検出した。16世紀後半のものであろう。土壇-8からは、江戸後期の薄手で良質の伊万里焼皿(N-4)が出土した。

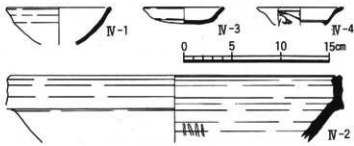


図3. 第4トレンチ出土遺物(N-1瓦質土器碗、N-2備前焼播鉢、N-3瓦質土器皿、N-4伊万里焼皿)

e. 立会調査の結果 (図4)

各種工事の立会では、堀の規模・方向等に主眼を置いた。ところが、第3トレンチ南東隅近くで、古墳時代の土師器壺・高坏の一群がユンボのツメに引っ掛かった。それは、出土状況からみて壺棺と考えられるが、別の機会に古墳時代の遺物を一括して報告したい。

○ 第1次調査で約17mの堀幅を確認している堀を発掘と立会調査で追究した。その結果、第4トレンチで検出した堀の南側ラインは、県道伊丹停車場線の中程でほぼ直角に南へ折れ曲り、38m程南でさらに東へ折れて、忠魂碑南隣の荒村寺敷地へと続き、その対岸線は幅を15m程に少なく見込んでも、忠魂碑の土壇下へもぐり込むことが判明した。このことは、主郭南西部の輪郭が角張らずに、「」状に窪んだ形態になることを示している。

○ 第2トレンチで曲り角を検出した堀-2は、県道伊丹停車場線の真中で直角に東へ折れ、県道下を東進することが分かった。幅については、東西軸は県道交差点で約7mを測り、南北軸は第2トレンチの西辺から西へ2.5mで西岸を確認し、その延長上における推定幅は3.5m程になり、堀幅は南北軸に狭く、東西軸に広くなるようである。中堀的なものであろう。

○ 第3トレンチで検出した堀-2は、南側にその延長を追究することができ、第3トレンチの南辺から3mの所で、堀-1と交わらないように2m程の間隔をおいて終結していた。堀幅は3m程で、小堀状のものと考えられる。

Ⅲ. まとめ

第5次調査では、発掘調査・立会調査の両面から、城に付随した堀や溝状遺構を検出し、追究したが、関連する建物遺構等は検出できなかった。

そこで、堀と堀-1との関係を少しく追究してみるに、主郭の南西部が「」状に窪んだ形態をとり、その一角を堀-1が「」状に巡って、1つの曲輪を形づくっているように見える。その辺りは、江戸時代の絵図のうち、『文化改正伊丹之図(天保7年写)』(16頁参照)、『天保15年伊丹郷町分間絵図』(巻頭写真)に「金ノ間」「金之丸アト」と記載され、『寛文9年伊丹郷町絵図』では、城を四角に描いてあるためか、その場所に近い堀の内側に「二之丸金ノ間」と記されており、江戸時代に「金ノ間」などと呼ばれていた所があったことが伺える。この「金ノ間」の正確な位置や性格は、絵図からは分からないが、「金ノ間」がある区画された一所を指すとすれば、堀と堀-1を鉤形に対峙させて区画したこの場所を当てることができるのではなからうか。そして、その性格については、正確な読み方が分からないため即断はできないが、城に関係した建造物等の検出がないことも考え合わせて、馬出的な機能をもった城ノ口の一形態ではないかと考えられる。

また、忠魂碑の土壇はその一部が堀の中にはみ出すことから、それは堀の内側を取り巻いていた土塁の一部が整形されたものと考えられ、天守台等の遺構にはならないようである。

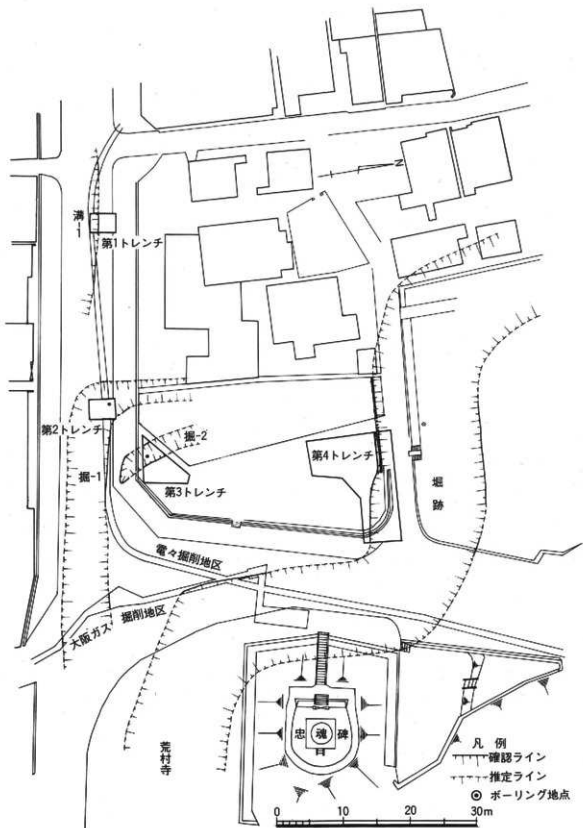


図4. 第5次発掘調査・立会調査地区図

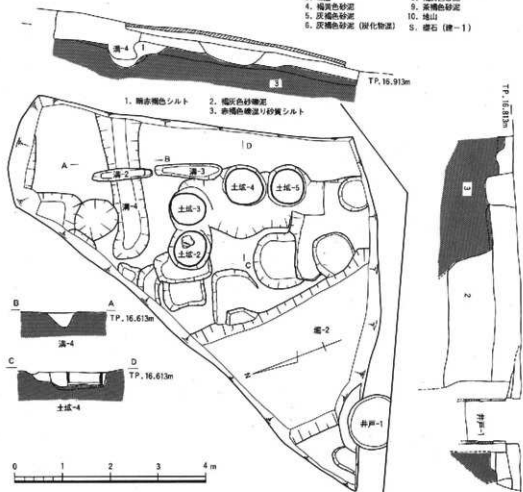
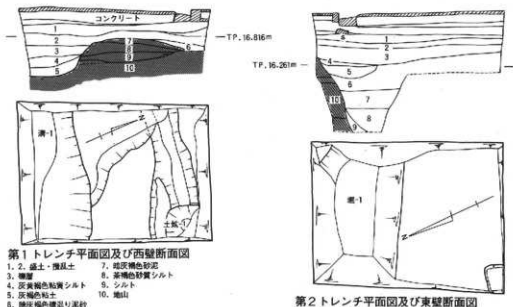


図5. 第1・2・3トレンチ平面図及び断面図

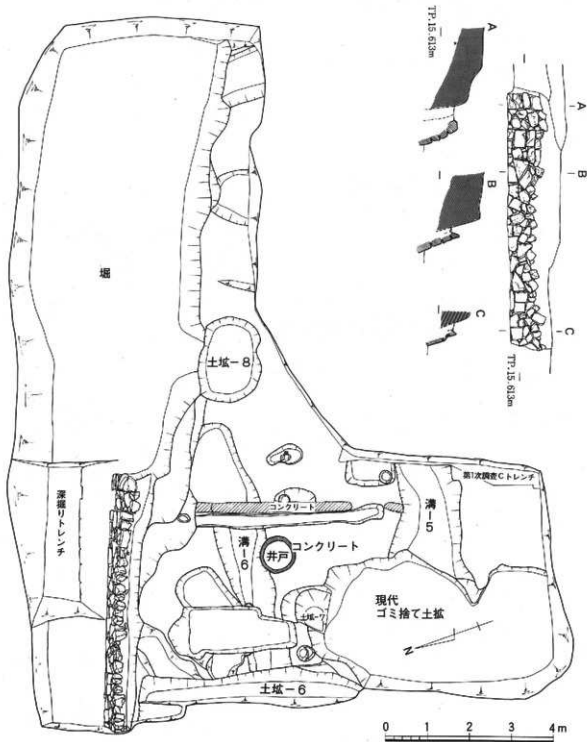


図6. 第4トレンチ平面図及び石垣実測図

Ⅳ. 遺物観察表

土師質土器

トレンナ 及 遺構	器形	番号	形態の特徴	成形・調整法	備考
第2トレンナ 掘1	中皿	1	<ul style="list-style-type: none"> ● 体部は、やや内弯気味に短く立ち上がる。 ● 平底底部。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 口縁部、横ナデ。 ● 底部内面、丁寧なナデ調整。 ● 外面に指頭圧痕及び布目痕あり。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 江戸時代 ● 灯明皿に使用され、口縁部にススが付着。 ● 口径：10.7cm
		2	<ul style="list-style-type: none"> ● 体部は、丸味をもつ底部から外傾しながら立ち上がる。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 口縁部、横ナデ。 ● 底部内面、丁寧なナデ調整。 ● 外面に指頭圧痕及び布目痕あり。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 江戸時代 ● 灯明皿に使用され、口縁部にススが付着。 ● 復元口径：10.2cm
		3	<ul style="list-style-type: none"> ● 体部は内弯気味に立ち上がる。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 口縁部、横ナデ。 ● 底部内面、ナデ調整。 ● 外面に指頭圧痕及び布目痕あり。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 江戸時代 ● 復元口径：10.8cm
		4	<ul style="list-style-type: none"> ● 平底底部。 ● 体部は内弯気味に立ち上がる。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 口縁部、横ナデ。 ● 底部内面、丁寧なナデ調整。 ● 外面に指頭圧痕及び布目痕あり。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 江戸時代 ● 灯明皿に使用され、口縁部にススが付着。 ● 内面に漆状にスス付着する部分あり。 ● 全体に黒ずんでいる。 ● 復元口径：11.0cm
	香炉形土器	5	<ul style="list-style-type: none"> ● 体部は底部よりわずかに内傾しながら立ち上がる。 ● 口縁端部は丸味をもつ。 ● U字状の切り込みをもつ。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 水挽き成形。 ● 体部内外面、横ナデ。 ● 底部はヘラ切り難し。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 香炉か。
	羽釜	6	<ul style="list-style-type: none"> ● 口縁部は、やや内傾気味に立ち上がり、端部は面をなす。 ● 口縁部外面、鉄釜同様の段がつく。 ● 鐙は貼り付けで、上向き気味に水平にのびる。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 内面及び口縁部、横ナデ。 ● 体部外面へラ削り。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 全体的に磨滅する。 ● 体部外面にスス付着。 ● 胎土は石英・長石砂含む。
	焙烙	7	<ul style="list-style-type: none"> ● 底部は丸味をもつ。 ● 体部は内弯気味に立ち上がる。 ● 口縁部は内傾し、端部は丸くおさめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 底部は粗い削りで、ザラ目。 ● 内面及び体部・口縁部は横ナデ。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 体部外面の一部にスス付着。
8		<ul style="list-style-type: none"> ● 体部は内弯気味に立ち上がる。 ● 口縁部は肥厚し、内傾する。 ● 底部は扁平で、開き気味に外傾する。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 底部は粗い削りで、ザラ目。 ● 内面及び体部・口縁部は横ナデ。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 外面全体にスス付着。 	
9		<ul style="list-style-type: none"> ● 底部は丸味をもちながら、外傾する。 ● 体部は肥厚しながら、垂直に立ち上がり、口縁部に至る。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 底部は粗い削りで、ザラ目。 ● 底部内面、ナデ。 ● 体部・口縁部は横ナデ。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 底部全体にススける。 	
10		<ul style="list-style-type: none"> ● 底部は丸味をもつ。 ● 体部は底部から丸味をもって肥厚しながら立ち上がる。 ● 口縁部は丸くおさめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 底部は粗い削りで、ザラ目。 ● 内面及び体部・口縁部は横ナデ。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 体部外面全体にスス付着。 ● 底部はススける。 	

トレンチ 造 構	器 形	番 号	形 器 の 特 徴	成 形 ・ 調 整 法	備 考
第2トレンチ 堀 1	焙 造	11	●底部は丸味をもつ。 ●体部は内傾しながら立ち上がる。 ●口縁部は肥厚し、丸味をもった面をもつ。	●底部は粗い削りで、ザラ目。 ●内面はていびいな横ナデ。 ●体部外面、難な横ナデ。	●口縁部から体部にかけて、スス付着。 ●全体にひずみ大きい。
		12	●体部と底部の境界は線をなし、体部は内傾気味に直線的に立ち上がる。 ●口縁端部は丸くおさめる。	●底部は粗い削りで、ザラ目。 ●内面及び体部・口縁部は丁寧な横ナデ。	●底部にスス付着。
		13	●体部と底部の境界は線をなし、体部は内傾気味に直線的に立ち上がる。 ●口縁部に吊手を通す穿孔あり。	●底部は粗い削りで、ザラ目。 ●底部と体部の境界に一定のヘラ削りを施し、のちに横ナデを行なう。 ●体部内面、口縁部は横ナデ。 ●体部外面は横ナデのちナデ。	●底部はスス付着。 ●体部外面ススける。 ●胎土に長石・石英砂及び金素母を含む。
	火 舎	14	●口縁部は内傾気味に短く立ち上がる。 ●口縁上端は面をなす。	●口縁部、貼り付け。 ●口縁上端部、ヘラ磨き。 ●体部外面、横ナデのち、軽くヘラ磨き。 ●体部内面、ナデ。 ●口縁部内面、横ナデ。	●肩部に花文を刻印す。 ●胎土は細かい石英・長石砂を多く含み、きめ密。
第3トレンチ 堀 2	小 皿	44	●ヘソ皿。 ●体部は直線的に外傾する。 ●口縁部は、わずかに肥厚し、外反気味におさめる。	●内面は丁寧な仕上げ。 ●外面に指頭圧痕あり。	●胎土は砂粒子細かく、良好。 ●口径：6.9cm
		45	●退化したヘソ皿。 ●体部は内寄気味に外傾して立ち上がる。	●口縁部、横ナデ。 ●内面は丁寧な横ナデ調整。 ●外面に指頭圧痕あり。	●内面底部にスス状のもの付着。 ●胎土は砂粒子細かく、良好。 ●全体にひずみあり。
		46	●ヘソ皿。 ●体部はわずかに肥厚し、直線的に外傾しながら立ち上がる。	●内面は丁寧なナデ調整。 ●外面に指頭圧痕あり。	●胎土は砂粒子細かく、良好。 ●復元口径：7.8cm
		47	●平底底部。 ●体部は外傾して低く立ち上がる。 ●器壁は全体に厚手。	●口縁部、横ナデ。 ●内面は丁寧な仕上げ。 ●外面にわずかに指頭圧痕を残す。	●灯明皿に使用され、口縁部にスス付着。 ●胎土は微塵にして緻密。 ●焼成堅緻。 ●復元口径：9cm
		48	●ヘソ皿。 ●体部は内寄気味に立ち上がる。 ●口縁部は外反する。	●薄手に成形。 ●口縁部、横ナデ。 ●内面、横ナデ。 ●体部と口縁部の境界に布目指頭圧痕。	●胎土は砂粒子細かく、緻密。 ●復元口径：7.8cm
	中 皿	49	●体部は直線的に外傾して立ち上がる。 ●口縁部はわずかに外反する。	●口縁部、強い横ナデ。 ●底部内面に團輪が通る。 ●底部内面、ナデ調整。 ●底部外面、布目痕。 ●全体的に丁寧な仕上げ。	●内面全体にススが付着し、黒ずむ。 ●胎土は砂細かく、良好。 ●焼成堅緻。 ●口径：12.1cm
50	●平底底部。 ●体部は直線的に外傾して立ち	●口縁部に強い横ナデ。 ●底部内面に團輪が通る。	●灯明皿に使用され、口縁部にスス付着。		

トレンチ 及 種	器 形	番 号	形 態 の 特 徴	成 形 ・ 調 整 法	備 考
第3トレンチ 講2	中 皿		<ul style="list-style-type: none"> 上がる。 ●口縁部は外反し、口縁端部は丸味をもつ。 	<ul style="list-style-type: none"> ●内面はナデ調整。 ●全体的に丁寧な仕上げ。 	<ul style="list-style-type: none"> ●胎土は砂細かく、良好。 ●焼成堅緻。 ●復元口径：11.1cm
		51	<ul style="list-style-type: none"> ●ヘソ皿。 ●体部は直線的に外傾して立ち上がる。 ●口縁部でわずかに外反する。 	<ul style="list-style-type: none"> ●体部内面及び口縁部、横ナデ。 ●外面に指頭正痕。 	<ul style="list-style-type: none"> ●胎土は砂細かく、良好。 ●焼成堅緻。 ●復元口径：11.5cm
	土 柄	52	<ul style="list-style-type: none"> ●体部は内傾しながら立ち上がる。 ●口縁部と体部の境界に、わずかに肥厚する突帯が廻る。 ●口縁部は上方につまみ出したように屈曲する。 	<ul style="list-style-type: none"> ●口縁部及び体部内面、横ナデ。 ●体部外面、雑なナデ。 	<ul style="list-style-type: none"> ●内外面にスス付着。 ●胎土は砂粒子細かく密。 ●焼成堅緻。
		53	<ul style="list-style-type: none"> ●体部は内傾しながら立ち上がる。 ●口縁部と体部との境界にわずかに肥厚する突帯が廻る。 ●口縁端部は内側に傾斜する面をもつ。 	<ul style="list-style-type: none"> ●口縁部及び体部内面、横ナデ。 ●体部外面、雑なナデ。 	<ul style="list-style-type: none"> ●外面にスス付着。 ●胎土は砂粒子細かく密。
第3トレンチ 講2	小 皿	64	<ul style="list-style-type: none"> ●底部平底。 ●体部は内弯気味に立ち上がる。 	<ul style="list-style-type: none"> ●内面、ナデ調整。 ●外面、指頭正痕及び布目痕。 	<ul style="list-style-type: none"> ●灯明皿に使用され、口縁部に3ヶ所、スス付着。 ●胎土は砂細かく良好。 ●口径：7.8cm
第3トレンチ 講3	小 皿	65	<ul style="list-style-type: none"> ●底部平底。 ●体部は内弯気味に立ち上がる。 	<ul style="list-style-type: none"> ●内面、ナデ調整。 ●外面、指頭正痕及び布目痕。 	<ul style="list-style-type: none"> ●灯明皿に使用され、口縁部に1ヶ所、ススが付着。 ●胎土は砂細かく良好。 ●口径：8cm
	中 皿	66	<ul style="list-style-type: none"> ●底部平底。 ●体部は肥厚し、外傾して低く立ち上がる。 	<ul style="list-style-type: none"> ●口縁部、横ナデ。 ●内面、ナデ調整。 ●外面、指頭正痕及び布目痕。 	<ul style="list-style-type: none"> ●灯明皿に使用され、口縁部外側に1ヶ所、ススが付着。 ●胎土は砂細かく、良好。 ●復元口径：11.8cm
第1トレンチ 講1	小 皿	1 1	<ul style="list-style-type: none"> ●ヘソ皿。 ●体部は肥厚し、外傾しながら立ち上がる。 ●口縁端部は丸くおさめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ●口縁部内面、ていねいな横ナデ。 ●体部外面の調整、雑。 ●体部外面に布目痕あり。 	<ul style="list-style-type: none"> ●口径：7.5cm
	中 皿	1 2	<ul style="list-style-type: none"> ●平底底部。 ●体部は外傾しながら立ち上がる。 ●口縁部は外反気味に少し屈曲し、端部は丸くおさめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ●体部内面から口縁部外面にかけて横ナデ調整。 ●底部内面はナデ調整。 ●底部内面に強い面線が廻る。 ●全体に丁寧な仕上げ。 	<ul style="list-style-type: none"> ●体部外面に布目痕あり。 ●灯明皿に使用され、口縁部2ヶ所にスス付着。 ●口径：10.8cm
		1 3	<ul style="list-style-type: none"> ●体部は外傾気味に立ち上がり、中程で外反気味に屈曲する。 ●口縁端部は丸くおさめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ●体部内面及び口縁部、丁寧な横ナデ。 ●体部外面に指頭正痕あり。 	<ul style="list-style-type: none"> ●復元口径：12.6cm
		1 4	<ul style="list-style-type: none"> ●体部は外弯しながら立ち上がる。 ●口縁部と体部との境界は肥厚し、口縁部は直線的に外傾する。 	<ul style="list-style-type: none"> ●体部内面及び口縁部、丁寧な横ナデ。 ●全体に丁寧な仕上げ。 ●体部外面に指頭正痕あり。 	<ul style="list-style-type: none"> ●復元口径：13.5cm

トレンチ 遺構	器形	番号	形態の特徴	成形・調整法	備考
第1トレンチ チ溝1	中皿		●口縁端部は尖り気味に丸くおさめる。		
第1トレンチ チ土壇1	焙焼	1-5	●底部は丸味をもつ。 ●口縁部と底部の境界は緩縁をもつ。 ●口縁部は肥厚して短く立ち上がり、丸くおさめる。	●底部は粗い削りで、ザラ目。 ●底部と口縁部との境界に一条のヘラ削り。 ●内面及び口縁部、丁寧な横ナデ。	●底部内外面ススける。

瓦質土器

トレンチ 遺構	器形	番号	形態の特徴	成形・調整法	備考
第3トレンチ チ瓶2	樽鉢	54	●口縁部欠損 ●体部は外反ぎみに立ち上がる。 ●平底底部。	●粘土盛巻きあげ成形。 ●ハケ調整ののちナデ。	●12条単位の条線を施す。
第4トレンチ チ土壇6	碗	IV-1	●体部は内弯気味に外傾する。 ●口縁部はわずかに屈曲し、外反気味におさめる。 ●口縁端部は丸くおさめる。	●体部ナデ。 ●口縁部、横ナデ。	●体部にわずかに指頭圧痕残る。
第4トレンチ チ土壇7	小皿	IV-3	●平底底部。 ●底部と体部との境界に細い段状の沈線が廻る。 ●体部は外反気味に立ち上がる。	●口縁部及び体部、横ナデ。 ●底部内外面ナデ。 ●底部に指頭圧痕あり。	●口径：8.2cm

備前焼

トレンチ 遺構	器形	番号	形態の特徴	成形・調整法	備考
第2トレンチ チ瓶1	徳利	30	●口縁部、底部欠損。 ●体部は中ほどでくびれて瓢形を呈す。 ●口頸部は細くすばまる。	●水挽きで薄手に成形。 ●外面に暗灰褐色の土布を施す。	●桃山～江戸初期。 ●胎土は細かく緻密。
		31	●玉縁口縁が下方に拡張する。	●横ナデ調整。	●IV b期。 ●胎土はセピア色を呈し、砂粒細かく緻密。
		32	●玉縁口縁が下方に拡張する。	●横ナデ調整。	●IV b期。 ●胎土は暗セピア色を呈し、細かい砂粒を多く含む。 ●部分的に大粒子の砂を含む。
		33	●口縁部は内弯気味に外傾しながら立ち上がる。 ●玉縁口縁が下方に拡張し、2条の緩凹縁が廻る。	●横ナデ調整。 ●頸部内面、ヘラ削り。	●V期。 ●口縁部外面に粗よりあり。 ●胎土は赤褐色を呈し、砂粒細かく緻密。

トレンチ 及 溝	器 形	番 号	形 態 の 特 徴	成 形 ・ 調 整 法	備 考
第3トレンチ 類2	壺	58	●平底底部。 ●体部は底部より直立して立ち上がる。	●粘土紐巻き上げ成形。 ●内面は横ナデ。 ●外面は横ナデのものナデ。	●V期。 ●胎土はチョコレート色を呈し、砂粒子細かく緻密。 ●内面に霏ふりあり。
		59	●口縁部は外傾気味に立ち上がる。 ●口縁端部はつまみ出したように外側に拡張する。	●内外面横ナデ。	●V期。 ●胎土は砂粒子細かく緻密。 ●口縁部から肩部にかけて自然釉のふき出しあり。
		60	●口縁部は直立する。 ●口縁端部はつまみ出したように外側に拡張する。	●横ナデ。 ●口縁部と肩部の接合部に強い横ナデ。	●V期。 ●胎土は砂を多く含む。
	器 形	61	●体部は底部より直線的に外傾しながら立ち上がり、口縁部は、やや内傾気味に上下に拡張する。 ●口縁部外面に三条の浅い凹線を廻らす。 ●口縁端部は丸くおさめる。 ●片口をもつ。	●体部に粘土紐の巻き上げ痕。 ●横ナデ。 ●12条単位のクシ目条線を雑に施す。	●V期。 ●表面は赤褐色。 ●胎土は砂粒子細かく緻密。
第3トレンチ 表土	器 形	68	●体部は直線的に外傾しながら立ち上がる。 ●口縁部は上方に拡張する。 ●口縁部外面に1条の凹線が廻る。 ●口縁端部は丸味をもち、外傾する。	●粘土紐巻き上げ成形。 ●横ナデ。 ●体部外面にナデ。 ●クシ目条痕あり。	●V期。 ●表面、暗赤褐色。 ●胎土は砂粒子細かく、緻密。 ●口縁部及び内面に霏ふりあり。
第4トレンチ 表土	壺	69	●口縁部は体部より直線的に外傾して立ち上がる。 ●下方に拡張する玉縁口縁。 ●口縁部外面に雑な凹線が廻る。	●口縁部横ナデ。 ●胴部内面、へつ削り。 ●粘土紐巻き上げ成形。	●Ⅳb期～V期。 ●胎土は砂多く含む緻密。 ●口縁部上端及び肩部外面に霏ふりあり。
第4トレンチ 土壇6	器 形	Ⅳ 1 2	●体部は直線的に外傾しながら立ち上がる。 ●口縁部は上方に拡張し、口縁端部はわずかに肥厚する。 ●口縁上端部に一条の凹線が廻る。	●粘土紐巻き上げ成形。 ●内外面、横ナデ。	●V期。 ●胎土は赤褐色を呈し、砂粒子細かく緻密。

丹波焼

トレンチ 及 溝	器 形	番 号	形 態 の 特 徴	成 形 ・ 調 整 法	備 考
第2トレンチ 類1	お徳煎炭 香が	15	●わずかに上げ底の底部。 ●体部は内寄気味に直立して立ち上がる。	●水挽きで薄手に成形。 ●底物は体部外面に土部を施す。	●江戸前期 ●土部は紫褐色。 ●胎土は砂粒子細かく密。
		16	●体部は「く」の字形に折れ、口縁部に至る。 ●口縁部は直線的に立ち上がり、口縁端部は左右に拡張し、上端は面をなす。	●水挽き成形。 ●口縁部から体部にかけて鉄粒を乱雑に施す。	●江戸前期 ●口縁部内面に炭葉の沈着あり。 ●胎土は石英・長石砂を多く含む、きめは粗。 ●口縁部にキセルでたたいたと思われる敲打痕あり。

トレンチ 及 連 構	器 形	番 号	形 態 の 特 徴	成 形 ・ 調 整 法	備 考
第2トレンチ 構 1	香 炉	17	<ul style="list-style-type: none"> ● 底部欠損。 ● 体部は外弯しながら立ち上がる。 ● 口縁端部は左右に拡張し、上端は面をなし、沈線状のへこみがある。 ● 体部に貼り付け把手あり。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 水挽き成形。 ● 体部外面に鉄輪を施す。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 江戸前期。 ● 口縁部から内面にかけて自然釉。 ● 胎土は砂を多く含み、きめは粗。 ● 火入れに使用され、口縁部にキセルによると思われる敲打痕があり、口縁端部全面を耗損す。
		18	<ul style="list-style-type: none"> ● 体部は「く」の字形に折れ外反気味に口縁部に至る。 ● 口縁端部は左右に拡張し、上端は面をなす。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 水挽き成形。 ● 胎土は体部外面に鉄輪を施す。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 江戸前期。 ● 胎土は石英・長石砂を多く含み、きめは粗。 ● 火入れに使用され、口縁部にキセルによると思われる敲打痕があり、口縁端部全面を耗損す。
	指 環	19	<ul style="list-style-type: none"> ● 体部は直線的に外傾しながら立ち上がる。 ● 口縁部は直立し、上下に拡張し、断面三角形を呈す。 ● 口縁端部は短く外側につまみ出す。 ● 口縁部外面に1条の凹線が廻る。 ● 片口をもつ。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 粘土紐巻き上げ成形。 ● 横ナデ。 ● 体部外面に指頭圧痕あり。 ● 7本単位のクシ目条線を施す。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 胎土は砂多く緻密。
		20	<ul style="list-style-type: none"> ● 体部は直線的に外傾しながら立ち上がる。 ● 口縁部は直立し、上下に拡張し、断面三角形を呈す。 ● 口縁端部は短く外側につまみ出す。 ● 口縁部外面に1条の凹線が廻る。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 粘土紐巻き上げ成形。 ● 横ナデ。 ● 体部外面に指頭圧痕あり。 ● 8条単位のクシ目条線を乱雑に施す。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 胎土は砂多く緻密。 ● 内面に霜ふりあり。
		21	<ul style="list-style-type: none"> ● 体部は直線的に外傾しながら立ち上がる。 ● 口縁部は外反気味に直立する。 ● 口縁端部は丸くおさめる。 ● 口縁部外面凹線が廻る。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 粘土紐巻き上げ成形。 ● 横ナデ。 ● クシ目条痕あり。 ● 外面に赤褐色の上部を施す。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 江戸前期。 ● 胎土は石英・長石砂を含み粗。
		22	<ul style="list-style-type: none"> ● 平底底部。 ● 体部は直線的に外傾しながら立ち上がる。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 粘土紐巻き上げ成形。 ● 体部、横ナデ。 ● 底部、ナデ調整。 ● 8条単位のクシ目条線を体部内面に密に施し、底部内面には同心円状に施す。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 江戸前期。 ● 胎土は砂粒を多く含み粗。 ● 底部にロクロ台の痕跡（下駄印）あり。
23	<ul style="list-style-type: none"> ● 体部は底部より外弯気味に立ち上がる。 ● 口縁部は直立する。 ● 口縁端部は面をなし、一条の凹線が廻る。 ● 平底底部。 ● 口縁部外面に2条の凹線を廻らす。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 粘土紐巻き上げ成形。 ● 横ナデ。 ● 体部外面下半に指頭圧痕。 ● 底部と体部との境はへつ附り。 ● 7条単位のクシ目条線を体部内面に密に施し、底部には同心円状に施す。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 江戸初期。 ● 内外面に自然釉がかかる。 ● 胎土は石英・長石砂を含み、緻密。 ● 体部内面下半、使用による磨滅激しい。 		

トレンチ 遺構	器形	番号	形態の特徴	成形・調整法	備考
第2トレンチ遺1	甕	24	<ul style="list-style-type: none"> ●体部は内弯しながらすぼまる。 ●口縁部は左右に拡張し、上端部は幅の広い面をもつ。 ●体部上半に貼り付け環状耳をもつ。 ●口縁端部及び体部外面にカキ目状の凹線を施す。 	<ul style="list-style-type: none"> ●粘土継ぎ上げ成形。 ●施釉は赤褐色の土部を施す。 	<ul style="list-style-type: none"> ●江戸前期。 ●胎土は砂粒を多く含む緻密。
第3トレンチ遺2	楕桶	62	<ul style="list-style-type: none"> ●体部は内弯気味に立ち上がる。 ●口縁端部は水平な面をもつ。 	<ul style="list-style-type: none"> ●横ナデ。 	<ul style="list-style-type: none"> ●宝町末～安土桃山。 ●胎土は緻密にして緻密。 ●口縁端部に自然釉付着。

瀬戸焼系

トレンチ 遺構	器形	番号	形態の特徴	成形・調整法	備考
第3トレンチ遺2	天目碗	55	<ul style="list-style-type: none"> ●底部欠損。 ●体部は直線的に外傾しながらたちあがり、口縁部で一度内傾し、さらに「く」の字にゆるやかに外反する。 	<ul style="list-style-type: none"> ●水挽き成形。 	<ul style="list-style-type: none"> ●瀬戸系 ●宝町末期～桃山(16世紀後半) ●茶褐色釉。 ●口縁部、茶灰色に変色。 ●胎土は砂粒子細かいが、きめは粗。
		56	<ul style="list-style-type: none"> ●口縁部欠損。 ●体部は内弯気味にたちあがる。 ●削り出し高台 	<ul style="list-style-type: none"> ●水挽き成形。 ●底部へつ削り。 ●体部下平の施釉は等間隔にたらし書き。 	<ul style="list-style-type: none"> ●瀬戸系。 ●宝町末～桃山(16世紀後半) ●内面、外面体部に黒色釉を施す。 ●胎土は砂粒子細かく密。
		57	<ul style="list-style-type: none"> ●体部は直線的に外傾しながらたちあがり、口縁部で一度わずかに内傾し、さらにゆるやかに外反する。 	<ul style="list-style-type: none"> ●水挽き成形。 	<ul style="list-style-type: none"> ●瀬戸系。 ●宝町末～桃山(16世紀後半) ●内外面に黒褐色釉を施す。 ●口縁端部に茶褐色釉を施す。

唐津焼

トレンチ 遺構	器形	番号	形態の特徴	成形・調整法	備考
第2トレンチ遺1	片口鉢	25	<ul style="list-style-type: none"> ●体部は内弯気味に立ち上がる。 ●口縁部は外側へ折り曲げ、玉縁状を呈す。 ●口縁端部は面をもつ。 ●貼り付け片口。 	<ul style="list-style-type: none"> ●水挽き成形。 ●体部下平へつ削り。 ●施釉は体部上半及び内部に塗付する。 	<ul style="list-style-type: none"> ●刷毛目唐津。 ●江戸前半。 ●体部外面、白釉を施したのち施釉。 ●胎土は緻密にして緻密。
		26	<ul style="list-style-type: none"> ●体部は腰部より直線的に外傾しながら立ち上がる。 ●口縁部ではんのわずかに外反する。 ●口縁端部は丸味をもつ。 ●削り出し高台。 	<ul style="list-style-type: none"> ●水挽き成形。 ●腰部、へつ削り。 ●施釉は体部より上に行なう。 ●内面、螺旋状に白釉を刷毛で施す。 	<ul style="list-style-type: none"> ●刷毛目唐津。 ●江戸前半。 ●ロクロは左回転。 ●胎土は砂粒子細かく緻密。
		27	<ul style="list-style-type: none"> ●口縁部欠損。 ●体部は内弯気味に外傾して立ち上がる。 ●口縁部は外反する。 	<ul style="list-style-type: none"> ●水挽き成形。 ●腰部から体部にかけてへつ削り。 ●高台端部、面取り。 ●施釉は腰部より上に行なう。 	<ul style="list-style-type: none"> ●(木原山)唐津染付。 ●江戸前半。 ●見込み、草文。 ●貫入あり。

トレンチ 及 溝	器 形	番 号	形 態 の 特 徴	成 形 ・ 調 整 法	備 考
第2トレンチ 掘1	碗	28	● 削り出し高台。		● 胎土は微細にして緻密。
			● 口縁部欠損。 ● 体部は内弯気味に立ち上がる。 ● 削り出し高台。	● 水挽き成形。 ● 腰部、ヘラ削り。 ● 畳付き部は施輪せず。 ● 内外面、螺旋状に白釉を刷毛で施す。	● 刷毛目唐津。 ● 江戸前半。 ● 二次火を受け、外面白濁化。 ● 胎土は砂粒子細かく緻密。 ● 色調は淡茶色。
		29	● 体部は腰部より直線的に外傾しながら立ち上がる。 ● 口縁部は丸くおさめらる。 ● 削り出し高台。	● 水挽きで薄手に成形。 ● 腰部、ヘラ削り。 ● 高台増部、面取り。 ● 畳付き部は施輪せず。 ● 内外面、螺旋状に白釉を刷毛で施す。	● 刷手目唐津。 ● 江戸前半。 ● 胎土は微細にして緻密。 ● 貫入あり。 ● 色調は淡緑灰色。

伊万里焼

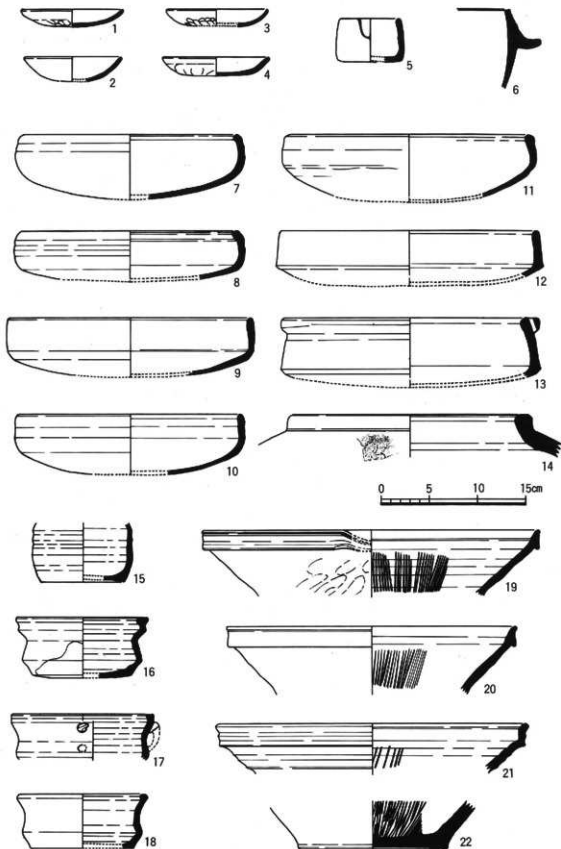
トレンチ 及 溝	器 形	番 号	形 態 の 特 徴	成 形 ・ 調 整 法	備 考
第2トレンチ 掘1	碗	36	● 体部は内弯して立ち上がる。 ● 削り出し高台。	● 水挽きで薄手に成形。 ● 腰部はヘラ削りか。 ● 畳付き部は施輪せず。	● 染付。 ● 江戸中期。 ● 体部、松葉・菊花(いも版)文。 ● 碗底「大明年製」銘。 ● 畳付き内面に重ね焼きの砂付着。
		37	● 体部は内弯気味に立ち上がる。 ● 削り出し高台。	● 水挽きで薄手に成形。 ● 畳付き部は施輪後、ふき取りか。	● 染付。 ● 江戸中期。 ● 体部、草花文(いも版)。 ● 濃ダミ・薄ダミ手法。 ● 輪葉は青味を帯びる。
		38	● 体部は腰部から口縁部にかけて、ほぼ直線的に立ち上がる。 ● 削り出し三日月高台。	● 水挽き成形。 ● 腰部、ヘラ削りか。 ● 畳付き部は施輪後、削り取り。	● 染付。 ● 江戸中期。 ● 雑な網目文。 ● 輪葉のとけ具合あまく、虫喰いあり。 ● 色調、灰白色。
		39	● 口縁部欠損。 ● 体部は内弯気味に立ち上がる。 ● 不正円な削り出し高台。	● 水挽き成形。 ● 畳付き部は施輪せず。	● 染付。 ● 江戸中期。 ● 網目文。 ● 輪厚は不均等。 ● 碗底に虫喰いあり。 ● 畳付き内面の一部に重ね焼きの砂付着。 ● 色調は青味を帯びた灰白色。
		40	● 口縁部欠損。 ● 体部は内弯しながら立ち上がる。 ● 削り出し高台。	● 水挽きで薄手に成形。 ● 畳付き部は施輪後ふき取りか。	● 染付。 ● 江戸中期。 ● 外面、高台部に團輪。 ● 輪厚は不均等。
	徳利	41	● 体部は内弯気味に立ち上がる。 ● 削り出し高台。	● 水挽きで薄手に成形。 ● 内面は乱雑に施輪し、無輪部あり。 ● 畳付き部は施輪せず。	● 染付。 ● 江戸初期。 ● 輪葉は灰白色を呈し、輪厚は不均等。

トレンチ 及 標	器 形	番 号	形 態 の 特 徴	成 形 ・ 調 整 法	備 考
第2トレンチ標1					<ul style="list-style-type: none"> ●高台内側及び碗底に重ね焼きの砂付着。 ●虫喰いあり。
	皿	42	<ul style="list-style-type: none"> ●体部は外傾しながら広がる。 ●削り出し三日月高台。 	<ul style="list-style-type: none"> ●水挽き成形。 ●腰部へつ削り。 ●施釉は腰部より上に乱雑に行なう。 ●見込みは蛇の目に削り取り、その後、蛇の目を降いて施釉。 	<ul style="list-style-type: none"> ●白磁。 ●江戸初期。 ●高台内側に重ね焼きの砂付着。
第3トレンチ標2	碗	67	<ul style="list-style-type: none"> ●口縁部欠損。 ●体部は内湾しながら立ち上がる。 ●削り出し高台。 	<ul style="list-style-type: none"> ●水挽き成形。 ●腰部、へら削り。 ●豊付き部は施釉せず。 	<ul style="list-style-type: none"> ●染付。 ●江戸中期。 ●碗底に一条のひび割れあり。 ●造グミ・傳グミ手法。 ●高台内外面に重ね焼きの砂付着。
第4トレンチ	皿	IV-4	<ul style="list-style-type: none"> ●体部は直線的に外傾しながら立ち上がり、口縁部は短く外反する。 ●口縁部は肥厚し、尖り気味におさめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ●水挽きで薄手に成形。 	<ul style="list-style-type: none"> ●染付。 ●江戸後期。 ●唐草文。 ●釉薬は青味を呈し、細かい気泡を多く含む。

中国製磁器及びその他

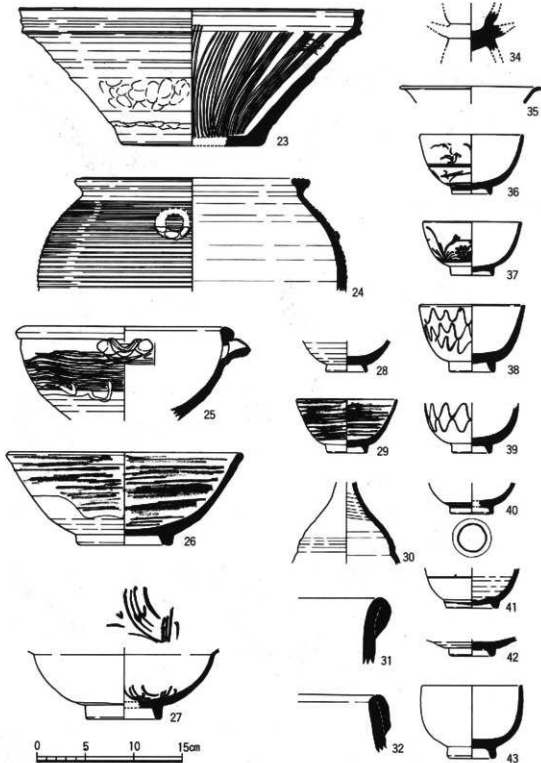
トレンチ 及 標	器 形	番 号	形 態 の 特 徴	成 形 ・ 調 整 法	備 考
第2トレンチ標1	杯台	34	<ul style="list-style-type: none"> ●中央部に皿状の受け皿をもつ。 ●受け皿の下に裾広がりの脚部をもつ。 ●受け皿の上には外傾する杯部がつく。 	<ul style="list-style-type: none"> ●脚部・皿部・杯部を接合。 ●釉薬を全面に厚く塗付。 	<ul style="list-style-type: none"> ●中国製青磁。 ●受け皿上面に2ヶ所印刻された花紋あり。 ●貫入あり。
	皿	35	<ul style="list-style-type: none"> ●体部は外傾して立ち上がる。 ●口縁部は外反する。 ●口縁端部は丸くおさめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ●水挽きで薄手に成形。 	<ul style="list-style-type: none"> ●中国製白磁。
	碗	43	<ul style="list-style-type: none"> ●体部は腰部で内湾し、ほぼ垂直に立ち上がる。 ●口縁端部は丸くおさめる。 ●削り出し高台。 	<ul style="list-style-type: none"> ●水挽き成形。 ●豊付き部は施釉せず。 	<ul style="list-style-type: none"> ●色調は淡黄灰色を呈す。 ●釉薬は透明で薄く均一に塗付。 ●二重貫入あり。 ●豊付き内側に重ね焼きの砂付着。 ●見込みに不純物が付着。

図7 第2トレンチ出土遺物



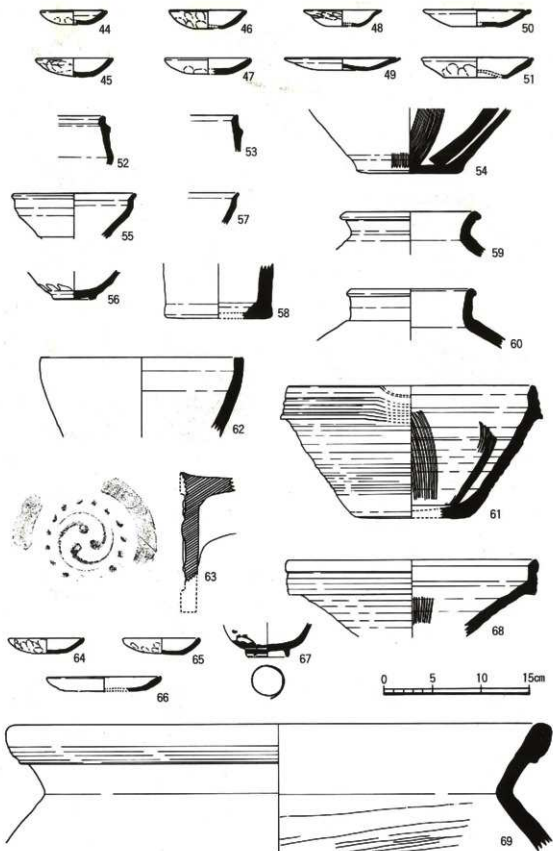
1～14土師質土器、15～22丹波焼

図8 第2トレンチ出土土遺物

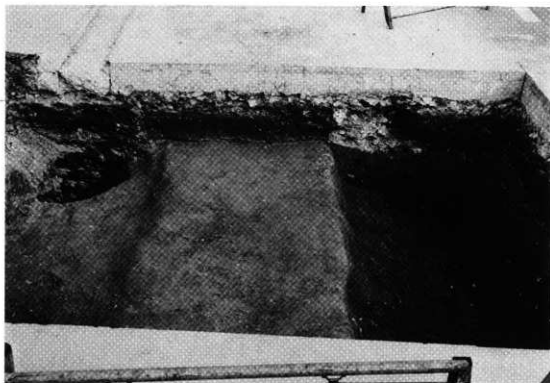


23・24丹波焼、25～30唐津焼、31～33備前焼、34・35中国製磁器、36～42伊万里焼、43その他（施精陶器）

図9 第3トレン子出土遺物



44～53土師質土器、54瓦質土器、55～57瀬戸天目、58～62備前焼、63瓦当(以上、埴-2出土)、
64土師質土器(溝-2出土)、65・66土師質土器(溝-3出土)、67伊万里焼、68・69備前焼(以上、表
土出土)



第1トレンチ(西から)



第2トレンチ(東北隅部)



第3トレンチ(南から)



第3トレンチ(東から)



第4トレンチ(北から)

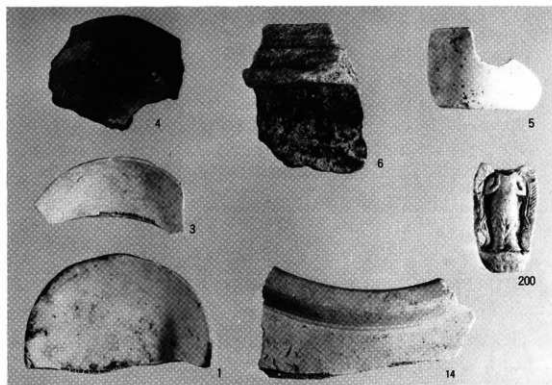


第4トレンチ(西から)

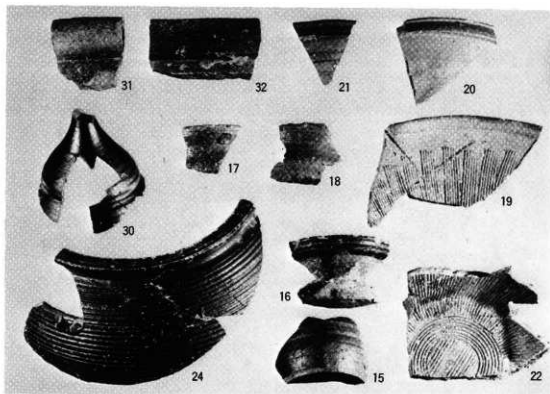


土師質土器 (I-1・2第1トレンチ、45・64・65
第3トレンチ、IV-3第4トレンチ)

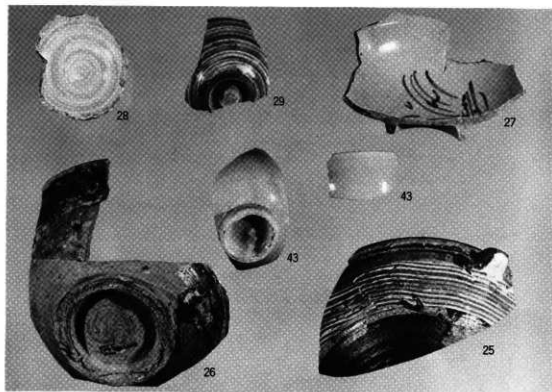
丹波焼 (23第2トレンチ) 備前焼 (59・60第3トレンチ)



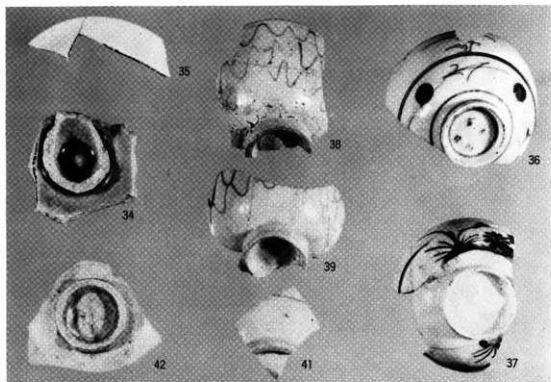
第2トレンチ出土土師質土器、念持仏土製品



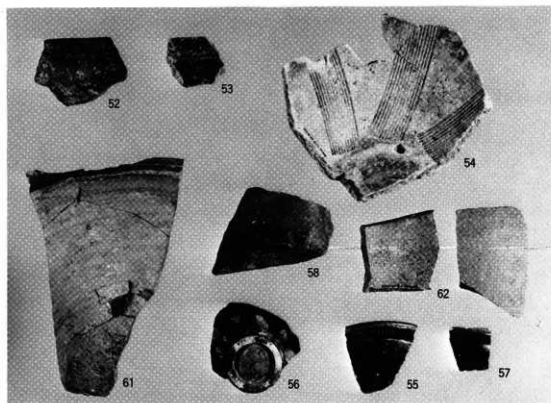
第2トレンチ出土備前焼(30・31・32)、丹波焼(16~22・24)



第2トレンチ出土唐津焼(25~29)、その他陶器(43)



第2 トレンチ出土中国製磁器 (34・35)、伊万里焼 (36～39・41・42)



第3 トレンチ出土土師質土器 (52・53)、瓦質土器 (54) 備前焼 (58・61・62)、
瀬戸天目 (55～57)

有岡城跡第7次発掘調査報告

1. 調査地 伊丹市宮ノ前3丁目6番1号
猪名野神社境内 宮司官舎兼斎館敷地
2. 調査期間 1980年5月15日～5月18日
3. 調査者 浅岡俊夫 (伊丹市教育委員会)
橋本 久 (大阪経済法科大学)
4. 調査概要



位置図 (1/10,000)

当該地は、有岡城跡の北端に位置する猪名野神社境内の一角にあたり、伊丹段丘の東縁に接する所にあるが、国史跡指定地からは除外されている。史跡指定されている境内地の周囲には土塁が巡っており、西側に巡る土塁が良好な状態で残存し、往時の有岡城を偲ぶことができるのに対して、東側の土塁は低平でその基底部をわずかに留める程度である。この東側の土塁の延長線上に隣接する当該地は、住宅化のためその痕跡すら留め得ない状況を呈している。

発掘調査は、宮司官舎の建て替えに伴って実施し、土塁の痕跡やそれに関連する遺構の有無を考慮に入れて、東西方向に1本のトレンチを入れた。トレンチは、伊丹段丘の崖縁から4.2mの所から西へ長さ11m、幅2mの規模で設定した。

調査の結果、溝状遺構(溝-1・2)2本、土壇8本を検出した。それらの遺構は近世から現代のもので、土塁はその痕跡すら残らないまでに攪乱されていた。しかし、地山の起伏状況や土層の堆積状況から幅約5m、深さ70cm程の溝状遺構(溝-3)を想定した。溝-3の東側は溝-2で削られ、立上がり部分は不明であるが、溝-3は土塁の内側に巡らされた幅広の溝状施設と考えられる。但し、溝-3の堆積土層から遺物は検出しなかった。

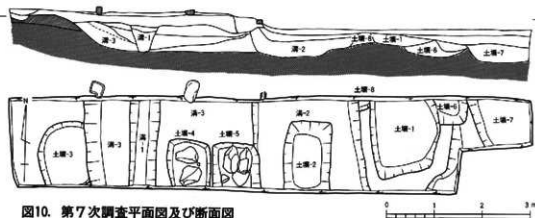


図10. 第7次調査平面図及び断面図



トレンチ全景(西から)



北壁断面

有岡城跡第9次発掘調査報告

1. 調査地 伊丹市東有岡1丁目12
2. 調査期間 1981年7月8日～7月12日
3. 調査者 浅岡俊夫（伊丹市教育委員会）
4. 調査概要

当該地は、国鉄伊丹駅の東側で、城の主郭が立地する伊丹段丘の東縁部にあたる。発掘調査は、大阪ガス株のガスバーナハウス建設に伴って実施し、伊丹段丘の限界を確認するために、段丘辺に直交する長さ8m、幅2mの東西方向のトレンチを設定した。

調査の結果、現地表下約250cmの深さで、伊丹段丘の東限を画する地山を検出した。猪名川に面して比高差が10m以上あったと思われる段丘壁は、ほとんど削平され



位置図 (1/10,000)

て、1m強しか残存していなかった。今まで、伊丹段丘の東限は現在の猪名井用水路の西岸と考えられていたが、その東限の範囲は猪名井用水路西岸にある猪名井用水ポンプ室の西壁から約10m西へ奥まることが確認できた。城跡の範囲は、その伊丹段丘の限界に一致し、削平されて不明確であった城跡の東限の一部を明らかにできた。

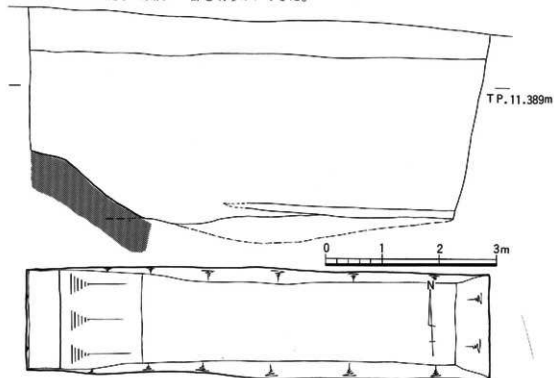


図11. 第9次調査平面図及び断面図



発掘調査地全景



伊丹段丘立上がり部(東から)

有岡城跡発掘調査報告書Ⅴ

昭和58年3月31日

編集 有岡城跡調査団

発行 伊丹市教育委員会

〒664 伊丹市千僧1丁目1番地

TEL.0727(83)1234

印刷 アイシー印刷(株)

TEL.0798(66)0741

